

平成30年度（2018年度） 博士学位論文

2019年3月 関西大学審査学位論文

近世期日本における『近思録』の受容と注釈史
— 東アジアの観点から見ると —

関西大学大学院東アジア文化研究科

ジェレミー ウッド

目次

序論.....	1
第1章 近世日本の現存する『近思録』資料——その書誌	
第一節 近世日本の『近思録』学に関する先行研究.....	5
第二節 現存する近世日本『近思録』注釈書・講義録とその所蔵先.....	6
第三節 山崎闇斎の『近思録』研究についての一考察.....	22
第2章 中国と朝鮮の『近思録』研究とその日本における影響.....	23
第3章 東アジアの書院・塾・藩校における『近思録』の位置	
第一節 本章の目的と方法.....	28
第二節 日本の藩校における『近思録』の用法とその読書順序.....	29
第三節 日本儒者の著作に見られる『近思録』の読書順序に関する記述.....	35
第四節 中国儒者の著作に見られる『近思録』の読書順序に関する記述.....	40
第五節 朝鮮儒者の著作に見られる『近思録』の読書順序に関する記述.....	43
第4章 近世前期の『近思録』研究 一 一貝原益軒の『近思録』研究一	
第一節 本章の目的と方法.....	48
第二節 『近思録備考』と「近思録説」の構成上の特徴.....	48
第三節 『近思録備考』と「近思録説」の道体篇に見られる相違点と特徴.....	52
第四節 貝原益軒の『近思録』研究における思想的特徴.....	57
第5章 近世前期の『近思録』研究 二 一伊藤仁斎の『読近思録鈔』について一	
第一節 本章の目的と方法.....	71
第二節 伊藤仁斎と「無極而太極」の解釈.....	72
第三節 伊藤仁斎の理観と「無極而太極」.....	77
第四節 太極と動静の関係.....	79
第五節 「太極本無極也」の解釈.....	81
第六節 伊藤仁斎の葉采注批判.....	82
第七節 「無極之真」と「二五之精」.....	84

結論.....88

参考文献.....92

資料篇

序論

一、研究背景と先行研究

『近思録』という書物は、道学の集大成者である南宋の朱熹（1130～1200年）がその友人の呂祖謙（1137～1181年）の協力を得て14巻に編纂し、淳熙3（1176）年に刊行したものである。その内容としては、道学の宇宙論や修己治人などの根本的学説を紹介することを目的とし、北宋の四人の道学者（四子）である周惇頤（1017～1073年）、程顥（1032～1085年）、程頤（1033～1107）、張載（1020～1077年）のそれぞれの著書や語録から重要と思われる部分を摘出したもので、道学の入門書になることを企図している。中国のみならず、日本や朝鮮など東アジア地域において儒者の必読書となった。これまでの『近思録』に関する研究は、ほとんどはその成立過程や北宋の儒者の原書との関係に関するものであり、日本では山崎道夫の研究がその代表的なものである。

近世期日本は宋学の影響を強く受けたが、日本における『近思録』の受容と注釈史に関する先行研究は僅かである。そのもっともまとまったものとしては山崎道夫の『近思録』訳注（山崎道夫『近思録』「中国古典新書」、（明德出版社 1967）¹の「解説」である。その中に、日本における代表的『近思録』注釈書が紹介されており、特に中国の『近思録』注釈書との関係が指摘されている。アメリカの陳栄捷の『近思録』英訳の解説においても、近世日本の『近思録』注釈書について取り上げられているが、各書の簡単な紹介にとどまっている。日本『近思録』注釈書のいかなるものが残存しているかを知るためには山崎と陳両氏の研究は重要なものとなっている。しか

¹ 山崎道夫『近思録』「中国古典新書」、（明德出版社 1967）

し、近世日本における儒者の各学派の『近思録』学に関する先行研究はほとんどなく、山崎闇斎（1618～1682）の崎門派の『近思録』理解のみが目立つ程度である。

このように、『近思録』に関する先行研究はほとんどその成立過程に関するものであり、また日本の『近思録』学が取り上げられても、それがその注釈書の簡単な紹介にとどまる。

以上のことから近世期日本における『近思録』の注釈史の全体像や、中国と朝鮮の『近思録』研究との関係に関する先行研究は不足していることがわかる。この問題点を解決するために、本研究はまず近世の『近思録』注釈書を分析し、その特徴を明らかにする方法を採用する。これにより、日本儒者は『近思録』をどのように理解したのか、その特色は何か、また、どれほど中国や朝鮮の影響を受けたかを解明するために、日本の『近思録』研究を整理分析するとともに、中国や朝鮮の多くの『近思録』注釈書と比較しつつ考察する。

二、研究目的

本研究の目的は、中国や朝鮮の影響に注意を置きながら、近世期日本における儒者の諸学派の現存する『近思録』注釈書や講義録を確認し、そのいくつかの例を考察することにより、近世日本、ないし東アジア全体における『近思録』の研究史の一側面を明らかにすることにある。本研究は、日本の『近思録』研究を起点としながら、中国や朝鮮にも着目することにより、宋学の哲学が東アジアにおいていかに受容し、理解されていたかの一側面が明らかになることが期待される。

三、研究方法と本論文の構成

本研究が採用する研究方法は、まず伝世する日本の『近思録』注釈書を確認し、それらを収集して考察する。次に、中国および朝鮮

の注釈書と比較し、それらの影響を明らかにする。そして、その影響を解明した上で、近世日本の儒者の『近思録』研究の一例として、貝原益軒や伊藤仁斎の『近思録』研究を中心に考察し、その特殊を明らかにする。さらに、日本の藩校や私塾、そして中国や朝鮮の書院という実際の教育現場において、『近思録』がどのように利用され、どのような位置をもっていたかについて検討する。具体的に、以下の順序で本研究を進めたい。

第1章では近世日本の『近思録』の受容とその理解を研究する第一歩として、まず本章においては日本における近世期の現存する『近思録』関連資料とその所蔵先を国文学研究資料館などの日本古典籍総合目録データベースなどを利用し、できる限り網羅的に調査することを目的とした。

大2章では中国や朝鮮の『近思録』注釈書を紹介し、それらの近世期日本の『近思録』研究に与えられた影響を明らかにすることを目的とする。第一節では、中国の『近思録』注釈書とその影響を中心に検討する。第2節では、まず朝鮮朝の『近思録』注釈書を紹介し、次に李滉や山崎闇斎を中心に、日本の『近思録』研究において朝鮮儒者がどのような影響を与えたかについて検討する。まず、中国歴代の『近思録』注釈書について検討する

第3章では、『近思録』が東アジアの教育機関においてどのように用いられていたかについての考察を試みる。第三節では、日本儒が『近思録』をどの順で読んだかを、それぞれの儒者の著作を通して検討してみたい。第四節では、中国の学則・学規または著述を考察し、初学者の教育課程における『近思録』の読書順序について考察する。最後に、日本と中国と同様に、第五節では朝鮮の学則・学規などを見ることを通し、『近思録』が朝鮮の儒者の間でどの順で読まれ、どのように用いられたかについて検討する。本章の考察により、東アジアの教育機関において『近思録』が四書の入門書としての役割を果たしていたかを明らかにする。

第4章では、の第一目的はまず、『近思録備考』と「近思録説」の

異同を明らかにすることである。まず、篇題、条数等に着目し、構成上この二書はどのように異なっているかを考察する。次に、両書の道体篇第1条に関する益軒自身の説を中心に、「近思録説」において思想的新展開が見られるか否か、また『近思録備考』と比べてどのような特徴が見られるかを明白にする。『近思録備考』は『朱子語類』・『朱子文集』・『性理大全』先儒の書から多くの語を引いているが、本章においてはこれらを取りあげず、益軒自注のみを対象とする。最後に、「近思録説」の道体篇第1条において益軒の『大疑録』と同様、朱子学に対する批判が見られるか否かを考察する。本章第二の目的は、益軒の『近思録』研究における思想的特徴を明らかにすることである。まず、益軒の『近思録集解』葉采注批判を通し、益軒の解釈の特徴について検討する。次に、愛養精力・敬・静坐を中心に、益軒の『近思録』研究に見られる存養工夫論の特徴について考察する。

第5章では、伊藤仁斎の『読近思録鈔』について考察を試みたい。本章の目的は、仁斎がどのように『近思録』を解釈し、その『読近思録鈔』の特色はどこにあるかを明らかにすることである。まず、仁斎の「無極而太極」解釈について考察する。次に仁斎の理気論と動静の解釈について検討する。次に仁斎の葉采注批判について考察する。そして最後に、仁斎の「真」と「精」に関する解釈を考察する。

第1章

近世日本の現存する『近思録』資料——その書誌

はじめに

近世日本の『近思録』研究に関する先行研究は少ないため、日本の『近思録』注釈書等は全部でどれほどあったかはまだ解明されていないのが現状である。そのため、近世日本の『近思録』の受容とその理解を研究する第一歩として、まず本章においては日本における近世期の現存する『近思録』関連資料とその所蔵先をできる限り網羅的に調査することを目的とした。その結果、105点の資料を確定することができた。さらに、先行研究において今まで指摘されて来なかった資料を24点確認しえた。

ここでは、わずかではあるが、まず日本の『近思録』関連資料を紹介した先行研究について整理してみたい。次に本研究により確認した現存する近世日本の『近思録』資料とその所蔵者を紹介することとする。

一、 近世日本の『近思録』学に関する先行研究

近世日本の『近思録』資料を最も詳しく考察した先行研究として山崎道夫の『近思録』和文抄訳における解題²と、陳榮捷の『近思録』英訳における巻末の解説の一部分³が挙げられる。

¹ 山崎道夫『近思録』「中国古典新書」（明德出版社，1967年），55～60頁

² Chan, Wing-tsit, *Reflections on Things at Hand: the Neo-Confucian Anthology*, Columbia University, New York, 1967, 347～358頁

山崎氏は16点の近世期日本の『近思録』の注釈書や講義録を紹介しているにすぎないが、陳氏はその英訳において48点の資料を紹介している。しかし、陳氏は『国書総目録』第一巻のみをもとに調査しており、第二巻以降の『国書総目録』を参考していないようである⁴。そして、英訳『近思録』の次に、陳氏の『朱学論集』においては、英訳に列挙された『近思録』の関連現存資料に新出資料がさらに追加されて89点となった⁵。ただし『朱学論集』が刊行された1982年以降は、日本の現存する『近思録』資料に関する研究がほとんど見られない。

現在においては、電子データベースや近年刊行の書目を用い、日本の『近思録』資料をさらに網羅的に調査することが可能となった。そこで、日本古典籍総合目録データベース等を用い、陳氏が指摘した著書を含め、近世日本の現存する『近思録』資料を調査した。以下、各データベースや目録を検索した結果、現時点で確定できた現存資料とその所蔵先を列挙する。

二、 現存する近世日本『近思録』注釈書・講義録 とその所蔵先

凡例

一、本章の『近思録』文献一覧表は主として以下の電子データベースや目録に基づいて作成した。

- ・国文学研究資料館 日本古典籍総合目録データベース (<http://basel.nijl.ac.jp/~tkoten/>)
- ・岡野康幸、町泉寿郎編『江戸漢学目録』(二松学舎大学21世紀COEプログラム、2006年)
- ・大阪大学文学部編輯『懷徳堂文庫図書目録』(大阪大学文学部、1976年)

³ 同上、「Preface」x頁を参照

⁴ 陳榮捷『朱学論集』(台湾学生書局、1982年)168～176頁

各儒者の生没年は市古貞次他編『国書人名辞典』(岩波書店、1993年)、長澤孝三編『改訂増補 漢文學者總覽』(汲古書院、2011年)、平凡社編『日本人名大事典 復刻版』(平凡社、1979年)による。

一、 各項目は、著者の姓名(名は出来る限り号に統一した)、生没年(西暦年)、書名、巻冊数、漢文もしくは和文・写本(【写】・版本(【版】・複製本(【複】、活字にされたものを〔活〕、影印されたものを〔影〕、謄本を〔謄〕とする)のいずれか、所蔵先(『国書総目録』所蔵者略称による・所蔵者の書の冊数が異なる場合明記する)、内容の順である。配列は、各書の成立年代不明のものが多いため、おおむね各著者の生没年によった。

一、 できる限り管見できた資料を中心に取り上げることにした。しかし、調査途中であるため、未見の資料も含まれている。特に財団法人無窮会の文庫施設が長期工事中のため、その資料を調査することが現時点でできない。漢文もしくは和文と指摘されている資料はすべて筆者管見のものである。

山崎闇齋 (1619-1682)

1. 文会筆録 二十卷十冊 漢文 【版】〔天和3(1683)年刊〕国会(十冊)、他多数、【複】〔影〕『増訂 山崎闇齋全集』第一卷所収(ペリカン社、1987年)
2. 近思録講義 一冊 【版】千葉県文書館
3. 沖漠無朕説 一冊 漢文 【写】東北大(文化九年写)、広島大、蓬左【版】〔天和二版〕三原〔刊年不明〕内閣、京大、大阪府、高知、宮城、無窮織田【複】〔影〕『増訂 山崎闇齋全集』第四卷所収(ペリカン社、1987年)

伊藤仁齋 (1627-1705)

4. 読近思録鈔 一冊 漢文 【写】国会鶯軒、東北大狩野、天理古義堂（宝暦十四写）、日比谷井上、蓬左、宝山寺、【複】〔活〕『日本儒林叢書』第五卷所収（東洋図書刊行会、1927年）

中村惕齋 (1629-1702)

5. 近思録抄校正 一冊 漢文 【写】国会
6. 近思録鈔説 十四卷五冊 漢文 【写】内閣、蓬左（五冊）、無窮織田（四冊）（三冊）、無窮神習（二冊）、宮城県函伊達（五冊）、国士館大楠本（三冊）、佐賀県函鍋島（二冊）、【版】日比谷諸家
7. 近思録示蒙句解 十四卷十冊 和文 【版】岡山大池田、京大、東大（五冊）、東北大狩野、京都府、千葉、長崎、無窮織田、無窮真軒、静嘉（卷二・五欠、七冊）、愛知学芸、早大、竜谷、岡山県、他多数【複】〔活〕『先哲遺著漢籍国字解全書』第八卷所収（早稲田大学出版部、1928年）

貝原益軒 (1630-1714)

8. 近思録備考 十四卷八冊 寛文八 (1668) 年刊 漢文【国会閣、宮書、九大、京大、東大、大阪府、高知、米沢興讓、尊経、無窮織田、岡山県、他多数【複】〔活〕『益軒全集』第二卷 (国書刊行会、1973 年)
9. 慎思録 (近思録説) 十二卷 漢文 【写】『貝原益軒資料集 上』「近世儒家資料集成 第 5 卷」収 (ぺりん社、1989 年)

宇都宮遯庵 (1633-1707)

10. 鼈頭近思録 六卷六冊 延宝六刊 漢文 【版】大谷、金沢大、九大、東大 (六卷六冊)、山口、金沢市藤本、東書 (六卷六冊)、無窮織田、他多数

佐藤直方 (1650-1719)

11. 近思録諸筆記 一冊 【写】蓬左
12. 近思録筆記 一冊 漢文【写】無窮平沼 (道体・為学)【版】内閣 (佐藤先生語録の内)【複】〔影〕『佐藤直方全集』第 2 卷 (ぺりかん社、1979 年)
13. 道体講義 和文【写】京大 (二冊)、東北大狩野 (元文元写三卷三冊)、秋田 (一冊)、小浜凶崎門 (一冊)、長崎県凶楠本 (一冊)、【複】〔影〕『佐藤直方全集』第 2 卷 (ぺりかん社、1979 年)

浅見綱齋 (1652-1712)

14. 近思録講義 和文【写】慶大(一冊)、伊達開拓(「綱齋先生近思録講義」五冊)、国士館大楠本(嘉永四写二冊)、小浜凶崎門(一冊)
15. 近思録師説 【写】京大(元文四写十三卷十三冊)、無窮織田(道体上欠、七冊、天明八識語)、無窮平沼(十四冊)、小浜凶崎門(十冊)、仏教大平中(七冊)、土佐山内家宝資(六冊)
16. 近思録西銘師説 一冊 【写】小浜凶崎門
17. 近思録道体講義 【写】小浜凶崎門(享保十七写一冊)、(寛政十二写一冊)
18. 近思録道体師説 【写】小浜凶崎門(安永二写二冊)
19. 近思録道体筆記 一冊 【写】無窮織田(元文四写)、長崎県凶楠本(享保十三写)
20. 近思録道体篇附目錄講義 一冊 【写】無窮織田(享保十七写)
21. 近思録講義目錄為学 一冊 和文【写】武雄市鍋島
22. 近思録無極太極章講義 一冊 和文【写】慶大

室鳩巢 (1658-1734)

23. 近思録講義 和文【写】京大谷村(江戸末期写三冊)、東北大狩野(二冊)、大阪天満宮 四冊)
24. 近思録凶述 一冊 漢文【写】広島大
25. 近思録道体講義 一冊 【写】無窮平沼

遊佐木齋 (1659-1734)

26. 近思錄講義 一冊 和文【写】伊達開拓

三宅尚齋 (1662-1741)

27. 近思錄講義 三冊 和文 (乾坤全・為学・道體)【写】佐賀県
 凶鍋島

28. 近思錄天木氏説 【写】蓬左

29. 近思錄筆記 漢文 【写】九大 (二冊)、東北大狩野 (一冊)、
 日比谷加賀 (元文二 写)、大倉山 (享和
 三安田近信写二冊)(天保六三浦行敬写五
 冊)(四冊)(一冊)、神宮(天明四写一冊)、
 無窮織田 (「尚齋先生近思錄筆記」、文化
 三写一冊)、無窮平沼 (一冊) (「近思錄三
 宅先生筆記」、二冊)、関大 (「尚齋先生近
 思錄筆記」、小林貞亮記、三冊)、慶大 (「尚
 齋先生近思錄筆記」、明治写一冊)(一冊)、
 宮城県凶伊達 (明和三写四冊)、萩凶和漢
 古書 (天保三写三冊)、長崎県凶楠本 (明
 治期写三冊)、登米市寿庵 (「尚齋先生近
 思錄筆記」宝曆十写三冊)、登米市寿庵
 (「尚齋先生近思錄筆記」一冊)

30. 読近思錄筆記 【写】九大 (五冊)、日比谷加賀 (元文二写一冊)、
 大倉山 (稿本、欠本、四冊) (天保六三浦行敬
 写、辨異端編次を付す、五冊)、無窮織田 (三
 冊) (二冊)、大阪天満宮 (五冊)

伴部安崇 (1668-1740)

31. 近思録講習日記 【写】足利 (卷三欠、宝曆八写五冊)

築田勝信 (1743 没)

32. 近思録集解便蒙詳説 二十四卷付録二卷二十六冊 (元禄八刊)
和文【版】京大、東大、東北大狩野、米沢
興讓、神宮、無窮織田、旧浅野、竜谷、他
多数【複】〔活〕『校註漢文叢書』第十卷 (博
文館、1914)

若林強斎 (1679-1732)

33. 近思録為学師説 四冊 【写】無窮平沼、仏教大平中 (二冊)

34. 近思録講義 【写】無窮織田 (一冊) (二冊)、無窮平沼 (十冊)、
小浜凶崎門 (一冊)

35. 近思録師説 【写】無窮神習 (二十冊)、無窮平沼 (十八冊)、
小浜凶崎門 (九冊) (十二冊)

36. 近思録十四目講義 一冊 和文【写】国会 (叢書料本六)、無窮
平沼、国士館大楠本 (一冊)、武雄市鍋島 (一冊)

37. 近思録道体講義 和文 【写】京大 (坤卷一冊)、武雄市鍋島)

山本復齋 (1680-1730)

38. 近思錄忠信進德章講義 一冊 和文【写】小浜凶崎門

稻葉迂齋 (1684-1760)

39. 近思錄綱領並編目 一冊 【写】蓬左 (寛政七写)

穂積以貫 (1692-1769)

40. 近思錄国字解 二十四卷二十四冊 【写】無窮神習

五井蘭洲 (1697-1762)

41. 近思錄紀聞 和文【写】大阪府 (一冊) (三卷三冊)

久米訂齋 (1699-1784) 門人

42. 近思錄講義 和文 (別書名: 近思錄師説) 十四卷八冊 【写】
無窮織田、登米市寿庵 (一冊) (明和五写一冊) (一冊)

小野鶴山 (1701-1770)

43. 近思錄講義 十四卷 和文【写】国会 (五冊)、無窮織田 (一冊)
(「近思錄訂正講義」、五冊)、無窮平沼 (十二冊)、

小浜図崎門（四冊）（二冊）（一冊）

竹内敬持（1712-1768）

44. 近思録講義 十五冊 【写】神宮（二部）
45. 近思録十四目講義 二冊 【写】無窮平沼（内田周平写）

中村習齋（1719-1799）

46. 近思録講義 一冊 【写】蓬左
47. 近思録資講／読感興詩 一冊 【写】蓬左、大倉山（天保十五
写）
48. 近思録助業考 一冊 【写】蓬左
49. 小学近思四子六経一軌図 一冊 【写】大倉山、国士館大楠本

宇井黙齋（1725-1782）

50. 近思録筆記 漢文 【写】東北大狩野（十冊）、無窮平沼（序目・
道体, 小出惟知記, 一冊）、長崎県図楠本（「近
思録宇井兄筆記」二冊）
51. 宇井兄近思録口義 二冊 【写】無窮織田、大阪天満宮（「黙齋
宇井先生近思録口義」）

西依墨山（1726-1800）

52. 近思録講義 【写】久留米図（「近思録卷之一道體講義」安永六

写一冊)、(八冊)

53. 近思録道体筆記 二冊 【写】無窮神習

中井竹山 (1730-1804)

54. 近思録説 一冊 【写】日比谷河田、無窮織田、無窮織田(「竹山近思録説」)

55. 近思録標記 二冊 【写】無窮神習, 無窮平沼

56. 近思録 十四卷四冊 【版】〔書入本〕阪大(「竹山先生首書近思録」)

稲葉黙齋 (1732-1799)

57. 近思録口義 和文【写】東北大狩野(十三冊)

58. 近思録講義 十四卷十四冊 和文【写】日比谷加賀(卷八、一冊)、大倉山(一冊)、無窮織田(嘉永三古市隆彬写十一冊)、無窮神習、無窮平沼(三冊), 阪大(「黙翁近思録講義」一卷七冊)

59. 近思録筆記 十四冊 【写】千葉, 米本

中井履軒 (1732-1817)

60. 近思録聞書 三卷二冊 【写】国会

石川香山 (1736-1810)

61. 近思録考 一冊 【写】鶴舞

川島栗齋（1811 没）

62. 近思録講義目錄道体 一冊 【写】無窮平沼

稲葉通邦（1744-1801）

63. 近思録尚齋筆記 一冊 【写】竹清

落合東堤（1749-1841）

64. 近思録講義 十四卷 【写】秋田（十冊）（二冊）、無窮神習（六冊）

65. 近思録道体講義 二冊 【写】無窮神習

古賀精里（1750-1817）

66. 近思録治法篇明道論十事講述 一冊 【写】国士館大楠本

田辺樂齋（1754-1823）

67. 近思録私考 一冊 和文 【写】宮城小西（自筆）

68. 近思録筆解 六卷六冊 漢文 【写】宮城小西（自筆）

溪百年 (1754-1831)

69. 經典余師 (近思錄之部) 和文 【版】[天保十四版] 内閣 (十四卷五冊)、大阪市 大 (十四卷十冊)、京大 (十四卷十冊)

日原坦齋 [手塚坦齋] (1762-1834)

70. 近思錄筆記 二冊 【写】無窮平沼

71. 近思錄六有西錄講義 一冊 【写】教大

石塚崔高 (1766-1817) 等編・**古賀精里** 校

72. 近思錄集説 五卷四冊 漢文 【写】内閣、教大、無窮平沼 (文化十二写)、国士館大楠本、岡山県

御牧赤報 (1772-1833)

73. 近思錄講義 二冊 【写】無窮織田 (為学)

山口菅山 (1772-1854)

74. 菅山先生近思錄講説 【写】小浜凶崎門 (八冊)、長崎県凶楠本 (「菅山先生近思錄講義」四冊)

佐藤一斎 (1772-1859)

75. 近思録講説／為学篇 二卷一冊 【写】東北大狩野
76. 近思録説 (別書名: 近思録雕題) 二冊 【版】(天保三版) 岐阜
77. 近思録欄外書 三卷三冊 漢文【写】国会(一冊)、大谷、九大、東北大狩野、大阪府(一冊)、無窮織田、無窮神習、無窮真軒、無窮平沼(三冊本二部)(二冊)、旧三井鶯軒、日比谷井上(十四卷三冊)、国士館大楠本(明治十八写三冊)、二松学舎大惇斎(三冊)、二松学舎大中洲(二冊)、(明治十七写二冊)、福井市図(一冊)、大阪天満宮(三冊)、高知大小島(天保十写三冊)、竹田図由学館(三冊)

桜田虎門 (1774-1839)

78. 近思録摘説 十四卷 漢文 【写】教大(五冊)、慶大、東北大(文化十写十冊)、広島大(六冊)、日比谷諸橋(十一冊)、宮城、無窮平沼(五冊)、米本(十一冊)、伊達開拓(一冊)(七冊)、宮城県図(五冊)、佐倉高鹿山(十冊)、国士館大楠本(五冊)、大阪天満宮(十冊)
79. 近思録摘疏 一冊 【写】伊達開拓

安部井帽山 (1778-1845)

80. 近思録訓蒙輯疏 二卷二冊 漢文 【版】内閣、京大、無窮織田、無窮平沼
81. 近思録輯疏 一冊 【写】会津

金子霜山 (1789-1865)

82. 近思録提要 【写】九大 (明治四写十四卷二冊)、栗田 (一冊)、
米本 (一冊)、早大 (十四卷二冊)、早大古白 (二冊)

大沢鼎齋 (1813-1873)

83. 近思録詳説 七卷二冊 【写】無窮平沼
84. 近思録筆記 二冊 【写】無窮平沼、小浜凶崎門 (「鼎齋先生近
思録筆記」)

千葉重齋 (生没年不明)

85. 近思録口義 四冊 【写】無窮織田 (自筆)

小出惟知 (生没年不明) 稿, **寺尾** (生没年不明) 朱批

86. 近思録会読筆記 六冊 【写】無窮平沼

沢田希 (織部、生没年不明)

87. 近思録説略 十四卷五冊 享保五刊 漢文 【写】福島 (享保
写二冊) 【版】内 閣、宮書、
大谷、九大 (五冊) (九冊)、京大

(五冊)(八冊)、教大、慶大、東
北大狩野、東洋大哲学堂、秋田、
高知、長野、日比谷諸橋、成田、
無窮織田、米本、竜谷、岡山県、
他多数

尚志弘毅 他 (生没年不明)

88. 近思録筈記序目 二冊 【写】無窮平沼 (道体)

平庸永 (生没年不明)

89. 近思録十四目講義 一冊 【写】無窮織田 (享保二十一写)

不破某 (生没年不明) 講、 **尾関権平** (生没年不明) 記

90. 近思録聞書 十卷 【写】九大

三宅帯刀 (生没年不明)

91. 近思録集解拙鈔 二十五卷二十冊 【写】無窮織田

矢野撰徳 (生没年不明)

92. 近思録国字講義 一冊 【版】無窮織田 (道体)

著者不明

93. 近思録講義 【写】九大（十三冊）、京大（十三卷十三冊）、教大（十四卷十四冊、慶大（一冊）、宮城、大倉山（六冊）、無窮織田（一冊）、無窮平沼（九卷一冊）、天理吉田（十二冊）、仏教大平中（四冊）、阪大（一冊）
94. 近思録口誼 二冊 【写】蓬左
95. 近思録資講 十四卷五冊 【写】京大
96. 近思録師説 【写】京大（七卷七冊）、京都府（十五冊）、小浜
図崎門（一冊）、長崎県図楠本（二冊）
97. 近思録私説／道体正義 一冊 【写】大倉山
98. 近思録師説筆記 十三卷十四冊 【写】無窮平沼
99. 近思録集解 十四卷四冊 寛文十三刊 【版】長沢規矩也
100. 近思録道体筆記 一冊 【写】大倉山（天保六写）
101. 近思録筆記 【写】九大（五冊）（一冊）、京大（一冊）（松岡
叢書四十三）、東北大狩野（一冊）、蓬左（三卷三冊）
102. 近思録附説 三冊 【写】無窮平沼
103. 近思録目録講義 一冊 【写】大倉山（宝永二写）
104. 近思録輪講筭記 一冊 【写】無窮織田
105. 省高近思録抄考 一冊 【写】石川県歴博長岡

以上の一覧でわかるように、近世日本の現存する『近思録』関連資料が105点あることがわかった。書目や伝記資料、人物辞典などには、これ以外にも多くの『近思録』関連著述を載せているが、現存が確認できないものについては載せなかった。

また、先行研究で未紹介の資料も24点あることが確認できた。それぞれの番号を以下のとおり示す。

1・2・3・4・11・13・16・18・20・21・30・31・33・38・42・49・
52・56・63・66・74・79・93 番の宮城，天理吉田，仏教大平中，阪
大の各所蔵書・96 番の小浜凶崎門，長崎県凶楠本の各所蔵書

陳氏は他 10 点の書をも指摘しているが，これらの所蔵先は未確定のため，上の一覧表には加えていない。以上が現時点でわかる近世日本の現存する『近思録』関連資料の全部である。調査を進めるにつれて増加する可能性も十分あると考える。

おわりに

本章の課題として，上記の各『近思録』資料を収集し，それらの書誌学的情報を確認することとした。そして『近思録』が近世日本の宋学の受容や発展にどのような役割を果たしたかを今後さらに解明していきたい。本論文の第 3 章と第 4 章の貝原益軒と伊藤仁斎とその『近思録』研究に関する考察はその試みのひとつである。

山崎闇斎の『近思録』学を理解するために、特に『文会筆録』巻二「近思録」に見られる闇斎の自説を考察する必要があると考える。また、梅澤芳男蔵とされている闇斎の『近思録講義』の現存状況を確認することも極めて重要である。このことについては、本論文では明らかにすることができなかつたため、今後の課題としたい。

第 2 章

中国と朝鮮の『近思録』研究とその日本における影響

はじめに、

本章では中国や朝鮮の『近思録』注釈書を紹介し、それらの近世期日本の『近思録』研究に与えられた影響を明らかにすることを目的とする。第一節では、中国の『近思録』注釈書とその影響を中心に検討する。第 2 節では、まず朝鮮朝の『近思録』注釈書を紹介し、次に李滉や山崎闇斎を中心に、日本の『近思録』研究において朝鮮儒者がどのような影響を与えたかについて検討する。まず、中国歴代の『近思録』注釈書について検討する。

一、中国の『近思録』注釈書

近年、中国では本国の『近思録』研究史に関する研究が進んでいる⁶。この先行研究によると、以下の中国の『近思録』注釈書が現存していることが明らかにされている。

1. 『近思録問答』(宋)鄧綱
2. 『近思雜問』(宋)陳埴
3. 『近思續録』(宋)劉清之
4. 『泳齋近思録衍註』(宋)楊伯岳

⁶ 劉永翔主編『近思録專輯』「朱子學文獻大系・歴代朱子學著述叢刊」(華東師範大學出版社)全 11 卷、嚴佐之他主編『《近思録》文獻叢考』「朱子學文獻大系・歴代朱子學著述叢刊」(華東師範大學出版社、2018)を参照。

5. 『近思録集解』(宋) 葉采
6. 『近思別録』(宋) 蔡模
7. 『近思録發揮』(宋)
8. 『近思録廣輯』(元) 柳貫
9. 『近思録補』(明)江起鵬
10. 『五子近思録發明』(明) 施璜著
11. 『近思録補注』(清)陳沆
12. 『近思録注』(清) 郭嵩燾
13. 『近思録傳』(清)張習孔
14. 『近思録集解』(清)李文炤
15. 『近思録集解』(清)張伯行
16. 『續近思録』(清)張伯行
17. 『廣近思録』(清)張伯行
18. 『近思録集註』(清)江永
19. 『讀近思録』(清)江紱
20. 『近思録集註』(清) 茅星來著
20. 『五子近思録發明』(明) 施璜著

このように、宋代から清代にわたり、たくさんの中国『近思録』注釈書が刊行されたことがわかかる。しかし、宋儒の葉采の『近思録集解』⁷以外、これらの注釈書が近世日本においてほとんどその影響がなかったと考える。近世初期から『近思録集解』が伝わっており⁸、貝原益軒の『近思録備考』をはじめ、日本の『近思録』注釈書がひたすら『近思録集解』を対象としている。『近思録集解』以外の中国『近思録』注釈書が近世日本に伝来したかどうかは定かでない。ただこれに関する一つの興味深い資料がある。それは山崎闇斎の「近

⁷ 葉采の『近思録集解』と貝原益軒の『近思録』研究について、本論文の第5章で詳しく論じる。

⁸ 寛永年間と考えられる無刊記の『近思録集解』和刻本が内閣文庫に所蔵されている。

思録序」であり、次にこれについて検討してみたい。

二、山崎闇齋の「近思録序」と中国の『近思録』注釈書

山崎闇齋は周知のように日本近世前期の著名な儒者であり、神道家である。闇齋は早くから『近思録』に注目しており、その関連資料をいくつか残している。

闇齋は宋儒の葉采（生没年不詳）の『近思録』に対する注釈書『近思録集解』など、後世の注釈書を一切斥け、朱熹が編纂した『近思録』の原本に近づけようという意図で、原文とその訓点のみを付した和刻本を刊行した。その本の冒頭に闇齋が「近思録序」を付し、『近思録』は「四書五経」、道学に入るための階梯であると強調している。もっとも興味深いのは、当時日本に伝来した『近思録』の諸注釈書とそれらに対する闇齋の批評が述べられている。闇齋は次のように述べている。

當時鄧綱問之略而不切。故先生且隨答之而已。後來、陳潛室答人間之也。問者雜而不節。其答亦非達者語也。雖何北山著發揮。恐微言未析也。葉仲圭爲集解。楊伯岳爲衍註。皆未能深有所發明。汪器之義之是也。戴亨之補註。柳貫之廣輯。皆葉解之亞流也。周公恕亂成書爲分類。張元禎。陳文燿。雷同而補成之。共犯不韙之罪耳。

（當時、鄧綱之を問うこと、略にして切ならず。故に先生且つ随いて之に答うるのみ。後來、陳潛室、人之を問うに答うるや、問う者雜にして節ならず、其の答えも亦達者の語に非ざるなり。何北山、發揮を著すと雖も、恐らくは微言未だ析あきらかならざるなり。葉仲圭、集解を爲し、楊伯岳、衍註を爲す、皆未だ深く發明する所有る能わず。汪器之の之を義する是なり。戴亨の補註、柳貫の廣輯、皆葉解

の亞流なり。周公恕、成書を亂して分類と爲し、張元楨、陳文燿、雷同して之を補成す。共に不^レ躋の罪を犯すのみ。)

この文で窺える闇齋の読んだ『近思録』の注釈書は次の通りである⁹。

1. 近思録問答 宋 鄧綱
2. 近思録雜問 宋 陳潛室
3. 近思録發揮 宋 何北山
4. 近思録集解 宋 葉仲圭 (葉采)
5. 近思録衍註 宋 楊伯岳
6. 近思録補註 宋 戴亨
7. 近思録廣輯 元 柳貫
8. 分類近思録集解 明 周公恕

闇齋が刊行した『近思録』本の原刻本はいつ刊行されたかは未詳であるが、その序文の最後に「寛文十年五月九日山崎嘉敬義序二卷」と記されている。

このように、闇齋が読んだとされている『近思録』注釈書はこの7点である。しかし、『近思録集解』以外に、各書は珍本であり、今は日本には現存していないため、闇齋が実際に各書をすべて見たかどうかは定かでない。

以上のように中国の『近思録』注釈書とその日本における影響について論じてきた。次に、朝鮮の『近思録』研究についてみてみたい。

二、朝鮮の『近思録』研究とその日本における影響

⁹ 山崎道夫編訳『近思録』「中国古典新書」(明德出版社、1967年) 49～51頁を参照。

本節では朝鮮朝（1392～1910年）の『近思録』研究について考察する。まず、朝鮮の『近思録』注釈書を紹介し、次に日本の『近思録』研究における朝鮮の儒者の影響について検討することにした。

『近思録』が具体的にいつ朝鮮半島に伝来したかは詳しく知られていないが、1370年の高麗時代に刊行された『近思録』の木板本のあることから、1370年以前に『近思録』がすでに伝わってきていることがわかる¹⁰。高麗時代には『近思録』があまり普及されていなかったようで、朝鮮時代になってはじめて『近思録』の注釈書が見られるようになる。朝鮮朝の『近思録』注釈書を網羅的に収集し影印された『近思録註解叢編』では、高麗時代から近代までの84点の『近思録』が収録しているが、本研究では日本近世期に伝来した可能性のある59点の資料を対象とし、以下に列挙する¹¹。なお、書名・著撰者名と号・生没年・出典とその巻数の順に列挙した。

1. 「近思録考疑」 權撥（冲齋）（1478～1548年）『冲齋集』巻2
2. 「近思録問目」 李滉（退溪）（1501～1570年）『退溪集』巻20
3. 「近思録設問」 安敏學（楓崖）（1542～1601年）『楓崖』巻2
4. 「近思録釋疑」 金長生（沙溪）（1548～1631年）『沙溪』巻17～20
5. 『近思録釋疑』 鄭曄（守夢）（1563～1625年）単行本
6. 「近思録僭疑」 權得己（晩悔）（1570～1622年）『晩悔集』巻3
7. 「近思録筭録」 朴知誠（潛治）（1573～1635年）『潛治集』巻10
8. 「近思録誤本辨證」 宋時烈（尤庵）（1607～1689年）『宋子大全』巻130

¹⁰ 宋熹準編『近思録註解叢編』第1巻（學民文化社、1999年）解題、28頁。10～11頁。

¹¹ 同上、「解題」22～25頁。なお、本研究においてはこの『近思録註解叢編』を大いに参考にした。

9. 「近思錄筭錄」朴長遠（久堂）（1612～1671年）『久堂集』卷 17
10. 「近思錄問答」朴世采（南溪）（1631～1695年）『南溪集』
11. 「近思錄釋疑考正凡例」朴世采（南溪）『南溪集』卷 65
12. 「近思錄筭記」朴泰漢（守吾堂）（1633～1694年）『朴正字遺稿』
13. 「近思錄問目」李世龜（養窩）（1646～1700年）『養窩集』卷 6
14. 「近思錄答問」金幹（厚齋）（1646～1732年）『厚齋集』卷 10
15. 「近思錄讀書筭錄」林泳（滄溪）（1649～1696年）『滄溪』卷 23
16. 「近思錄記疑」鄭續輝（1652～1723年）『窮村集』卷 6
17. 「近思錄筭記」朴光一（遜齋）（1655～1723年）『遜齋集』卷 10
18. 「近思錄參考」趙德隣（玉川）（1658～1737年）『玉川集』卷 23
19. 「書家傳近思錄」李泰壽（止谷）（1658～1724年）『止谷遺稿』卷 4
20. 「近思錄及釋疑疑目」李載亨（松巖）（1665～1741年）『松巖』卷 5
21. 「近思錄問目」尹東洙（敬庵）（1674～1739年）『敬庵集』卷 7
22. 『近思錄疾書』李瀾（星湖）（1681～1763年）單行本
23. 「近思錄講說」尹鳳九（屏溪）（1681～1767年）『屏溪集』卷 3 8
24. 「近思錄註說筭疑」韓元震（南塘）（1682～1751年）『南塘集』卷 23
25. 「近思錄讀書答錄」林象德（老村）（1683～1719年）『老村集』卷 9
26. 「對近思錄策」鄭重器（梅山）（1685～1757年）『梅山集』卷 8

27. 「近思錄集解筭疑」姜奎煥（賁需齋）（1697～1731年）『賁需齋』卷7
28. 「近思錄道體篇講義」「題五子近思錄道體篇後」楊應秀（白水）（1700～1767年）『白水集』卷12
29. 『近思錄問答』金元行（澗湖）（1702～1772年）單行本
30. 「近思錄筭錄」金教行（惟勤堂）（1712～1766年）『惟勤堂遺稿』卷8
31. 「近思錄葉註筭疑」李宗洙（后山）（1722～1797年）『后山集』卷15
32. 「近思錄釋疑辨」柳長源（東巖）（1724～1796年）『東巖集』卷10
33. 『近思錄釋疑』朴履坤（芝村）（1730～1783年）單行本
34. 「近思錄經義」趙有善（1731～1809年）『蘿山集』卷6
35. 「近思錄筭記」朴燦瑛（陽洞）（1736～1773年）『陽洞遺稿』
36. 「近思錄經義」金相進（濯溪）（1736～1811年）『濯溪集』卷4
37. 「近思錄講義」南景羲（痴庵）（1748～1812年）『痴庵集』卷7
38. 「近思錄講義」正祖（弘齋）（1752～1800年）『弘齋全書』卷64、65
39. 「近思錄註疑往復說辨」柳栻（近窩）（1755～1822年）『近窩集』卷5
40. 「近思錄記疑」權思學（竹村）（1758～1832年）『竹村集』卷6
41. 「近思錄葉註記疑」南漢皜（誠齋）（1760～1821年）『誠齋文集』卷8
42. 「近思講問答」趙承洙（梅隱）（1760～1830年）『梅隱集』卷11
43. 「葉註記疑往復說」趙承洙（梅隱）（1760～1830年）『梅隱集』卷11

44. 「近思錄時習錄」姜必孝(海隱)(1764~1848年)『海隱遺稿』
卷 12
45. 「讀近思錄疑義」姜櫟(松西)(1773~1834年)『松西集』卷
6
46. 「近思錄講錄」柳徽文(好古窩)(1773~1827年)『好古窩』
卷 13
47. 「近思錄葉註疑義」李漢膺(敬庵)(1778~1864年)『敬庵集』
卷 9
48. 『近思錄集解增刪』柳鼎文(壽靜齋)(1782~1839年)單行
本
49. 『近思錄集解或問』柳鼎文(壽靜齋)單行本
50. 「近思錄抄說」鄭裕昆(晚悟)(1782~1865年)『晚悟集』卷
12
51. 「近思錄講義」李源祚(凝窩)(1792~1871年)『凝窩集』卷
12
52. 「近思錄講義」李鍾祥(定軒)(1799~1870年)『定軒集』卷
13
53. 「近思錄記疑」沈奎澤(西湖)(1812~1871年)『西湖』卷 17
54. 「近思錄筭義」李震相(寒洲)(1818~1886年)『求志錄』卷
12
55. 『近思錄附註』金平默(重庵)(1819~1888年)單行本
56. 「近思錄附註」金平默(綱晦)(1830~1886年)『綱晦集』卷
11
57. 「近思錄經疑」李鍾和(一齋)(1832~1890年)『一齋集』卷
4
58. 「近思錄問辨」蔡鍾植(省齋)(1832~1893年)『省齋文集』
卷 37
59. 「近思錄講義發問」柳重教(石南居士)(1832~1903年)
『石南居士私稿』卷 8

以上のように、59 点の朝鮮の『近思録』注釈書を列挙した。この 59 点の資料のなかで、『近思録』注釈書の単行本は 7 点あることが確認できる。

- 『近思録釋疑』 鄭守夢（1563～1625）
『近思録疾書』 李星湖（1681～1763）
『近思録問答』 金溪湖（1702～1772）
『近思録釋疑』 朴芝村（1730～1788）
『近思録集解増削』 柳壽静齋（1782～1839）
『近思録集解或問』 柳壽静齋（1782～1839）
『近思録附註』 金重庵（1819～1888）

この 7 点の書は『近思録』本文の語義に対する解釈や葉采注に対する批評が中心となっているが、その中にも、李滉学派の一人で、朝鮮実学の始祖の一人としても知られている李瀾（星湖）の『近思録疾書』が特に独創的である。

残りの 52 点の資料はすべて諸儒者の文集に所収されている短編である。例えば、朝鮮時代最初の『近思録』注釈書とされている「近思録考疑」は權檣の『冲齋集』に収められている。

以上のように、各著者の生没年から考えれば、近世日本に伝来した可能性のある 59 点の朝鮮『近思録』注釈書を確認した。次に、朝鮮の『近思録』資料の影響が近世期日本の『近思録』研究に見られるや否やについて考察してみる。

三、日本との関係

以上の 7 点のような朝鮮の『近思録』注釈書の単行本は日本の図書施設（大阪府立図書館、東洋文庫など）に数点かが現存するが、筆者が確認出来たかぎりすべてが明治以降に日本に伝わってきたもの

である¹²。また、『近思録』関連の短編が所収されている朝鮮人の文集も、有名な李退溪の『退溪集』以外、近世期日本に伝来したものを確定するのが困難である。現時点で確認出来た資料はすべて明治時代以降に伝来したものである。

古義学をはじめた有名な伊藤仁斎の息子、伊藤東涯(1670～1736年)には、朝鮮の歴史・地誌・制度を紹介する『三韓紀略』という著がある。その第7巻の「」篇におき、『近思録』注釈書の単行本に関する記載はないが、権冲齋の『冲齋集』等の書が列挙し、紹介されている。しかし、東涯が必ずしもこれらの書を見たわけではない。「文籍彙」篇の序文に述べられているように、この篇が朝鮮の書目に基づいて作成されたものがある。『退溪集』など、いくつかの書に対する詳しい記述のあるもの、東涯が実際にこれらを見ていたと考えられるが、それら以外は不明である。いずれにせよ、朝鮮の『近思録』注釈書が近世期日本に伝来したという証拠が現時点では見られない。このことにより、近世日本に伝来し、現在まで残存している朝鮮の『近思録』関係資料は恐らくないと考えられる。もし朝鮮の『近思録』注釈書が仮に当時の日本に伝来したとしても、それらが恐らく普及されていなかったと考える。日本人の『近思録』資料においての朝鮮儒者の『近思録』注釈書の言及・引用は現時点では管見できていない。しかし、日本人の『近思録』研究において朝鮮儒者の『近思録』注釈書が直接参考されなかったにもかかわらず、著名な李滉(退溪)(1501～1570年)の著作を中心に、朝鮮の儒者の影響がまだ多く見られる。日本の『近思録』注釈書に李滉の『退溪集』、『自省録』、『朱子書節要』、『西銘考證考義』がしばしば引用されている。次に、李滉の『近思録』関係資料とその日本においての影響について検討してみたい。

四、李滉の『近思録』研究と日本

¹² 例えば、『近思録釋疑』 鄭守夢(大阪府立図書館蔵)

李滉は『近思録』に関する単行本を残しておらず、その『近思録』に関連する資料はすべてその弟子達と交わした書簡からなり、李滉の文集に収められているものである。『退溪集』巻 20 に所収されている「近思録問目」は、退溪の門人であった黄俊良が『近思録』の数条に関する質問に対する李滉の返答からなっている。この「近思録問目」の他に、『近思録』道体篇第 1 条にある語「沖漠無朕萬象森然已具」について鄭惟一という李滉の門人の質問に対する李滉の返答の書簡¹³や、禹性伝という門人の道体篇第 1 条にある程こうの語「生之謂性」に関する質問の李滉の返答¹⁴もある¹⁵。

『退溪集』が近世初期に伝来しており、その和刻本も刊行されたため広く読まれていた。しかし、日本儒の『近思録』注釈書に「近思録問目」が引用されている例が見られない。貝原益軒などの読んだ『』には『退溪集』巻 20 が省略されているため、「近思録問目」の存在があまり知られていなかったと考える。しかし、『退溪集』の原本を知っていたはずの山崎闇斎も、その『近思録』研究にはなぜか「近思録問目」を利用していない。

闇斎の『文会筆録』天和 3（1683）年刊、10 冊 20 巻は、『家礼』、『近思録』、『四書』、『五経』などの書について朱熹とその他の先儒の諸書より重要な語を抜粋し、闇斎の自説をも付した読書録のようなものである。『近思録』の解説は『文会筆録』の巻 2 に当たる。ここには、主に朱熹の『文集』や『朱子語類』の語が列挙され、闇斎自説も付して『近思録』全 14 巻にわたって注解している。周知のように、闇斎は李滉を極めて尊重している。『文会筆録』では、『近思録』を解釈するのに李滉の語が多く利用されている。闇斎は、『文会筆録』に『退溪集』の文を 3 回引用している（『退溪集』巻 28、

¹³ 『退溪集』巻 25。同文は李滉の『自省録』にも所収されている。

¹⁴ 『退溪集』巻 32。

¹⁵ 宋熹準編『近思録註解叢編』第 1 巻（學民文化社、1999 年）解題、28 頁。

卷 20「心経附註問目」、卷 21)が、なぜか卷 20「近思録問目」など、『近思録』が直接論じられている箇所を引用していない。「沖漠無朕萬象森然已具」に関する李滉の見解は引用されているが、闇齋は『退溪集』巻 25 の文を利用しているのではなく、『自省録』の文を引用している。全体的に、日本儒の『近思録』注釈書の中に、『退溪集』よりも、李滉の『自省録』が多く引用されているといえる¹⁶。このことにより、日本儒の『近思録』研究において「近思録問目」など李滉が直接『近思録』について論じている著の影響が見られないが、李滉の学説が非常に尊重され、山崎闇齋や貝原益軒などの『近思録』研究には『退溪集』や『自省録』などがよく引用されていたことがわかる。

おわりに

以上のように、近世日本の『近思録』注釈書における朝鮮儒者の影響について、次の 2 点がわかった。

1. 朝鮮儒者の『近思録』関係資料が恐らく近世期日本に伝来していない。少なくとも、その影響が現時点では見られない。
2. 日本の儒者の『近思録』注釈書において、朝鮮儒者の語が多く引用されているが、ほとんどが李退溪の著作からである。

¹⁶ 古賀精里（1750～1817 年）が校訂した『近思録集説』（内閣文庫蔵）のなかに、『自省録』とともに李滉の『西銘考證考義』も引用されている。『西銘考證考義』が利用されている例は他に見られない。

第3章

東アジアの書院・塾・藩校における『近思録』の位置

はじめに

本章では、『近思録』が東アジアの教育機関においてどのように用いられていたかについて考察してみたい。朱熹が「近思録は見るに好し。四子は六経の階梯。近思録は四子の階梯なり」¹⁷と述べているように、『近思録』は四書を読む前の「階梯」(はしご)、言い換えれば入門書、として編纂されたものである。しかし、書院や塾など、教育現場においては『近思録』が実際にどのように用いられていたかについての研究が見当たらない。そこで本章では、日本の藩校や私塾などの教育課程において『近思録』がどのような位置を持ち、実際に四書の前に読まれていたかについて検討する。

一、本章の目的と方法

本章では、東アジアの教育機関において『近思録』が四書の入門書としての役割を果たしていたかについて明らかにすることを目的とする。

第二節では、日本の藩校における『近思録』の読書順序について考察することにした。文部科学省編『日本教育史』所収の各藩校の学則・学規または各藩校の蔵書を示す「書目」の項目を資料とし、『近思録』がその教育上使用されていたか、されていなかったか、またその読書順序を明らかにする。第三節では、日本儒者が『近思

¹⁷ 「近思録好看。四子、六経之階梯。近思録、四子之階梯」(『朱子語類』巻107)

録』をどの順で読んだかを、数名の儒者の著作を通して検討してみる。そして、第四節では、日本の状況を確認した上で、中国儒者の学則・学規などを考察し、中国では初学者の教育課程における『近思録』の読書順序について考察する。最後に、日本と中国と同様に、第五節では朝鮮の学則・学規などを考察することを通し、『近思録』が朝鮮の儒者の間でどの順で読まれ、どのように用いられたかについて検討する。

二、日本の藩校における『近思録』の用法とその読書順序

本節におき、文部科学省編『日本教育史』所収の各藩校の学則・学規や藩校の蔵書を示す「書目」の項目を資料とし、藩校における『近思録』の用法と読書順序について検討する。朱子学派・崎門派として知られている藩校の学則・学規などを考察し、その藩校を以下のように a) 『近思録』無 b) 『近思録』有 c) 四書の後に『近思録』を読む と分類した。ある藩校が明らかに『近思録』を使用していなければ a) のように分類した。『近思録』が使用されているが、どのような順で読まれていたかがわからない場合は b) と分類し、その順序がわかる場合は c) のように分類した。以上の a、b、c の 3 分類ですでにわかるように、『近思録』を四書の前に読むという読書法を実施した近世日本の藩校の例が見られない。なお、藩校名を先に示し、その藩校名の改称があった場合は○→○と示した。また各藩校の旧藩名を () 括弧内に明記した。

a) 『近思録』無

1. 修成館¹⁸ (鶴牧藩)

¹⁸ 文部省編『日本教育史資料』第 1 卷 (臨川書店、1972 年) 複製、246 頁。

2. 成徳書院¹⁹（佐倉藩）
3. 日新館²⁰（西大路藩）
4. 文武所→知新館²¹（岩村藩）
5. 文武館→格致堂²²（今尾藩）
6. 文武学校²³（松代藩）
7. 求道館→造士書院²⁴（館林藩）
8. 造士館²⁵（安中藩）
9. 育英館²⁶（中村藩）
10. 汲深館²⁷（泉藩）
11. 致道館²⁸（湯長谷藩）
12. 大野学問所→明倫館²⁹（大野藩）
13. 振徳堂³⁰（篠山藩）
14. 惇明館³¹（福知山藩）
15. 文武稽古所→学館→敬楽館³²（龍野藩）
16. 敬業館³³（林田藩）
17. 四教堂³⁴（佐伯藩）
18. 徳讓館³⁵→弘文館（鹿島藩）

¹⁹ 同上、254 頁

²⁰ 同上、456 頁

²¹ 同上、479 頁

²² 同上、484 頁

²³ 同上、505 頁

²⁴ 同上、599 頁

²⁵ 同上、620 頁

²⁶ 同上、665 頁

²⁷ 同上、675 頁

²⁸ 同上、679 頁

²⁹ 文部省編『日本教育史資料』第2卷（臨川書店、1972年）複製、69頁。

³⁰ 同上、323 頁

³¹ 同上、345 頁

³² 同上、526 頁

³³ 同上、561 頁

³⁴ 文部省編『日本教育史資料』第3卷（臨川書店、1972年）複製、111頁

³⁵ 同上、188 頁

19. 造士館³⁶（鹿兒島藩）

b) 『近思錄』有

1. 明親館³⁷（淀藩）
2. 崇化館³⁸（拳母藩）
3. 徳造書院³⁹（掛川藩）
4. 翼輪堂⁴⁰（水口藩）
5. 明倫堂⁴¹（上田藩）
6. 學習堂⁴²（伊勢崎藩）
7. 學習館⁴³（壬生藩）
8. 時習館⁴⁴（大田原藩）
9. 修道館⁴⁵（白河藩）
10. 養賢堂⁴⁶（仙台藩）
11. 順造館⁴⁷（小浜藩）
12. 進修齋⁴⁸（府中藩）
13. 明倫堂⁴⁹（加賀藩）

³⁶ 同上、288 頁

³⁷ 文部省編『日本教育史資料』第 1 卷（臨川書店、1972 年）複製、11 頁

³⁸ 同上、169 頁

³⁹ 同上、179 頁

⁴⁰ 同上、438 頁

⁴¹ 同上、528 頁

⁴² 同上、625 頁

⁴³ 同上、636～637 頁

⁴⁴ 同上、649 頁

⁴⁵ 同上、659 頁

⁴⁶ 同上、697 頁

⁴⁷ 文部省編『日本教育史資料』第 2 卷（臨川書店、1972 年）複製、2 頁

⁴⁸ 同上、78 頁

⁴⁹ 同上、165 頁

14. 崇徳館⁵⁰（長岡藩）
15. 学問所⁵¹→文武稽古所（津山藩）
16. 正明館→敬止堂⁵²（丸亀藩）
17. 内徳館→敷教館→明倫館⁵³（宇和島藩）
18. 教授館⁵⁴（高知藩）
19. 修猷館⁵⁵（東学問稽古所）（福岡藩）
20. 修道館⁵⁶（三池藩）

c) 四書の後に『近思録』を読む

1. 造士館⁵⁷（三田藩）
2. 直方堂⁵⁸（麻田藩）
3. 諸稽古所・（または集成館）⁵⁹（小田原藩）
4. 修身堂⁶⁰（大溝藩）
5. 致道館→敬教堂⁶¹（大垣藩）
6. 講堂→潜龍館→文武館⁶²（群上藩）
7. 崇教館⁶³（松本藩）
8. 博諭堂⁶⁴（前橋藩）

⁵⁰ 同上、306 頁

⁵¹ 同上、572 頁

⁵² 同上、876 頁

⁵³ 同上、889 頁

⁵⁴ 同上、908 頁

⁵⁵ 文部省編『日本教育史資料』第3巻（臨川書店、1972年）複製、10 頁

⁵⁶ 同上、62 頁

⁵⁷ 同上、55 頁

⁵⁸ 同上、58 頁

⁵⁹ 同上、211 頁

⁶⁰ 同上、445、447 頁

⁶¹ 同上、465 頁

⁶² 同上、472 頁

⁶³ 同上、512 頁

⁶⁴ 同上、573 頁

9. 修道館⁶⁵（宇都宮藩）
10. 講所（明德堂）⁶⁶（三春藩）
11. 日新館⁶⁷（会津藩）
12. 道学堂⁶⁸（新発田藩）
13. 新館・崇広館⁶⁹（柏原藩）
14. 進徳館→篤信館⁷⁰（綾部藩）
15. 礼讓館⁷¹（宮津藩）
16. 明倫斎⁷²（館）（舞鶴藩）
17. 明教館⁷³（松江藩）
18. 顕道館⁷⁴（三草藩）
19. 敬学館⁷⁵（岡田藩）
20. 明倫館⁷⁶（山口藩）
21. 鳴鳳館⁷⁷（徳山藩）
22. 講积所→学習館⁷⁸（和歌山藩）
23. 学問処⁷⁹（徳島藩）
24. 致道館⁸⁰（高知藩）
25. 稽古館⁸¹（秋月藩）

⁶⁵ 同上、634 頁

⁶⁶ 同上、667 頁

⁶⁷ 同上、682 頁

⁶⁸ 文部省編『日本教育史資料』第 2 卷（臨川書店、1972 年）複製、283 頁

⁶⁹ 同上、349 頁

⁷⁰ 同上、352 頁

⁷¹ 同上、357～359 頁

⁷² 同上、364 頁

⁷³ 同上、467 頁

⁷⁴ 同上、557 頁

⁷⁵ 同上、621 頁

⁷⁶ 同上、741 頁

⁷⁷ 同上、779 頁

⁷⁸ 同上、825～826 頁

⁷⁹ 同上、855 頁

⁸⁰ 同上、914 頁

⁸¹ 文部省編『日本教育史資料』第 3 卷（臨川書店、1972 年）複製、26 頁

26. 伝習館⁸²（柳川藩）
27. 思永齋→思永館⁸³（豊津藩）
28. 修道館⁸⁴（岡藩）
29. 明倫堂⁸⁵（高鍋藩）
30. 学習館⁸⁶（佐土原藩）

以上のデータを表にまとめると、次のようになる。

a)『近思録』無	b)『近思録』有	c) 四書の後に『近思録』を読む
19校	20校	30校

表：朱子学系藩校における『近思録』使用の有無とその読書順序

このように、『近思録』の使用事情が確認できた日本の藩校の中では、『近思録』がさほど重視されなかったようである。ほぼ 1/3 の朱子学系の藩校は『近思録』を使用していないのが興味深い。さらに興味深いのが、朱熹の『近思録』→四書→五経という経書の読書順序に従っている藩校の一例も見られないことである。『日本教育史資料』に窺える読書順序に関する詳しい記述がほとんどないが、『近思録』の読書順に関わる短い一文が発見できた。小田原藩の諸稽古所の「肄業ノ次第」には次のように述べられている。

凡入學ノ者ハ先小學ヲ熟讀シ學問ノ基本ヲ可立事。小學畢テ四書に及ぶ其次第ハ學論孟庸トスヘシ。近思録ハ四書の階梯ト雖初學ノ者却テ難辨場合モ往々有之間力付後研究スヘキ事⁸⁷。

⁸² 同上、48 頁

⁸³ 同上、68 頁

⁸⁴ 同上、86 頁

⁸⁵ 同上、255 頁

⁸⁶ 同上、272 頁

⁸⁷ 文部省編『日本教育史資料』第 1 卷（臨川書店、1972 年）複

このように本節では、諸藩校において『近思録』がどの順で読まれたかについて考察してきた。この考察により、朱子学派の藩校であっても『近思録』が使用されなかったり、使用されたりとしても、四書を読む前の初学者の入門書としてではなく、四書の後に位置されていることがわかった。その理由としては、『近思録』が難解であるため、初学者の入門書としては不適切と考えられた。しかし、藩校はそうであっても、他の儒者が經典の読書順序と『近思録』の位置についてどのように考えたのか。次の第三節では、日本の儒者が『近思録』をどの順で読んだかを、各儒者の著作を通して検討してみたい。まず、林述斎を取り上げて考察する。

三、日本儒者の著作に見られる『近思録』の読書順序に関する記述

a) 林述斎

林述斎（1768～1841年）名は衡。字は徳詮。号は蕉軒である。美濃岩村藩主松平乗蘊の子。彼が幕府の命により、血統の絶えた林家を相続し、林家中興の祖として知られている。林家をついだ後、大学頭となり、昌平坂の聖堂学舎を幕府の学問所昌平黌とした。彼に『初学課業次第』という著があり、その中では読順序など、学校のカリキュラムに関して詳細に論じられている。『近思録』に関しては、彼も四書などの後に読むべきものとしている。

近思録 続近思録

前に挙る所の書を歴て、文義略通するに至てはこゝに於て此書
を讀ましむべし、五子の自得されたる所の義理を弁へ、学問の
基本を立るには此書に過ぐるものなし、学人の分量に従て其概

略を得べきなり、文公の語に近思録は四書の階梯と云はれしゆゑ、早く心得居るべき書なり、註に至りては姑く葉采の解に依るといへども意味の深き所は明師良友に就て質さゞれば会得し難し、又文公の語を集めたるは続近思録其要を得たり、故こゝに挙ぐ、邱氏学的など文公の言行を集めたれども其書陋本に近きを以てこゝに載せず、然れども寒郷書に乏しき所にては此を以て代るも亦可なり。太極図説通書并に西銘は文公の註解もて別に精読すべし、然れども義理の奥深に至りては初学の遽に得べき所に非ず⁸⁸。(『初学課業次第』)

「前に挙る所の書を歴て、文義略通するに至てはこゝに於て此書を読ましむべし」とあるように、述斎が四書等をまず読み、その内容の意味をある程度理解してから『近思録』に取り掛かるべきというように考えていたことがわかる。しかし、朱熹が『近思録』を四書の階梯に設定したことから、また「五子の自得されたる所の義理を弁へ、学問の基本を立るには此書に過ぐるものなし」とあるように、述斎が「早く心得居るべき書なり」とも考えていたことがわかる。

『近思録』の注釈書として、やはり葉采の『近思録集解』が挙げられている。珍しいことに、述斎が『続近思録』も進めている。日本儒が『続近思録』を読んだ例がほかにあまり見られなく、日本ではあまり普及されなかったようである。

述斎が『近思録』を重視していたことが明らかである。しかし『近思録』の内容の難解さなどを考慮し、その読む位置がやはり四書の後に置かれている。次に崎門派の三宅尚斎を取り上げたい。

b) 三宅尚斎

三宅尚斎（1662～1741年）、名は重固、字は実操、通称は儀左衛

88

門。山崎闇齋の門人であり、浅見綱齋、佐藤直方と共に崎門三傑のひとりと称される。尚齋がその師闇齋と違い、『近思録』を四書、少なくとも『大学』の後に読むべきと主張している⁸⁹。その著『黙識録』の中に尚齋が次のよう述べている。

或曰、讀書之序、小學、家禮、近思録、四書。或云、不然。小大相承、是聖學不易之定法。何以家禮、近思録、入在於其間哉。余謂、以家禮是小子所學之禮。近思録是四子之階梯。則家禮近思録、置諸小大之間、亦有説焉。然小大之間不容一物者、聖學之要。確乎不可拔。則首小學次四書、而家禮近思録、別附其後、則庶乎可矣。近思録元來衰世之書。不分小大、一混説了。告以成已成物之道耳。若論孟亦然。（『黙識録』卷下）

要するに、読書の順序としては『小学』から始め、次に『家礼』と『近思録』を読み、最後に四書を読むべきであるという意見がある。一方、この読書順序に反対し、『小学』から『大学』に直接入るのが「聖学の易わらざる定法」であり、『家礼』や『近思録』を『小学』と『大学』の間に挟むとはよくないという意見もある。尚齋が考えるには、『家礼』とは、子供が礼について学ぶものである。そして『近思録』とは、「四書」を読むための階梯である。それ故に、この二書を『小学』と『大学』の間に置くという考え方はまだ理屈が通って

⁸⁹山崎闇齋（1619～1692年）は周知のように日本近世前期の著名な儒者であり、神道家でもあった。闇齋は早くから『近思録』に注目しており、その関連資料をいくつか残している。闇齋は宋儒の葉采（生没年不詳）の『近思録』に対する注釈書『近思録集解』など、後世の注釈書を一切斥け、朱熹が編纂した『近思録』の原本に近づけようという意図で、原文とその訓点のみを付した和刻本を刊行した。その本の冒頭に闇齋が「近思録序」を付し、『近思録』は「四書五経」、道学に入るための階梯であると主張している。この序文により、闇齋がいかに『近思録』を四書の階梯として重んじていたことが窺える：「晦庵朱先生曰、近思録好看。四子六經之階梯。近思録四子之階梯。信哉是言也。孟子沒而聖學不傳者、其無此階梯也」（『近思録』闇齋の序）

いる。しかし、『小学』と『大学』の間に「一物を容れざるは聖学の要」というのが尚斎の本心である。彼によると、『小学』を最初に読み、その次に四書に進み、そして四書が終わった後に『家礼』や『近思録』に進むべきという考えである。尚斎によれば、『近思録』はもともと道の行われていない衰世の時代であった南宋に編纂されたものである。『近思録』は『論語』と『孟子』と同様に、衰えた世に「己を成し、物を成す」という聖人の道を告げるものであると尚斎が論じている。

以上の尚斎の文章により、その読書順序に関する意見がどれほど闇斎と異なっているかがわかる。また、その理由としても大変特色のあるものもわかる。『近思録』が四書の後に置かれている理由は、その難解さのためではなく、聖学には根本的な教育法があり、すなわち小学過程から大学課程に進むことである。各課程を代表する著述である『小学』と『大学』の間に別の書を取り入れるとは、実は聖人の学門である聖学に反することになる。次に、尚斎の影響を受けている尾藤二洲について検討する。

c)尾藤二洲

尾藤二洲（1747～1814年）、名は孝肇、字は志尹、通称良佐、号に二洲、約山、静寄軒などがある。24歳で大坂に出て片山北海に師事し、最初は徂徠学を学ぶが、まもなく朱子学に転向する。古賀精里や柴野栗山とともに寛政の三博士といわれた。寛政異学の禁に際して、1791年（寛政3年）に幕府学問所教授となり、同所の運営や幕臣子弟等の教育に当たり、20年勤めて江戸に没した。著には『正学指掌』やその文集『静寄軒集』がある。彼の著『正学指掌』には経書の読書順序に関して次のように語っている。

四子ハ六經ノ階梯。近思録ハ四子ノ階梯トハ、朱子讀經ノ法ナ

リ。コノ心得アリテ讀ベシ。タゞ四書五經イマダ脩メズシテハ。
近思録ヲ讀ドモ却テ通シ難カラン。三宅氏ノ著セル默識録ニ讀
書ノ法ヲ定メテ。首ニ小學。次ニ四書。ソノアト家禮近思録ト
セリ。コノ法ニ從ヒテ可ナラン。モシ汜濫ト書ヲ讀ミナレタル
バカリニテ。向フ所ヲ知ラヌ人ナドニハ。マヅ近思録ヲ讀マセ
テ其後四書集注讀マセタランモ宜シカルベシ。四書五經ノ本文
ヲタニシカト記セヌ者ニハ。近思録授ケ難シ。(『正学指掌』力
行)

これにより、近思録→四書→六經という朱熹の読書法のように読む
のもいいが、四書五經をまだ習得していない人には、『近思録』を先
に読めばかえって理解しがたいかもしれないと二洲が考えているこ
とがわかる。三宅尚齋が『默識録』に定めた読書法、つまり小学を
最初に読み、次に四書に進み、そしてその後に『家礼』や『近思録』
を読むという方法に従うのも良いというように二洲が述べている。
しかし、二洲が尚齋のように、聖学の理念から『小学』→四書→『近
思録』という順序を進めているわけではなく、やはり「四書五經イ
マダ脩メズシテハ、近思録ヲ讀ドモ却テ通シ難カラン」と述べてい
るように、『近思録』を先に読むとかえってわかりづらいというよう
に考えていたためである。しかし、「汜濫ト書ヲ讀ミナレタルバカリ
ニテ、向フ所ヲ知ラヌ人ナドニハ、マヅ近思録ヲ讀マセテ其後四書
集注讀マセタランモ宜シカルベシ」と述べられているように、道学
の目的を知らない人などに対しては、まず『近思録』を先に読ませ
てから四書集注を読ませても良いというよう考えていた。ただやは
り、「四書五經ノ本文ヲタニシカト記セヌ者ニハ、近思録授ケ難シ⁹⁰」

⁹⁰ 「四書五經ノ本文ヲタニシカト記セヌ者」とは、四書五經の語
義を知らなくとも、素読をもって四書五經の本文すらまだ丸暗記し
ていない人にとっては、『近思録』をゼロから読ませるのがとても
無理であるという意であろう。『近思録』は四書五經の語句を多く
引用しているため、四書五經をまったく知らない初学者にとっては
余計に読みがたいと考える。

とあるように、四書五経の本文すらしっかりと書けない人に対しては『近思録』を教授することが難しい。

このように、『近思録』は四書の後に読むべきものであると考える代表的な日本儒者を中心に見てきた。これにより『近思録』を四書の後に読むという読書順が主流であったことがわかる。本節では日本の諸儒者の著作を調査し、その『近思録』の読む順序についての見解を考察してきた。この考察により、藩校の場合とどうように、『近思録』が四書を読む前の入門書としてあまり用いられなかったことがわかった。

明治初期になると、初学かていにおいて小学→（家礼）→近思録→四書五経という順序を守ろうとした藩校が現れるが⁹¹、本節で明らかにしたように、近世期を通じて、近思録を四書の後に読むのが主流であった。しかし、近思録が初学者の入門書として重視されなかったとあって、『近思録』を完全に無視したとは決していえない。その現存している大量の『近思録』注釈書や講義録からわかるように、近世全期に渡り、近思録が非常につぶさに研究され、尊ばれていたのである。本節で見た三宅尚斎も、『近思録筆記』など、極めて詳細な『近思録』注釈書を残している。それにもかかわらず、日本儒者が『近思録』を初学課程の入門書としなかったのは、やはりその内容の難解さなど、それぞれの理由によるものであった。次に中国における『近思録』と経書の読書順序について検討してみよう。

四、中国儒者の著作に見られる『近思録』の読書順序に関する記述

中国の学規・学則類の中では元代の程端礼の『程氏家塾読書分年日程』がきわめて有名である。程端礼（1271～1345年）は、元朝の

⁹¹道学館（鶴田藩）。『日本教育史資料』第2巻、575頁

儒者、詩人、教育者である。字は敬叔または敬礼、号は畏齋。慶元府の人。元朝（1271～1368年）には朱子学が普及し、朱熹の注が再開された科挙で採用されるようになった。『程氏家塾読書分年日程』が読書の順序などに関して詳細に述べられているため後世では科挙対策の書として注目を集め、その影響は元朝のみならず、また明清にも及び、さらに日本でも読まれていた。『近思録』に関しては程端礼が次のように述べている。

随雙隻日之夜、附讀看玩索性理書。[性理畢、次治道、次制度。]如大學、失時失序、當補小學書者。先讀小學書數段、仍詳看解、字字句句、自要說得通透乃止。小學書畢、讀程氏增廣字訓綱[此書鈐定性理、語約而義備、如醫家脈訣、最便初學]。次看北溪字義、續字義、次讀太極圖、通書、西銘、並有朱子解、及有何北山發揮。次讀近思錄[看葉氏解]、續近思錄[蔡氏編、見性理羣書]。次看讀書記、大學衍義、程子遺書、外書、經說、文集、周子文集、張子正蒙、朱子大全集、語類等書。或看或讀、必詳玩潛思、以求透徹融會、切己體察以求自得。性理緊切書目通載于此、讀看者自循輕重先後之序⁹²。

これにより、程端礼がまず『小学』を非常に重んじていることがわかる。そして、『小学』を読み終われば、性理書を読む際『北溪字義』等に進め、次に北宋五子の『太極図』・『通書』・『西銘』・等の書を読み終わってから、『近思録』を読むように進められている。『近思録』は五子の著作から重要な語を採取し、その思想を読みやすくしたものであるはずにもかかわらず、程端礼が先に五子の書を読ませているのが興味深い。その理由としてはわからないが、程端礼が『小学』等のほど『近思録』をあまり重視しなかったと考える。中国の朱子学者の間、初学課程において『近思録』をあまり重んじなかつ

⁹² 松野敏之訳「『程氏家塾読書分年日程』訳注(三)」『論叢アジアの文化と思想』15（2006）72頁

た礼が多くみられる。例えば、明代の儒者吳與弼（1391～1469年）がその学規において次のように述べている。

學規

一、須用循序熟讀。小學四書本文令一一成誦。然後讀五經本文亦須爛熟。成誦庶幾逐漸有入。此箇工夫須要打捱歲月方可苟欲早栽樹晚遮陰則非吾所知也。一、學者所以學為聖賢也在齋務要講明義理修身慎行為事如欲涉獵以資口耳工詩對以事浮華則非吾所知也。（『康齋集』卷8）

このように、吳與弼が『小学』→『四書』→『五經』という順を主張していることがわかる。

また、清代の朱子学者、陸世儀（1611～1672年）も、その著『思辨録輯要』において次のように述べている。

十年誦讀

小學〔文公小學頗繁。愚欲另編節韻幼儀語見前卷〕

四書〔先讀正文、後讀註〕

五經〔先讀正文〕

周禮〔柯尚遷者佳〕

太極通書西銘（『思辨録輯要』卷4）

これにより、陸世儀も初学者に対して『近思録』を進めていないことがわかる。

以上のように、程端礼の『程氏家塾読書分年日程』を中心に、元・明・清の儒者と『近思録』の読書順序についてのいくつかの例を見てきた。これにより、日本の儒者と同様に、中国の儒者も初学課程において『近思録』をあまり重視しなかったことがわかった。

次の第五節では、朝鮮の儒者と『近思録』の読書順序について検

討する。

五、朝鮮儒者の著作に見られる『近思録』の読書順序に関する記述

李珥（1536～1584年）、字は叔献、号は栗谷。李滉とならぶ朝鮮の二大儒と称される。李珥が初学者のためにたくさんの書を残している。ここで、彼の『擊蒙要訣』に見られる『近思録』に関する記載を見てみよう。

學者常存此心。不被事物所勝。而必須窮理明善。然後當行之道。曉然在前。可以進步。故入道莫先於窮理。窮理莫先乎讀書。以聖賢用心之迹及善惡之可效可戒者。皆在於書故也。

凡讀書者。必端拱危坐。敬對方冊。專心致志。精思涵泳。涵泳者。熟讀深思之謂。深解義趣。而每句必求踐履之方。若口讀而心不體身不行。則書自書我自我。何益之有。先讀小學。於事親敬兄忠君弟長隆師親友之道。一一詳玩而力行之。

次讀大學及或問。於窮理正心修己治人之道。一一真知而實踐之。

次讀論語。於求仁爲己。涵養本原之功。一一精思而深體之。

次讀孟子。於明辨義利。遏人慾存天理之說。一一明察而擴充之。

次讀中庸。於性情之德。推致之功。位育之妙。一一玩索而有得焉。

次讀詩經。於性情之邪正。善惡之褒戒。一一潛繹感發而懲創之。

次讀禮經。於天理之節文。儀則之度數。一一講究而有立焉。

次讀書經。於二帝三王治天下之大經大法。一一領要而溯本焉。

次讀易經。於吉凶存亡進退消長之幾。一一觀玩而窮研焉。

次讀春秋。於聖人賞善罰惡抑揚操縱之微辭奧義。一一精研而契悟焉。

五書五經。循環熟讀。理會不已。使義理日明。而宋之先正所著之書。

如近思錄，家禮，心經，二程全書，朱子大全，語類及他性理之說。宜間間精讀。使義理常常浸灌吾心。無時間斷。

而餘力亦讀史書。通古今。達事變。以長識見。若異端雜類不正之書。則不可頃刻披閱也。

凡讀書。必熟讀一冊。盡曉義趣。貫通無疑。然後乃改讀他書。不可貪多務得。忙迫涉獵也。

(『栗谷先生全書』卷 27「擊蒙要訣」)

李珥がまず存心など学者の基本姿勢について説き、その後に経書の読書順をつぶさに説明している。要するに、『小学』→『大学』+『大学或問』→『論語』→『孟子』→『中庸』→『詩経』→『礼経』→『書経』→『易经』という順になっており、『近思録』・『家礼』・『心経』などの性理学書が正式な順序に入っていないことがわかる。

李珥には『学校模範』というもう一書があり、この中に『擊蒙要訣』と少し違う経書順序が説かれている。

三日讀書。謂學者既以儒行檢身。則必須讀書講學。以明義理。然後進學功程。不迷所向矣。從師受業。學必博。問必審。思必慎。辨必明。沈潛涵泳。必期心得。每讀書時。必肅容危坐。專心致志。一書已熟。方讀一書。毋務汎覽。毋事彊記。其讀書之序。則先以小學。培其根本。次以大學及近思錄。定其規模。次讀論孟中庸五經。閒以史記及先賢性理之書。以廣意趣。以精識見。而非聖之書勿讀。無益之文勿觀。讀書之暇。時或游藝。如彈琴習射投壺等事。各有儀矩。非時勿弄。若博弈等雜戲。則不可寓目以妨實功。(『栗谷先生全書』卷 15・雜著「學校模範」)

『擊蒙要訣』では『小学』の後に『大学』と『大学或問』が置かれていたが、ここでは、『近思録』が『大学』と同じ位置に置かれているようになっている。「大学及び近思録を以て、其の規模を定む」と述べられているように、『近思録』と『大学』により、聖学の規模を把握することが出来る。李珥がなぜその読書順を変えたかは不明であるが、『學校模範』は学校内の科挙勉強を考慮して書かれたものであるため、もしかするとこの事情が関係していると考えられる。

次に、李滉の読書順序について見てみよう。李滉(1501~1570)、字は景浩、号は退溪、陶翁、退陶。慶尚北道礼安の人である。かれ

には『伊山院規』という極めて有名な学規がある。その読書の順序については以下の通りである。

一、諸生讀書。以四書五經爲本原。小學，家禮爲門戶。遵國家作養之方。守聖賢親切之訓。知萬善本具於我。信古道可踐於今。皆務爲躬行心得明體適用之學。其諸史子集。文章科舉之業。亦不可不爲之旁務博通。然當知內外本末輕重緩急之序。常自激昂。莫令墜墮。自餘邪誕妖異淫僻之書。竝不得入院近眼。以亂道惑志。(『退溪先生文集』卷41・雜著「伊山院規」)

ここでは、四書五經が「本原」とされ、『小学』や『家礼』が「門戸」とされている。特記されていないが、『近思録』が恐らく「門戸」の枠に入るだろう。李滉の学統の中でもそのように考えていたようである。李滉学派の尹光紹(1708~1706年)の学規では次のように述べられている。

一。講學之方。朱夫子白鹿洞規。退陶先生伊院規。至矣盡矣。無容更贅。淨寫一通。揭之齋壁。謹守無違。

一。讀書次序。退翁既以四書五經爲本。小學，家禮爲門戶。且令旁通諸史子集。今倣此意。分爲三科。讀四書五經者爲一科。讀小學，家禮，心經，近思録及程朱諸書者爲二科。讀史子者爲三科。一科則背誦令熟。二科則通讀講論。三科則或通讀背誦隨宜。(『素谷先生遺稿』卷13・福州録「興學規範」)

要するに『小学』・『近思録』などの「二科」の書は「一科」の四書五經の後に読むべきものとされている。

このように、朝鮮の経書読書順序における『近思録』の位置について検討してきた。

本章の考察により、日本・中国・朝鮮では、『近思録』がほとんど四書の後には読まれたことがわかった。また、その理由として、『近思

録』の難解さによることがわかった。

第4章

近世前期の『近思録』研究 一 — 貝原益軒の『近思録』研究 —

はじめに、

本章では、『近思録』が近世日本においてどのように研究され、どのように解釈されたかの一例として、貝原益軒の『近思録』研究について考察してみたい。

『近思録』という書物は、道学の集大成者である南宋の朱熹（1130～1200）がその友人の呂祖謙（1137～1181）の協力を得て14巻に編纂し、淳熙3年（1176）に刊行したものである。その内容としては、道学の宇宙論や修己治人などの根本的学説を紹介することを目的とし、北宋の四人の道学者（四子）である周惇頤（1017～1073）、程顥（1032～1085）、程頤（1033～1107）、張載（1020～1077）のそれぞれの著書や語録から重要と思われる部分を摘出したもので、道学の入門書になることを企図している。

その後、中国や朝鮮において『近思録』の注釈書が多く著述され、日本においてもさまざまな注釈書や講義録が著された。江戸前期の儒学者、筑前福岡藩士の貝原益軒（1630～1714）の『近思録備考』（寛文8（1668）年刊、益軒39歳）はその最早期のものの一つに数えられている。この書は宋儒、葉采（生没年不詳）の『近思録集解』を底本とし、『近思録』の本文や説明を要すると思われる葉采の注を摘出し、語義や出典を考証した著書である。益軒は朱熹とその他の先儒の言説を引用し、時には自説をも加えている。

益軒は『近思録備考』の後に、「近思録説」という著述も著した。「近思録説」は写本として現在に伝わり、益軒晩年の著『慎思録』の未刊の手稿本に載録されている。『慎思録』6巻本は正徳4年(1714)、益軒85歳の時に刊行されたが、この刊本の他に『慎思録』12巻本の手稿本2点も存在する。この2点の手稿本は「貝原家本」と益軒の門人であった竹田春庵の「竹田家本」であり、「近思録説」はこの『慎思録』手稿本の第9巻の一部に当たるものである。

『慎思録』と共に益軒の晩年の著作として『大疑録』(正徳4年刊)がある。これは益軒が宋学に対する批判を行った著作としてよく知られている。その批判の一例として、北宋の周惇頤の『太極図説』や同書を収録している『近思録』の第1篇「道体」の第1条の書き出し部分の「無極而太極」や「主静立人極」や「太極本無極」に対する批判があげられる。

無極而太極、是華嚴法界觀之語也。法界觀是唐杜順和尚所作。相伝而至于周子。若太極本無極、及主静立人極、此自仏老之徒所伝来。朱子尊信於周子也至矣。故信出于周子而不為疑也⁹³。
(『大疑録』下篇)

要するに、益軒は「無極而太極」などの語は唐の僧侶である杜順の著『華嚴法界觀』に由来するとし(しかし「無極而太極」の語は『華嚴法界觀』に見られない)、周惇頤がこの仏教や老荘思想に基づくとおぼしき語を用いたことを非難している。

益軒のこのような批判は『近思録備考』第一巻の「道体類」には見られないが、『大疑録』とほぼ同時期に完成した『慎思録』の「近思録説」において「無極而太極」などの語に対する否定は見られるのであろうか。また、『近思録備考』と「近思録説」とはどのような関係を持っているのか。「近思録説」の構成は『近思録備考』とどの

⁹³ 荒木見悟他校注『貝原益軒 室鳩巢』「日本思想大系 34」(岩波書店、1970年) 397頁

ように異なり、各書の間にはどのような相違点や思想的展開が見られるのであろうか。また、益軒の『近思録』解釈の特徴は何であらうか。

そこで、以上の疑問を明らかにするために、本章では『近思録備考』と「近思録説」に見られる益軒自説の注釈に着目し、初歩的な一考察を行った。

一、本章の目的と方法

本章の第一目的はまず、『近思録備考』と「近思録説」の異同を明らかにすることである。まず、篇題、条数等に注目し、構成上この二書はどのように異なっているかを考察する。次に、両書の道体篇第1条に関する益軒自身の説を中心に、「近思録説」において思想的新展開が見られるか否か、また『近思録備考』と比べてどのような特徴が見られるかを明白にする。『近思録備考』は『朱子語類』・『朱子文集』・『性理大全』先儒の書から多くの語を引いているが、本章においてはこれらを取りあげず、益軒自注のみを対象とする。最後に、「近思録説」の道体篇第1条において益軒の『大疑録』と同様、朱子学に対する批判が見られるか否かを考察する。

本章第二の目的は、益軒の『近思録』研究における思想的特徴を明らかにすることである。まず、益軒の『近思録集解』葉采注批判を通し、益軒の解釈の特徴について検討する。次に、愛養精力・敬・静坐を中心に、益軒の『近思録』研究に見られる存養工夫論の特徴について考察する。

『近思録備考』の底本は寛文8年刊本（和刻影印近世漢籍叢刊『近思録備考』、中文出版社、1997年）を用いることとし、『益軒全集』巻二（活版、益軒全集刊行部、1911年）所収の同書を参考にした。また「近思録説」の底本は『慎思録』の竹田家本の12巻本所収の第9巻「近思録説」（近世儒家資料集成第5巻、『貝原益軒資料集 上』ぺりかん社、1989年）とした。なお、以下の原文引用における句読

点と下線はすべて筆者によるものである。

二、『近思録備考』と「近思録説」の構成上の特徴

『近思録』はすべて 622 条からなっており、14 巻に分けられている。篇題はもともと付していないため⁹⁴葉采がその『近思録集解』の各 14 巻に篇題をみずから立てた⁹⁵。益軒の『近思録備考』は『近思録集解』の全 14 篇を注解し、14 巻からなっているが、「近思録説」は 10 巻しか注解していない。また、『近思録備考』はその 9 巻までは『近思録集解』の篇題を採用しているが、6 巻と 10 巻以降の篇題はなぜか朱熹の「逐篇綱目」⁹⁶に見られる『近思録』の篇題に従っているか、または無題となっている。これに比べ、「近思録説」においては、解説されている 10 篇の冒頭すべてに『近思録集解』の篇題が掲げられている。以下の表において『近思録備考』と「近思録説」の篇題と巻数の関係を明示した。

⁹⁴ 程水龙『《近思录》版本与传播研究』「文史哲研究丛刊」（上海古籍出版社、2008 年）12 頁、山崎道夫『近思録』「中国古典新書」（明德出版社、1992 年）29～34 頁。

⁹⁵ 葉采の篇題は：一 道体、二 為学、三 致知、四 存養、五 克己、六 家道、七 出処、八 治体、九 治法、十 政事、十一 教学、十二 警戒、十三 弁異端、十四 觀聖賢。

⁹⁶ 『朱子語類』卷 105 にいう、「近思録逐篇綱目、一道體、二為學大要、三格物窮理、四存養、五改過遷善、克己復禮、六齊家之道、七出處、進退、辭受之義、八治國、平天下之道、九制度、十君子處事之方、十一教學之道、十二改過及人心疵病、十三異端之學、十四聖賢氣象」。(宋)黎靖徳編、王星賢点校『朱子語類』(中華書局、1994 年) 2629 頁

卷（篇）数	『近思録備考』	「近思録説」
1	道體類	道體類
2	爲學類	爲學類
3	致知類	致知類
4	存養類	存養類
5	克己類	克己類
6	[無題]	—
7	出處類	出處類
8	治體類	治體類
9	治法類	治法類
10	君子處事之方	—
11	教學之道	—
12	改過及人心疵病	—
13	[無題]	辨異端類
14	[無題]	觀聖賢類

表. 『近思録備考』と「近思録説」の巻数と篇題

益軒は『近思録』の篇題の立て方に関して特に論じていないため、なぜ以上のような篇題法を採用したかは不明である。『近思録備考』は第 9 篇までに葉采の篇題を採用しているにもかかわらずなぜ第 10 篇以降は朱熹の「逐篇綱目」の語に基づいて篇題を立て、あるいは無題にしたのかは不思議である。葉采の『近思録集解』を注解している以上、「近思録説」のように葉采の篇題に従うことが当然だと思われるが、なぜか『近思録備考』の最後の 5 巻の篇題は違うのである。

次に、『近思録備考』が『近思録』の 622 条のほぼ全条といくつかの葉采の注を注解しているに対し、「近思録説」は各篇の数条しか取り上げていない。道体篇の 51 条のうち「近思録説」は 10 条を注釈

している。それらの条は順に、1、21、12、13、14、15、16、17、27、49である。21条はなぜか2番目に設置されている。益軒はこれについては何も述べていないので、この順番に何か特別な意味があるか否かは不明である。なお、他篇の条においても同様な順番転倒が見られるかどうかは今後の考察を待ちたい。

以上のことから「近思録説」構成上の特徴として3点が挙げられる。

1) 『近思録集解』の全14篇に対し、「近思録説」は10篇を注解している。これは全14篇を注解している『近思録備考』と異なる。

2) 「近思録説」はその各10篇の注解に葉采の篇題を冠している。一方、『近思録備考』は1から9巻(6巻を除く)までは葉采の篇題を採用しているが、6巻、そして10巻から14巻までは朱熹の「逐篇綱目」の篇題を採用したり、または無題にしたりしている。

3) 『近思録備考』は『近思録』のほぼ全622条を注釈の対象としているのだが、「近思録説」は各篇の数条しか注釈していない。また「近思録説」の道体篇の条の置き方に関し、第21条を2番目に置くという順番の置換が見られる。

次に、『近思録備考』と「近思録説」の比較を行うため、それぞれの道体篇第1条に見られる相違点とその特徴について考察してみたい。

三、『近思録備考』と「近思録説」の道体篇に見られる相違点と特徴

『近思録備考』と「近思録説」の道体篇第1条⁹⁷を分析してみる

⁹⁷ 濂溪先生曰、無極而太極。太極動而生陽、動極而靜。靜而生陰、靜極復動。一動一靜、互爲其根、分陰分陽、兩儀立焉。陽變陰合、而生水火木金土、五氣順布、四時行焉。五行一陰陽也。陰陽一太極也。太極本無極也。五行之生也、各一其性。無極之眞、二五之精、妙合而凝。乾道成男、坤道成女、二氣交感、化生萬物。萬物生生、而變化無窮焉。惟人也、得其秀而最靈。形既生矣、神發知矣。

と、相違点およびその特徴として以下の3点が挙げられる。引用文のすぐ後にその頁数を括弧内に明記した。『近思録備考』は「和刻影印近世漢籍叢刊」の『近思録備考』により、「近思録説」は「近世儒家資料集成第5巻」の『貝原益軒資料集 上』によっている。

1、「近思録説」は『近思録備考』の文をほぼそのまま踏襲している箇所がある

A1 「近思録説」

無極而太極章、陽變動而交於陰、陰凝合而交於陽、陰陽交和、而生五行之質。又案、無極而太極者、易所謂、易有太極也。動生陽、靜生陰者、是太極生兩儀也。生水、火、木、金、土者、兩儀生四象也。(235頁)

A2 『近思録備考』

愚案、陽變動而交陰、陰凝合而交於陽、陰陽交和、而生五行之質。又案、無極而太極者、易所謂、易有太極也。動生陽、靜生陰者、是生兩儀也。生水、火、木、金、土者、兩儀生四象也。(43頁)

B1 「近思録説」

君子修之、小人悖之、之字、俱指中正仁義而言。(236頁)

B2 『近思録備考』

案、修之之字、指中正仁義而言。(59頁)

五性感動而善惡分、萬事出矣。聖人定之以中正仁義、聖人之道仁義中正而已矣。而主靜。無欲故靜。立人極焉。故聖人與天地合其德、日月合其明、四時合其序、鬼神合其吉凶。君子脩之吉、小人悖之凶。故曰、立天之道、曰陰與陽、立地之道、曰柔與剛、立人之道、曰仁與義。又曰、原始反終、故知死生之說。大哉易也、斯其至矣。(『近思録』道体篇第1条)

原文の異なる箇所を下線によって示した。ここに見られる益軒の説明はほぼ同一であり、「近思録説」では助辞や名詞をわずかに補足しているにすぎない。思想的な相違も当然ながら見られない。

2、「近思録説」は『近思録備考』の文をほぼそのまま利用しながら、 新しい解説をその文章の中に混入している箇所がある

A1 「近思録説」

原始反終。當做兩平看。不可專主知死一邊說。故下曰、知死生之說、與論語子路問死章、其旨不同。蓋原始則知生之說、反終則知死之說、然始終一理、知始則知終、知終則知始。故知所以死者、亦不出知所以生而已。朱子註、天地間、綱紀、指三才之道。是言本文上之半節。造化流行、指原始反終。故知死生之說。是言本文下之半節。葉采註分說太極之體用亦可玩味。(237 頁)

A2 『近思録備考』

愚謂、原始反終。始終當做兩平看。不可專主知死一邊說。故下曰、知死生之說、與論語子路問死章、其旨不同。朱子註、天地間、綱紀造化流行。及葉采註、太極之體、所以立也云云、知死生之說、則盡二氣流行之妙矣。此太極之用、所以行也云云、尤可玩味。

註[天地之間綱紀]指本文三才之道。[造化流行]指原始反終。故知死生之說。(64 頁)

原始反終・知生死之説はもと『周易』繫辭上傳の語である。益軒は A1 では、『近思録備考』の文を踏襲しながら原始反終・知生死之説の説明を補足している。要するに、物事の始めを^{たす}原ねて生ずるわけを知れば、その終わりに反って死するわけを知ることが出来ることが説明され、さらに始と終・生と死の関係の不可離、表裏一体性が A2 では強調されている。つまり、生ずるわけを知れば死するわけ

も知り、死するわけを知れば生ずるわけも知ることが出来るということである。また、体用の論理をもって原始反終・知生死之説を説明する『近思録集解』の葉采注に対して益軒は賛成しているようである。

3、『近思録備考』にない「近思録説」に見られる新説がある。また、「近思録説」は『近思録備考』の注釈を利用しない場合もある

A1「近思録説」

形既生矣。神發知。篤信謂、耳目口鼻體之形魄既生、則自其神發知覺、而目視、耳聽、口言、鼻嗅、體動、皆因外物來感而生、則五性隨此而感動、五性感動而中節、則和而爲善。不中節、則戾而爲惡。因所感無窮、而萬事自是而出矣。(235 頁)

A2『近思録備考』

神發知者、精神運用也。五性、即是五常之性、五行之徳也。(51 頁)

B「近思録説」

聖人定之云云主静立人極、定字與主静相應、定之以中正仁義者、須主静。是所以人極之立也。(236 頁)

C「近思録説」

大哉易也斯其至矣。斯字指圖説。其字指易道。盖言易道之大也。此圖盡之。故曰斯其至矣。此説本于性理紀聞。今人斯字指易道者、非也。(238 頁)

A1 と A2 では「神發知」を解説し、知覚の機能と五性（仁義礼智信の性）の関係について述べている。A2 の『近思録備考』では「神

發知」(＝精神運用)と「五性」(＝五常の性と五行の徳)が解説されているが、A1の「近思録説」にはこの解説は見られない。A1の文における「五性感動而中節、則和而爲善。不中節、則戾而爲惡」の語は朱熹の『太極図説解』の語、「及其感動、則中節者爲善、不中節者爲不善」に基づいていると考える。なおこの朱熹の語は『近思録備考』では別の箇所に引用されている⁹⁸。

Bでは「定」字とその対象である「中正仁義」が解説されている。『近思録備考』には「定」字に対する益軒の説明はない。Cでは、道体篇第1条の最後の語「大哉易也斯其至矣」の「斯」「其」字を解説している。ここに『性理紀聞』という書が言及されているが、これは明朝の儒者、葉涵の著作である。益軒の読書目録である「玩古目録」を確認すると、益軒は延宝8年(1680)、51歳の時に『性理紀聞』を読み始めていることがわかる⁹⁹。これによって、『近思録備考』が完成して以降の益軒の研究成果が「近思録説」に採用されていることがわかる。

以上のことから、「近思録説」の道体篇第1条に関する益軒の自説においては、益軒は『近思録備考』の自説をそのほぼ同文を踏襲したり、『近思録備考』の自説に新解説を付け加えたり、さらに『近思録備考』に見られない新たな自説を追加したりしていることがわかった。しかし、全体としてこの第1条においては『近思録備考』と「近思録説」との間にそれほどの思想的新展開は見られないようである。また、『大疑録』に見られる益軒の朱子学批判のような語は「近思録説」のこの条においては見られない。

次に、益軒の『近思録』研究に見られる思想的特徴について論じる。

⁹⁸ 「朱子曰及其感動…」(『近思録備考』51頁)

⁹⁹ 「玩古目録」の延寶8年の項に、『性理紀聞』の書名の横に益軒は「粗見明年又見」と記入している。岡田武彦『貝原益軒』「世界哲學家叢書」(東大圖書公司引行、1987年)193頁の付録「貝原益軒全集未収資料」を参照。

四、貝原益軒の『近思録』研究における思想的特徴

1、益軒の『近思録集解』葉采注批判

益軒は『近思録備考』と「近思録説」には『近思録』の本文と必要に応じて『近思録集解』の葉采注を共に注解している。益軒は『近思録』を注解するに当たり、『近思録』本文の真意を明らかにするために、彼は時には葉采の注釈や『近思録集解』の構成に対して批判的な態度を取り、非難している。以下に、益軒の『近思録』研究の特徴の一例として、彼の葉采注に対する批判の二例について考察してみたい。

まず、『近思録備考』に見られる葉采の道体篇における朱熹の「太極図説解」注の扱いに対する益軒の批判について考察する。

『太極図解』や『太極図説解』は、朱熹が周惇頤の撰述した『太極図』や『太極図説』の書を解釈するために著した著作である。葉采は道体篇において『太極図説』を注釈するために朱熹の「太極図説解」を利用しているが、彼が『太極図解』や『太極図説解』の全文をそのまま引用せずに、その文章を部分的に抜粋し、その原文と異なる順序で載せている。益軒はこのことに対し厳しく非難し、『近思録備考』において次のように述べている。

篤信、看葉氏近思録太極圖説註解、不載於朱文公註解之全文、只任意截略、去取之耳。故證于後者、不應于前。且分節段、亦與朱子之所定異。不能使學者莫迷。識者憾之。夫朱子之註解、固既爲明備。不知葉氏因何改解如此。(『近思録備考』65～66頁)

要するに、葉采の『太極図説』の注解を見るに、葉采が朱熹の『太極図解』や『太極図説解』の全文を載せずして、ただ自らの意見に任せて朱熹の原文の文章を切断したり略したりして部分的に引用しているため、その前後の文がちぐはぐで一致していない。さらに、

葉采の注文は朱熹が定まった原文の節と段とは異なり、読む人を混乱させてしまうような注解となっていると益軒は述べている。また、『太極図説』は『近思録』のもっとも重要なところであり、そのすべての学説がここに帰結する。『太極図解』や『太極図説解』に見られる朱熹の注解は明解である故に、周惇頤の『太極図説』を読む人は朱熹の注解をそのまま頼るべきであることから『太極図解』や『太極図説解』の全文を『近思録備考』に付すると益軒は次のように述べている。

愚謂、太極圖說者近思録開卷第一義也。全書之中、尤當歸重於此。故今採朱子註解附乎此。欲使觀太極圖說者知有朱子之明解可據也。（『近思録備考』66頁）

以上のように、益軒は葉采の朱熹の注の扱いなど、『近思録集解』の構成に対して批判的な視点もあったことがわかる¹⁰⁰。

次に、葉采の『近思録』本文の解釈に対する益軒の批判について検討する。

まず、弁異端篇の第3条¹⁰¹の葉采注に対する益軒の批判について考察する。第3条にいう「四大」の語について葉采が仏教でいう地・水・火・風として解している¹⁰²。四大の語は『楞嚴經』や『円覚經』などの仏典に見られ、地・水・火・風の四要素の集まりによって人間の身体が作られていると見るが、仏教ではこれは仮の集合と見ら

¹⁰⁰ 『大疑録』には、太極説など、道学者の理学を儒学の第一義とすることが非難されている：「宋諸先生以説理学為先。如近思録、以大極図説、為開卷第一義是也。是先上達而後下学也。恐与孔孟之立教不同」（『大疑録』卷下）

¹⁰¹ 明道先生曰、道之外無物、物之外無道。是天地之間、無適而非道也。即父子而父子在所親、即君臣而君臣在所嚴。以至夫婦、為長幼、為朋友、無所為而非道。此道所不可須臾離也。然則毀人倫、去四大者、其戾道也遠矣。（『近思録』弁異端篇第3条）

¹⁰² 滅除四大。其戾於道遠矣。釋氏以地水火風、為四大。謂四大幻假而成人身。寂滅幻根、斷除一切。（『近思録集注』弁異端篇第3条 葉注）

れるため、肉体を蔑ろにしている。益軒はこの「四大」の解釈を非とし、次のように述べている。

明道先生曰道之外章。葉采集解四大為地水火風。此說可為非。

老子曰、域中有四大而王居一焉謂道大天大地大王大也。（『近思錄説』254頁）

要するに、益軒が「四大」を葉采が説くように仏説の地・水・火・風として捉えるべきではないと考え、『老子』の中にいう道・天・地・王の「四大」をこの条の「四大」の解釈として採用しているように見える¹⁰³。『近思錄集解』以外にも、中国・朝鮮・日本の他の注釈書が全部「四大」を仏説でいう身体として捉えている¹⁰⁴。仏教のもっとも異端であることを説いているこの条の文脈から見れば、「四大」を仏説の地・水・火・風として捉えるほうが自然であり、妥当と考える。益軒はこれ以上に、「四大」について述べていないため、彼はなぜこのように解釈しているかは不明である。

2、益軒の『近思錄』研究に見られる存養工夫論 一愛養精力・敬・静坐を中心に一

道学の最終目的である聖人になることを成し遂げるために、自己

¹⁰³ 故道大、天大、地大、王亦大。域中有四大而王居其一焉。人法地，地法天，天法道，道法自然」（『老子』）

¹⁰⁴ 中国の注釈書の中で、清の茅星來の『近思錄集注』には「四大」をもっとも詳しく注解している：「外於道之外、呂本作戾。四大、地水火風也。楞嚴經、身中堅相為地、潤濕為水、煖觸為火、動搖為風。圓覺經謂、髮毛、爪齒、皮肉、筋骨、髓腦、垢色、皆歸于地。唾涕、膿血、津液、涎沫、痰淚、精氣、大小便利、皆歸于水。煖氣歸火。動轉歸風。釋氏謂四大幻假、而成人身、故欲絕滅幻根斷除一切。其戾于道也、遠矣。朱子曰、釋氏地、水、火、風、粗而言之、地便是體、水便是魄、風火便是魂」（『近思錄集注』弁異端篇茅注）

修養が必要不可欠となる。自分の心を存し、その性を養う（存養）ことの重要性が道学者の間で度々主張される。その手段、つまり存養の工夫として、「敬」や「静坐」の方法がある。益軒は『大疑録』の中に静坐など厳しく非難しているにもかかわらず、「近思録説」では敬や静坐の重要性が主張されている。ここでは、益軒の『近思録』研究に見られる彼の存養工夫論について検討したい。存養篇の精力の愛養説、敬説、静坐説に関する数条の益軒の注解を中心に取り上げて考察する。

a. 精力の愛養

存養篇第 11 条に「精力を愛養する」ことが論じられている¹⁰⁵。精力は要するに精神気力のことであり、「精力を愛養する」とは、その精神気力を愛護して養うことである。益軒がこの語に着目し、存養の工夫として「精力を愛養する」ことを重視している。『近思録備考』に次のように述べられている。

愚謂、存養之工夫乃所以愛養精力。(『近思録備考』269～270 頁)

要するに、存養の工夫は精力を愛養することである。「近思録説」の中には工夫としての精力の愛養がさらに力説されている。

存養之工夫亦是可愛養精力。愛養精力亦是存養之事。善養心者、豈止存養義理而已耶。在并養其精力耳。(「近思録説」254 頁)

精力の愛養の具体的な方法として、『近思録備考』と「近思録説」の間に相違が見られる。『近思録備考』には次のように述べられている。

¹⁰⁵ 邢和叔言、吾曹常須愛養精力。精力稍不足則倦、所以臨事皆勉強而無誠意。接賓客語言尚可見。況臨大事乎。(『近思録集』存養篇第 11 条)

愛養之方無他、節飲食慎起居寡嗜慾定心氣如此而已。(『近思録備考』270頁)

要するに「愛養」の方法として、飲食を節にすること・起居を慎むこと・嗜慾を寡く^{すくな}すること・心氣を定めることの四つの方法が主張されている。しかし、「近思録説」では『近思録備考』の四方法と異なる愛養の方法が見られる。

愛養之方其要在不做無用之閑言語閑思慮閑勞口而不損耗於有用之精力耳(「近思録説」254頁)

要するに、ここでは愛養の方法としては無駄な言葉・考え・労働をすることなく、有用な精力を損害・消耗しないのが重要である。

存養の工夫としての精力の愛養は中国・朝鮮・日本の他の儒者にあまり注目されていない。葉采の『近思録集解』ではこの「愛養精力」の注もなく、他の注釈書でもこの語についてはほとんど触れられていない。精力の愛養を重視したのが益軒の『近思録』注の特徴の一例であり、『近思録備考』と「近思録説」の愛養の方法の解釈の相違点からでも見られるように、益軒の晩年に至るまで存養の工夫として精力の愛養が重要な課題であったことがわかる。益軒は精神的自己修養、すなわち存心の工夫だけでなく、精力の愛養、すなわち身体・精神的存養にも着目し、重点を置いたのが儒医としての益軒の関心の現れの一例であると考えられる。この益軒の儒医としての側面も、彼の敬と静坐の注解でも見られる。次に益軒の敬と静坐の注解について検討する。

b. 敬

敬は、心を集中して外に散らさないという道学における重要な心法の一つである。程頤は敬を「主一無適」（一を主として適く無し）と解釈している。敬は『近思録』の存養篇に主に論じられている。益軒も敬を重視しており、存養篇の敬に関する数条を注解している。以下に、存養篇第 31・37・38 条の益軒の注釈を中心に考察し、益軒の敬説について検討してみたい。

まず、存養篇第 31 条本文¹⁰⁶の「総明睿智皆此れ由り出づ」一句の益軒注と敬の関係について検討する。

益軒はこの第 31 条の一句「総明睿智皆此れ由り出づ」に着目し、これを注するにまず朱熹の語を引き¹⁰⁷、その後に自注を加えて次のように述べている。

聖人修己以敬章 朱子曰、聰明睿智由是出者、言能恭敬自然心便開明。又曰、敬則自然聰明。人所以不聰不明止緣身心惰慢便昏塞了。敬則虛靜自然通達。篤信謂、程朱此說可謂至論也。盖人心敬則自然光明。其所以不聰明者、緣不敬而昏塞也。（『近思録説』 254～255 頁）

要するに、朱熹の言うに「総明睿智皆此れ由り出づ」という意は、恭敬することにより自然に心が開明する。また、人は敬めば自然と

¹⁰⁶ 聖人脩己以敬、以安百姓。篤恭而天下平。惟上下一於恭敬、則天地自位、萬物自育、氣無不和。四靈何有不至。此體信達順之道、聰明睿智皆由是出。以此事天饗帝。（『近思録』存養篇第 31 条）

¹⁰⁷ 問體信達順。曰、信只是實理。順只是和氣。體信是致中底意思。達順是致和底意思。熹錄云、體信達順如致中和之謂。此是禮記中語言、能恭敬則能體信達順。聰明睿智由此出者言能恭敬自然心便開明。（『朱子語類』卷 34）

亞夫問、程先生說修己以敬、因及聰明睿知皆由此出不知如何。曰、且看敬則如何不會聰明。敬則自是聰明。人之所以不聰不明、止緣身心惰慢、便昏塞了。敬則虛靜、自然通達。賀孫因問、周子云靜虛則明、明則通、是此意否。曰、意亦相似。（『朱子語類』卷 44）

聡明になる。聡明にならないのはその心身の怠りや私欲に閉塞されているせいである。心身を敬めば、自然と私欲なき虚静の状態に達することができる。益軒はこの朱熹と（存養篇原文の）程氏の敬説を「至論」と絶賛し、さらに「盖し人心敬めば則ち自然に光明なり。其の以て不聡明なる所は敬めずして昏塞することに縁るなり」とよりやさしい自分の語によって朱熹の語を解している。

この条の注により、益軒が修養法としての敬をいかに重視し、また、いかに朱熹や二程の解釈を尊重しているかが窺える。次の存養篇第 37・38 条の益軒の注にもその敬説の重視と特徴が見られる。

まず、存養篇第 37 条¹⁰⁸を注するに益軒は次のように述べている。

愚謂、母不敬、則天理存。以此可事天饗帝。故可以對越上帝。
（『近思録備考』 284 頁）

母不敬章 母不敬、則人欲淨盡、天理流行。可以對越上帝。苟不敬、則人欲閉塞、為與天地之心不相似。豈可以對越上帝乎哉。
（「近思録説」 255～256 頁）

「敬せざる^な母ければ」はもと『礼記』曲礼上篇の語である。『近思録備考』の解釈では、敬することにより私欲が取り除かれ、天理としての人の本来の性に回復することが出来る。それ故に天に^{つか}事えることが出来る。「近思録説」の注は基本的に『近思録備考』の注の意と同様であるが、ここでは、人心と天地の心との相関性が強調されている。敬せざれば、人心が私欲によって塞がれ、天地の心と不一致になるため天に事える（「上帝に対する」）ことが出来なくなる。

存養篇第 38 条¹⁰⁹に対し、益軒は次のように述べている。

¹⁰⁸ 母不敬、可以對越上帝。（『近思録』存養篇第 37 条）

¹⁰⁹ 敬勝百邪。（『近思録』存養篇第 38 条）

愚謂、敬是存天理之工夫敬而天理存則百邪自除。猶元氣復則百病自癒。

(『近思錄備考』284頁)

敬勝百邪。敬則天理内存而外邪自除。猶元氣復則百病自癒。(「近思錄說」256頁)

要するに、敬することにより、人の性としての天理をその心に存し、多くの邪悪が自ら取り除かれる。これはなお元気を体内に充足させることにより多くの病気が自ら癒されるようなことであると益軒はいう。「元氣」とは東洋医学における一つの重要概念である。元氣論は益軒の『養生訓』に貫く思想である。人は天地の元氣を受け、生の源とし、その気の減退を防ぐことにより自然に多くの病気にかからないようになる¹¹⁰。敬を元気で例えることは、また益軒の医者としての側面が現れていると言えよう。

以上のように、益軒がいかに敬を心の工夫として重視していたことがわかる。

『大疑録』においても敬は多く論じられている。益軒は『大疑録』に、朱熹などが説くように敬は心の主宰ではなく、忠信の徳を心に存するための工夫であると熱烈に説いている¹¹¹。また、『大疑録』卷

¹¹⁰ 井上忠『人物叢書 貝原益軒』(吉川弘文館、1963年)269頁を参照。

¹¹¹ 「朱子曰、敬者一心之主宰。万事之本根。蓋修己以敬者、聖人之至教。人心非敬不存。故須敬以執持斯心。此乃操則存之謂也。主宰云者、所以存之工夫也。非言以此可為心之主也爾。讀者勿以辞害志而可也。今世有佞諛于朱子者、曰、雖以敬為心之主。豈有害道乎。吾未知其言之可也。然則以何者可為人心之主乎。孔子曰、主忠信。是人心当以忠信為主。忠信者人之実心。中庸所謂誠之者人道也。苟捨人道而不主之。反以操心工夫為心之主。雖美德善行、非所以可為主也如敬之一字。為修己之工夫。是堯舜以來歷世聖賢之心法也。然而孔会思孟之書、未曰以敬為主。則可知古之聖賢所為心之主者不在此也。…是乃主忠信之工夫。敬則可以至于誠也。然而非謂可以是为心之主也。程伯子曰、誠者天之道。敬者人事之本。敬則誠。蓋敬者。謂人事之本則可也。謂心之主則不可也。孔子曰、天無二日、土無二王。然則人心亦豈可有二主乎。既以忠信為主。文以敬為

下に「朱子晩年説敬字曰、敬只畏字。近思録孫思邈曰、敬以畏為本。窃謂、畏字即是敬字之正解」と益軒は述べているが、しかし孫思邈のこの語が『近思録』に見られない¹¹²。益軒はもちろん『近思録』にこの語が存しないことを知っているはずにもかかわらず、なぜこのように述べたかは不明である。このように、「近思録説」に見られる益軒の敬に関する注と『大疑録』に見られる敬説の主張の相違点が益軒の『近思録』研究の一特徴といえる。

次に、益軒の『近思録』研究における静坐説について検討してみる。

c. 静坐

静坐は敬と同様に道学における重要な修養法の一つである。静坐とは静かに坐り、精神を集中させることである。静坐は『近思録』に、存養篇第 63 条のみで取り上げられている¹¹³。

益軒は『近思録備考』や「近思録説」においてこの条で取り上げられている静坐に着目し、自分の見解を次のように述べている。

愚謂、静坐之説自二程始。朱子曰、孔孟以上却無此説。盖初学之人思慮煩擾、心志由何而定。故二程姑教人静坐而已。（『近思録備考』298 頁）

謝顯道從明道先生於扶溝章 愚謂、静坐之説自二程始。孔孟以

一心之主。是一心而有二主也」（『大疑録』卷下）

¹¹² 孫思邈（581－682 年）は隋唐間の京兆（陝西省）の陰士である。彼の語は『近思録』為学篇第 40 条に見られるが、これは敬と関係ない。『新唐書』卷 196、孫思邈伝「慎以畏為本」の語がある。これは益軒の引用と類似しているが、ただし「敬」ではなく「慎」となっている。

¹¹³ 謝顯道從明道先生於扶溝。明道一日謂之曰爾輩在此相從、只是學顯言語。故其學心口不相應。盍若行之。請問焉。曰、且静坐。伊川每見人静坐、便嘆其善學。（『近思録』存養篇第 63 条）

上却無此說。盖初学之人思慮煩擾心志不定。故二程姑教人静坐。
乃對病之藥而已。非以是為平日專一之工夫。苟要專静坐則與坐
禪入定何以異哉。然則不如持敬之為優也。（「近思錄說」256頁）

要するに益軒にいうと、静坐説は孔子・孟子には見られず、二程が
最初に説いたという¹¹⁴。二程がなぜ静坐を主張したかという、初
学者の思慮が煩わしく乱れ、その心も定まっていなかったため、薬が病
気を治すためのもののように、静坐は単なる心身を落ち着かせるた
め的手段である。それ故に、静坐は常時専一に行うような修養法で
はない。かえって、もっぱら静坐を行えば坐禅入定と結局何も変わ
りがない。静坐にはその危険性があるため、持敬には及ぶまいと益
軒はいう。

ここでは益軒は静坐に対して危険性を感じているにもかかわらず、
初学者の修養法としてその有用性を認めている。ここに述べられて
いる益軒の静坐や敬の意見を「近思錄說」とほぼ同時期に書かれた
『大疑録』に見られる静坐法等に対する批判的言葉と見比べれば驚
かざるを得ない¹¹⁵。このことについてはさらに研究を進める必要が

¹¹⁴ 『近思錄備考』に「朱子曰孔孟以上却無此說」とあるが、これ
に当たる朱熹の語が見当たらない。

¹¹⁵ 『大疑録』に、静坐は儒教本来の修養法ではなく、禅宗に由来
するものであるなど、静坐を厳しく非難する語が多く見られ
る：

- ・宋儒之説、以無極為大極之本。以無為有之本。以理氣分之而
為二物。以陰陽非道。且以陰陽為形而下之器。分別天地之性
与氣質之性以為二。以性与理為無死生。是皆仏老之遺意。与
吾儒先聖之説異矣。学者不可不精詳明弁也。且論守心法、曰
主静曰静坐、曰默坐澄心。体貼天理。以静坐為平生守心之工
夫。是皆偏于静。而不能時動静。即是禅寂習静之術。非儒者
之所宣言也…（『大疑録』卷上）。
- ・孔門設教也、以孝弟忠信為本。以学文力行為学。平易如大路
然。雖愚者易知易行。漸而真積力久、而極其趣。則致高大而
極精微。是下学而上達也。宋儒之学、以大極無極為致知之先
務。以静坐澄心為力行之先務。以支離破碎為文学之先務。是
乃高遠艱深。細末無用之事。以艱知離行無用不急者為先。与
聖門之所立教。以孝弟愛敬文行忠信為先務者異矣。故其所為
教。高深艱險。所以為難学行而不易入也。後世学焉者。厭苦
之而難進者。由此也。（『大疑録』卷上）

ある。

以上のように、益軒の葉采注の批判や精力の愛養・敬・静坐を中心に、益軒の『近思録』研究における存養工夫論について論じてき、それぞれの特徴を明らかにした。

おわりに、

以上の考察により、『近思録備考』と「近思録説」との間における構成の相違点としては以下の3点が挙げられる。

1. 『近思録集解』の全14篇に対し、『近思録備考』は全14篇を注解しているが、「近思録説」は10篇しか注解していない。
2. 「近思録説」はその各10篇の注解に葉采のつけた篇題を冠しているのに対して、『近思録備考』は1から9巻（6巻を除く）までは葉采の篇題を採用するものの、6巻は無題であり、10～12巻は朱熹の「逐篇綱目」の篇題を採用し、13～14巻は無題となっている。
3. 『近思録備考』が『近思録』のほぼ全622条を注釈の対象としているのに対し、「近思録説」は各篇の数条しか注釈していない。道体篇の51条のうち「近思録説」は10条のみを注釈している。また、第1条の後に第21条が2番目に来るという順番の置換が見られる。

次に、『近思録備考』と「近思録説」の道体篇第1条に対する益軒の解説については、以下の3点の異同が明らかになった。

1. 「近思録説」は『近思録備考』の文をほぼそのまま踏襲してい

・以静坐為常時工夫。以主静為立人極之工夫。且以孔子之說性与孟子之說性為有氣質天地之異。此皆愚之所以不能無疑也。
（『大疑録』卷上）

る箇所がある。

2. 「近思録説」は『近思録備考』の文をほぼそのまま利用しながら、新しい解説をその文章の中に追加している箇所がある。
3. 『近思録備考』にない「近思録説」だけの新たな解説も見られる。また、「近思録説」は『近思録備考』の益軒の自説を利用しない場合もある。

この3点から考えると、「近思録説」はまったくの新作ではなく、益軒の早期の著作『近思録備考』における彼の自説を整理しながら、その新しい研究による新説も加えたものである。『近思録備考』は先儒の言を引き、『近思録』の語句を詳細に解説しているが、「近思録説」は重要と思われる篇・条に対して、主に益軒の言による全体的な解説を中心としたものといえよう。

しかし、道体第1条においては『近思録備考』と「近思録説」との間にそれほどの思想的展開は見られない。第一条の書き出しの「無極而太極」の解釈は両書ともほぼ同一である。さらに、「近思録説」とほぼ同時期に著された『大疑録』に見られるような道学の学説に対する批判的意見も「近思録説」の「無極而太極」解説には見られないことも一つの特徴である。

益軒の『近思録』研究に見られる思想的特徴について、以下の3点を明らかにした。

1. 益軒は必要に応じて『近思録集解』の構成や葉采注を批判しているところがある。弁異端篇第3条の「四大」の解釈などを通し、益軒独自の見解が窺える。
2. 益軒は敬や静坐と並びに、精力を愛養することを存養工夫として極めて重んじていたことがわかった。
3. 静坐は存養工夫の方法として重要であると認められているが、執行しすぎると二程の考えた静坐本来の有用性がなくなるため、益軒が静坐よりも敬の工夫を重んじていることがわかった。また、『大疑録』に見られる静坐など、道学の学説に対する批判的態度

など、「近思録説」においては見られないことを判明することが出来た。「近思録説」とほぼ同時期に著されたと考えられる『大疑録』のあいだになぜこのような違いが見られるかについてはさらに研究を要する。

このように、益軒の『近思録』研究を考察した結果、益軒の存養工夫論のいくつかの特徴を明らかにすることが出来た。存養篇だけでなく、『近思録』為学篇などにも益軒独自の解釈が見られる。これらについては、今後の研究課題としたい。

第 5 章

近世前期の『近思録』研究 二 —伊藤仁斎の『読近思録鈔』について—

はじめに

本章では、伊藤仁斎の『読近思録鈔』について考察を試みたい。伊藤仁斎（1627～1705年）、本名は初め源吉維貞であったが、1683年に源佐維楨と改名した。号は仁斎、別号は棠隱。諡号は古学先生。京都上京東堀川に出生した。仁斎が長年学んできた朱子学に疑問を抱き、ついには古義学という学派を創立した。古義学とは、漢唐のいわゆる旧注を頼りに経典（特に『論語』や『孟子』）を直接読んでその真意をつかむことや、仁義の実践躬行を求めることを重視する学派である。仁斎が京都堀川に古義堂という塾を開いたことから堀川学派とも呼ばれた。『論語古義』、『孟子古義』、『語孟字義』、『童子問』はその主著である。

『読近思録鈔』は仁斎晩年の著作であり、未完成の写本である。その写本の異本が4点現存しており（国会図書館：鶺軒文庫、東京都立中央図書館：井上文庫、東北大学：狩野文庫、天理大学：古義堂文庫）、また『日本儒林叢書』第5巻にも所収されている。その自序に「時、元禄辛未之歳。春三月、維楨謹識」とあるように、本書が1691年（仁斎、年65歳）に著されたことがわかる。極めて短い著であり、その写本が6丁に及ぶしかない。仁斎が『近思録』道体篇第1条、周敦頤の『太極図説』の最初の一部を取り上げ、その朱熹注の非なることを弁じて論駁しようとしている。しかし、その論弁が第一条の途中で終わっており、不完全なものとなっている。道体篇第1条の全文は以下の通りであり、仁斎が論じている箇所はその下線が引かれているところである。

濂溪先生曰、無極而太極。太極動而生陽、動極而靜。靜而生陰、靜極復動。一動一靜、互爲其根、分陰分陽、兩儀立焉。陽變陰合、而生水火木金土、五氣順布、四時行焉。五行一陰陽也。陰陽一太極也。太極本無極也。五行之生也、各一其性。無極之眞、二五之精、妙合而凝。乾道成男、坤道成女、二氣交感、化生萬物。萬物生生、而變化無窮焉。惟人也、得其秀而最靈。形既生矣、神發知矣。五性感動而善惡分、萬事出矣。聖人定之以中正仁義、〔聖人之道仁義中正而已矣〕。而主靜。〔無欲故靜〕。立人極焉。故聖人與天地合其德、日月合其明、四時合其序、鬼神合其吉凶。君子脩之吉、小人悖之凶。故曰、立天之道、曰陰與陽、立地之道、曰柔與剛、立人之道、曰仁與義。又曰、原始反終、故知死生之說。大哉易也、斯其至矣。

要するに、「濂溪先生曰く、無極にして太極なり」より「…妙合して凝る」までが仁齋の考察の中心となっている。従来の研究では『読近思録鈔』がほとんど注目されておらず、その先行研究が管見できない。しかし、江戸前期の『近思録』研究の一例としてこの資料が非常に貴重なものとする。さらに、この資料が朱子学を批判する古義学派の立場から執筆されていることから、江戸期の『近思録』注釈書の中で『読近思録鈔』が極めて稀なものである。そこで、本章においては、『読近思録鈔』を調査し、その特色を明らかにすることを目的とする。

一、本章の目的と方法

本章の目的は、仁齋がどのように『近思録』を解釈し、その『読近思録鈔』の特色はどこにあるかを明らかにすることである。まず、仁齋の「無極而太極」解釈について考察する。次に仁齋の理気論と動静の解釈について検討する。次に仁齋の葉采注批判について考察する。そして最後に、仁齋の「眞」と「精」に関する解釈を考察す

る。底本を天理大学古義堂文庫蔵『読近思録鈔』とした。また『日本儒林叢書』巻5¹¹⁶所収『読近思録鈔』を参考にし、原文引用の書き下し文にはほとんどこれの訓点に従った。また、便宜上、『読近思録鈔』原文を引用する際、そのすぐ後に（）括弧内に『日本儒林叢書』の相当するページ番号を示した。原文引用における句読点や下線はすべて筆者によるものである。

二、伊藤仁斎と「無極而太極」の解釈

まず、仁斎の「無極にして太極なり」の解釈について検討してみたい。仁斎はまず道体篇冒頭部分の周敦頤の『太極図説』書き出しの「無極而太極」の語とこれに対する朱熹の解釈を取り上げ、次のように述べている。

濂溪先生曰、無極而太極。晦庵先生解之曰、上天之載、無聲無臭。而造化之樞紐、品彙之根柢。非太極之外復有無極也¹¹⁷。維楨按、晦庵之解、既非濂溪之本旨。而濂溪之本旨。又非聖經之意。故今亦論晦庵之解戾於濂溪。而後備明濂溪之說非聖經之旨。(1~2頁)

要するに、「無極にして太極なり」という周敦頤の語に対し、朱熹が「上天の載、声も無く臭いも無し。而して造化の樞紐、品彙の根柢

¹¹⁶ 関儀一郎編『日本儒林叢書』第5巻（東洋図書刊行会、1927年）

¹¹⁷ 「無極而太極」は周敦頤『太極図説』の冒頭語であり、『近思録』道体篇第一条である。「上天之載、無聲無臭…」はもと朱熹『太極解』の語であり、葉采の『近思録集解』には「無極而太極」の解として引かれている。仁斎の引用文と『近思録集解』の文には少しの異同がある。『近思録集解』の文は「朱子曰、上天之載、無聲無臭。而實造化之樞紐、品彙之根柢也。故曰、無極而太極非太極之外復有無極也」となっている。「上天之載、無聲無臭」はもと『詩経』大雅篇、文王の語：「命之不易、無遏爾躬。宣昭義問、有虞殷自天。上天之載、無聲無臭。儀刑文王、萬邦作孚」。「載」は「事」である。

なり。太極の外、復た無極有るに非ざるなり」この朱熹の解釈に対し、仁斎は非常に批判的である。要するに、「晦庵の解、既に濂溪の本旨に非ずして、濂溪の本旨もまた聖經の意に非ず。故に今また晦庵の解、濂溪に戻るを論ずる…」と述べられているように、「無極而太極」の解釈として朱熹が無極と太極を同一無二として捉えていることは周敦頤の本来主張したかった「本旨」と異なっており、さらに周敦頤の本旨はもともと『周易』など儒教の經典の本来の意とも異なっていると、仁斎は主張している。この文章により、仁斎の『読近思録鈔』の議論の主題が明確に示されている。それはすなわち以下の二点にある。

1. 朱熹がその解釈により、周敦頤の本旨を自分の思想大系に合うように歪曲している。そのため、朱熹の解釈は『太極図説』の本意の解釈としては成立しない。
2. 周敦頤の学説は、經典の本意に異なる。

仁斎は、この2点の基本立場を証明するのに、『太極図説』の一句一句に沿って朱熹の解がいかに関周敦頤の本旨と異なっているかを論じていく。仁斎は朱熹の解釈が周敦頤の学説の本旨と異なっていると考えているならば、仁斎にとって周敦頤の本旨は何であろうか。「無極而太極」について仁斎は次のように述べている。

蓋周子之意以爲、有斯理而後有斯氣。故曰、無極而太極。無極者、謂無物之前自有理。太極即指一元氣而言。其意甚分明。而朱子遷就周子之本意。一以己之意釋之。故不免於本文所所窒碍。而後人亦不覺其非。噫、其讀周子之書者、當從周子之意以解之、不可以己之說雜焉。若以己之說雜之、則既不是周子之本意。況以己之說改變之、則大不可也。(2頁)

要するに、周敦頤の言っている「無極而太極」の本旨とは、現象と

しての「物」が存在する以前に、原理としての「理」があったと仁齋は解釈している。すなわち、無極は理に当たり、太極は物事の全体を含む「一元氣」に当たる。この周敦頤の「無極而太極」の本旨を、朱熹が自分の思想大系に合うように無理に解釈していると仁齋は厳しく非難し、「朱子、周子の本意を遷就し、^{ひとえ}一に己の意を以て之を釈す…噫、其れ周子の書を読む者、当に周子の意に従りて以て之を解すべし。己の説を以て雑えべからず。若し己の説を以て之を雑うれば、則ち既に是れ周子之本意にあらず。況んや己の説を以て之を改変すれば、則ち大いに不可なり」という。

周敦頤の学説自体は漢代や唐代の儒者のいわゆる旧注と何一つも変わりがないと仁齋は指摘している。性を理とすることや、仁義礼智を性とすることなどの道学の独特な各学説はすべて北宋の程頤（1033～1107年）に始まると仁齋は考えている。

周子之學、蓋本漢唐舊註。未嘗有所變易。其改漢唐舊説、以性爲理、仁義礼智為性者、皆自伊川始。（2頁）

周敦頤は太極を一元氣と解釈していることは「漢唐旧注」の解釈と同様であると仁齋は主張している。これを証明するのに、仁齋は『漢書』や『周易正義』の語を挙げ、周敦頤の太極を一元氣とする解釈は旧来の注釈に基づいていることを主張し、次のように述べている。

故周子太極之旨、從漢唐旧註解之為是。班固¹¹⁸藝文志曰、太極

¹¹⁸ 班固（32年～92年）後漢初期の歴史家、文学者。字は孟堅。『漢書』の編纂者として有名。

元氣、函三爲一¹¹⁹。易疏¹²⁰曰、太極謂天地未分之前。元氣混而爲一¹²¹。故周子以元氣爲太極、而以無物之前自有理爲無極。故曰、太極本無極也。又曰、無極之眞。其理甚分明。下文節節相応。(2頁)

要するに、周敦頤が『漢書』や『周易正義』の語に基づき、「無極」を物無き以前に理があったというように解釈し、「太極」を天地が混合した状態の元氣と理解している。周敦頤がこのように無極と太極を解釈しているため、下文に「太極本無極也」や「無極之眞」のような表現を用いていると仁斎は考えている。周敦頤の本旨がこのように明白であるにもかかわらず、朱熹が太極を万理の尊号とし、また太極と無極を分別せずに同一なるものとすることや、無極は究極無きことなど、全部誤った解釈をしていると仁斎は語っている。

朱子以太極爲万理之尊號、而解無極二字、爲無窮極¹²²、而謂非

119 この語は『漢書』芸文志ではなく、律曆志の語である。「天之中數五、地之中數六、而二者爲合。六爲虛、五爲聲、周流於六虛。虛者、爻律夫陰陽、登降運行、列爲十二、而律呂和矣。太極元氣、函三爲一。極、中也。元、始也。行於十二辰、始動於子。參之於丑、得三。又參之於寅、得九。又參之於卯、得二十七。又參之於辰、得八十一。又參之於巳、得二百四十三。又參之於午、得七百二十九。又參之於未、得二千一百八十七。又參之於申、得六千五百六十一。又參之於酉、得萬九千六百八十三。又參之於戌、得五萬九千四十九。又參之於亥、得十七萬七千一百四十七。此陰陽合德、氣鐘於子、化生萬物者也。故孳萌於子、紐牙於丑、引達於寅、冒莠於卯、振美於辰、已盛於巳、罅布於午、昧菱於未、申堅於申、留孰於酉、畢入於戌、該闕於亥。出甲於甲、奮軋於乙、明炳於丙、大盛於丁、豐楙於戊、理紀於己、斂更於庚、悉新於辛、懷任於壬、陳揆於癸。故陰陽之施化、萬物之終始、既類旅於律呂、又經歷於日辰、而變化之情可見矣」(『漢書』律曆志上)。

120 『十三經注疏』の一つ、『周易正義』の疏文のことである。

121 「是故易有太極、是生兩儀。夫有必始於無、故太極生兩儀也。太極者、無稱之稱、不可得而名、取有之所極、況之太極者也。

【疏】正義曰、太極謂天地未分之前、元氣混而爲一、即是太初、太一也。故老子云、道生一。即此太極是也。又謂混元既分、即有天地、故曰、太極生兩儀、即老子云、一生二也。不言天地而言兩儀者、指其物體、下與四象相對、故曰兩儀、謂兩體容儀也」(『周易正義』繫辭上、卷7、11)。

122 無極に対して「無窮極」と解する朱熹の語が見られないが、陳

太極之外復有無極¹²³。皆非周子之本意。(2頁)

仁齋は、朱熹がなぜこのように、漢唐の旧注に従わずに、周敦頤の学説を誤って解釈していると考えたか。彼は次のよう述べている。

圖解雖若有所發越、奈其非周子之本意何。或問、朱子何故不從漢唐旧註。又不深窮周子之原旨。妄以己之意釋之邪。曰、大傳以一陰一陽往來不已爲道¹²⁴、而未嘗就斯上面論理。蓋陰陽二氣充滿天地、相推相盪、萬古不已。不知誰使、然即所謂道也。倘於一陰一陽往來不已之前求理焉、則老莊虛無之說。非聖人之旨也。朱子之学、本自禪莊來。故以理爲本、而以氣爲粗、爲善惡雜。而不知天地間。唯此一元氣。(2頁)

要するに、朱子学の学説は禪や老莊思想に由来するものであると仁齋は考えている。『周易』繫辭上傳において「一陰一陽、往來して已まざる」こと、すなわち陰陽の絶えざる運動する事態が道であるとされている。しかし、その運動の裏に、そうせしめている原理のあることを称えるような学説はもともと老莊の虚無の説であると仁齋が指摘する。

以上のように、仁齋の「無極而太極」をめぐる考察について見てきた。要するに、周敦頤が無極を理とし、太極を一元気としている。

淳の『性理字義』に無極が次のように説明されている。「無極是無窮極。只是說理之無形狀方體。正猶言無聲無臭之類。太之爲言甚也」(『性理字義』卷下、太極圖)。

¹²³ 「無極而太極、只是無形而有理。周子恐人於太極之外更尋太極、故以無極言之。既謂之無極、則不可以有底道理強搜尋也。問太極始於陽動乎。曰、陰靜是太極之本、然陰靜又自陽動而生。一靜一動、便是一箇關闔。自其關闔之大者推而上之、更無窮極、不可以本始言。」(『朱子語類』卷94)。

¹²⁴ 「一陰一陽之謂道、繼之者善也、成之者性也。仁者見之謂之仁、知者見之謂之知。百姓日用而不知、故君子之道鮮矣。顯諸仁、藏諸用、鼓萬物而不與聖人同慢、盛德大業至矣哉。富有之謂大業、日新之謂盛德。生生之謂易、成象之謂乾、效法之為坤、極數知來之謂占、通變之謂事、陰陽不測之謂神」(『周易』繫辭上)

したがって朱熹の無極・太極をともに理と見なしている説は周敦頤の本旨に反する。これが仁斎の朱熹注の批判の中心である。このような批判が、『読近思録鈔』を通じてみられる。

太極は理でなければ、また太極の以前に理である無極があったことを認めないのであれば、仁斎は理についてどのように考えているか。次に、『読近思録鈔』における仁斎の理説と朱熹注批判の関係について検討してみたい。

三、伊藤仁斎の理観と「無極而太極」

仁斎は理について次のように述べている。

所謂理者、反是就氣中、指其有條理者而言。故以為太極。爲氣則以為大傳為謂氣而遺理。知有形而下之器。而不知形而上之理¹²⁵。故強以太極為理之尊号、而為無極太極、共一意而無別、可謂誣矣。陳北溪¹²⁶曰、周子謂無極而太極。而字只輕接過。不可就此句中間、截作兩截看¹²⁷。可謂皆牽合之甚也。(3頁)

¹²⁵ 「易曰、自天祐之、吉无不利。子曰、祐者、助也。天之所助者、順也、人之所助者、信也。履信思乎順、又以尚賢也。是以自天祐之、吉无不利也。

子曰、書不盡言、言不盡意。然則聖人之意、其不可見乎。子曰、聖人立象以盡意、設卦以盡情偽、繫辭以盡其言、變而通之以盡利、鼓之舞之以盡神。

乾坤其易之緼邪。乾坤成列、而易立乎其中矣。乾坤毀、則无以見易、易不可見、則乾坤或幾乎息矣。是故、形而上者謂之道、形而下者謂之器。化而裁之謂之變、推而行之謂之通、舉而錯之天下之民、謂之事業。是故、夫象、聖人有以見天下之賾、而擬諸其形容、象其物宜、是故謂之象。聖人有以見天下之動、而觀其會通、以行其典禮、繫辭焉、以斷其吉凶、是故謂之爻。極天下之賾者、存乎卦、鼓天下之動者、存乎辭、化而裁之、存乎變、推而行之、存乎通、神而明之、存乎其人、默而成之、不言而信、存乎德行」(『周易』繫辭上傳)。

¹²⁶ 陳淳(1153～1217年)南宋の儒者。字は安卿、号は北溪。朱子の門人。『性理字義』の著者として有名。

¹²⁷ 陳淳『性理字義』の語。「太極字義不明。直至濂溪作太極圖方始説得明白。所謂無極而太極、而字只輕接過。不可就此句中間、截作兩截看」(『性理字義』卷下、太極)。

要するに、仁齋によれば理は気の中にある物事の条理（道理）である¹²⁸。それゆえに、『易経』繫辞上傳の中に太極を気とし（「形而下の器」）、その上に原理としての理（「形而上の理」）を説かない（『易経』には形而上なるものを「道」という）。それゆえ、太極を理の尊号とすることや、無極・太極を区別せずに、同一視する朱熹のような解釈は経典の本意を曲げてこじつけたと言わざるを得ないと仁齋は朱熹の学説を厳しく難じている。また、陳淳が『北溪字義』に語っているように、「無極而太極」の「而」字を無極と太極をつなぐ単なる接続詞であると見るべきという解釈も、こじつけの甚だしいものと仁齋は難じている。

しかし、漢唐の諸儒が太極を一元氣とし、形而下のものとして理解していたかもしれないが、その形而上なるものが理であることを知らなかったのではないか。宋儒がはじめて理を中心に論じ、理が気をそうせしめるものであるなどと明らかにしたことなどのことから、宋儒のほうが漢唐諸儒より優れているのではないかという仮の質問に対し、仁齋は次のように答えている。

或又問、漢唐諸儒以太極爲一元氣。是知形而下之器、而不知形而上之理。至宋儒發明殆盡。而以理爲本、而氣云、理之使然者、固漢唐諸儒之所不及。於所謂太極生兩儀合。曰、不然。彖曰、大哉乾元、萬物資始。乃統天¹²⁹。至哉坤元、萬物資生。乃順承天¹³⁰。蓋乾元陽氣之始、坤元陰氣之始、所謂一元氣是也。其於

¹²⁸ この理を条理とする説は仁齋学の特徴の一つ。「理字與道字相近。道以往來言。理以条理言…」(『語孟字義』卷上、理)

¹²⁹ 『周易』乾卦、彖伝の語。「大哉乾元、萬物資始。乃統天。雲行雨施、品物流形。大明始終、六位時成、時乘六龍以御天。乾道變化、各正性命、保合大和、乃利貞。首出庶物、萬國咸寧。」(『周易』乾卦、彖伝)。

¹³⁰ 『周易』坤卦、彖伝の語。「至哉坤元、萬物資生、乃順承天。坤厚載物、德合无疆。含弘光大、品物咸亨。牝馬地類、行地无疆、柔順利貞。君子攸行、先迷失道、後順得常。西南得朋、乃與類行、東北喪朋、乃終有慶。安貞之吉、應地无疆」(『周易』坤卦、彖

乾則稱萬物資始。又稱統天。於坤則稱萬物資生。又稱順承天。
則豈容於一元氣上面添一物乎。又說卦云、立天之道。曰陰與陽。
又可見外陰陽無所謂天道者也。由是觀之、則漢唐諸儒以太極為
一元氣者、乃易之本旨。而以太極為理者、乃其臆見。非易之本
義。又非周子之意也。(3頁)

要するに、仁齋が『易経』の語を取り上げ、漢唐諸儒の太極を気とする説の方が正しいと主張している。例えば、仁齋が乾（天）の卦辞を説明する「彖伝」の語「大いなるかな乾元、万物資りて始む。乃ち天を統ぶ」や坤（地）の卦辞を説明する彖伝の語「至れるかな根元、万物資りて生ず。乃ち天に順承す」を取り上げ、天下万物の生成過程がこの「乾元陽気」や「坤元陰気」、すなわち一元気の概念のみで説明し尽せるので、さらに一元気を超越する「理」の概念を採用する必要はないという。この『易経』の語から見れば、漢唐諸儒の太極を一元気とする解釈の方が正しく、太極を理とする見解は間違いで、『易経』の本義や周敦頤の本旨とも違うというのが仁齋の主張である。

以上のことから、仁齋が理を気の条理と理解していることがわかった。また、宋儒のように太極を理とする解釈は間違いで、『易経』の本義とは大いに違うというのが仁齋の主張であることがわかった。ここで仁齋の「無極而太極」に対する解釈が終わり、次に「太極動而生陽。動極而静。静而生陰。静極而動。一動一静互為其根、分陰分陽、兩儀立焉」の語に関し、特に動静と理気をめぐる問題が論じられている。

次に、仁齋の動静と理気論を中心に検討してみたい。

四、太極と動静の関係

伝)。

仁齋は理氣と動静の関係について次のように述べている。

太極動而生陽。動極而静。静而生陰。静極而動。一動一静互爲其根、分陰分陽、兩儀立焉¹³¹。朱解曰、太極之有動静、是天命之流行也。所謂一陰一陽之謂道。誠者聖人之本、物之終始、而命之道也¹³²。

氣有動静、而理無動静。其所以氣有動静者、即理也。然不可以動静即爲理。其曰動而生陽、動極而静、静而生陰、静極復動。又曰、一動一静互爲其根、分陰分陽、兩儀立焉。則可見太極者即指一元氣而言。其生字是分生之生。非生出之生。故曰分陰分陽。朱子謬爲生出之意。故以太極爲理、而口生於太極、而不知理無動静也。或曰、朱子曰、理有動静。故氣有動静。若理無動静、則氣何自而有動静乎¹³³。曰、此言甚非也。謂有動静者理也、則可。謂理有動静則不可。若曰理有動静、則理與氣何分。其不可也必矣。可謂強辨也。(3～4頁)

要するに、気には動静が存するが、理には動静がないという。気に動静する運動のあるゆえんは、すなわちその理があるためである。仁齋によれば「太極動いて陽を生ず。動極まって静なり。静にして陰を生ず。静極まって復た動なり。一たびは動一たびは静、互いにその根と為り、陰に分かれ陽に分かれて、兩儀立つ」という太極の運動は、すなわち一元氣を指して語っている。また、「陽を生ず」や「陰を生ず」という「生」字は、朱熹が「生出」(生み出る・生み

¹³¹ 『太極図説』の「無極而太極」のすぐ後に来る語。

¹³² 「太極之有動静…」は朱熹の「太極動而生陽。動極而静…」に対する注解。葉采の『近思録集解』道体篇にはこの朱熹の語が「太極動而生陽。動極而静。静而生陰。静極而動。一動一静互爲其根、分陰分陽、兩儀立焉」のすぐ後に来る。

¹³³ 「理有動静…則氣何自而有動静乎」は『性理大全』にある語。

「問、太極理也。理如何動静。有形則有動静。太極無形恐不可以動静言。曰、理有動静。故氣有動静。若理無動静、則氣何自而有動静乎」(『性理大全』卷1)

出すこと)と解釈しているのは誤りで、「生出」ではなく「生」はここに「分生」(分かれて生ずること)を意味していると仁斎は主張している。すなわち下の句が「陰に分かれ、陽に分かれ」と言っているように、一元気の太極から二気の陰と陽も太極から「分かれて生ずる」と解釈すべきと仁斎は考えている。

しかし、朱熹が太極を理として捉えているのであれば、「理に動静有り。故に氣に動静有り。若し理に動静無ければ、則ち氣何ぞ自らして動静有るか」というように、理自体に動静の運動があると認めざるを得なくなる。この解釈が非常によくない上に、周敦頤の本意にも反していると仁斎はここにも主張している。動静するものにはその条理があると言うことはできるが、理自体において動静が存するとはいえまい。

このように、仁斎がこの太極と動静の考察を通して、朱熹の解釈は周敦頤の本旨と異なり、誤っていると強調していることがわかった。次に検討する仁斎の「太極本無極也」解釈においても同様の論法が展開されている。

五、「太極本無極也」の解釈

周敦頤が無極を理とし、太極を氣として捉えたことが、その「太極は本と無極なり」と語っていることからもっとも明白であると仁斎は次のように述べている。

太極本無極也。

周子以太極爲一元氣。以無極爲理、至此益明矣。詳其語勢、自五行而陰陽、而太極而至無極而止。太極之於無極。猶五行之於陰陽、陰陽之於太極、皆推本言之。而發明有理。而後有氣之義。故不曰太極即無極、而曰太極本無極。多少分曉、觀本字可見。(4頁)

要するに、「太極は本と無極なり」を太極(元氣)はもともと無極(理)

にして、それに由来しているという解釈は周敦頤の本旨と考えられるのが、その「本」字が用いられていることからわかると仁斎は考えている。上の句で、周敦頤が五行はもともと陰陽、陰陽はもともと太極¹³⁴と言っているように、「太極は本と無極なり」の本意は無極の理から太極の一元気が生じたと捉えるのがもっとも自然であると仁斎は考えている。周敦頤が朱熹と同様に無極と太極を同一視するのであれば、彼が「太極は本と無極」ではなく、「太極は即ち無極」と言うはずである。ここもまた、朱熹の解釈は周敦頤の本旨を違えていると仁斎が主張している。

次に、仁斎が「五行之生也、各一其性」について考察するが、今までと違い、葉采注がその批判の対象となっている。次に、仁斎の「五行之生也、各一其性」の解釈とその葉采注の批判について検討する。

六、伊藤仁斎の葉采注批判

仁斎が葉采の『近思録集解』を底本としたのが、その『読近思録鈔』に葉采注が批判されていることからわかる。仁斎によれば「五行の生ずるや、各其の性を一にす」の二句の意が前後の文と上手く合わないように見える。そのため、葉采がこの二句を上下の文から切り離して単独にし、その注を加えていると仁斎は次のように述べている。

五行之生也。各一其性。

此二句與上下分不相蒙。義亦不相接。故葉平巖斷之。別爲一段。

(4頁)

しかし、仁斎が考えるに、上文の「五行一陰陽也。陰陽一太極也。太極本無極也」に対する朱熹の注¹³⁵から考えれば、「五行之生也、各一其性」の二句は、朱熹がもともと考案した『近思録』の原本には上文の「…太極本無極也」のすぐ下に來たはずである。葉采はこのことを察しないまま、「五行之生也、各一其性」を単独にし、その注として張栻（1133～1180年）の語で補っているとは極めて可笑しいことだと仁斎は考え、次のように述べている。

按、朱子舊本以此二句、連続上文。摠註之曰、五行具則造化發育之具無不備矣。故亦即此而推本之、以明其渾然一體、莫非無極之妙、而無極之妙、亦未嘗不各具於一物之中。平巖不察。特引張南軒¹³⁶之註而補之¹³⁷。可笑之甚。（4頁）

「五行之生也、各一其性」の二句に関してもう一つの考えとしては、その上下文の文脈と合わないのが『近思録』原本の錯簡、すなわち文字・文章の乱れによるものと考えられることである。「五行之生也、各一其性」が上文の「陽變、陰合而生水火木金土」のすぐ後に來たならば、その意味が通り、自然になるのではないかと考えられる。しかし仁斎が、宋代には錯簡があったとは恐らく考え難いと考えている。

或曰、此錯簡。当在上文生水火木金土之下。如此則五行無極。皆各

¹³⁵ 「朱子曰、五行具、則造化發育之具無不備矣。故又即此而推本之、以明其渾然一體、莫非無極之妙、而無極之妙、亦未嘗不各具於一物之中也。蓋五行異質、四時異氣、而皆不能外乎陰陽、五殊二實無餘欠也。陰陽異位、動靜異時、而皆不能離乎太極、精粗本末無彼此也。至於所以爲太極者、又無聲臭之可言也」（『近思録集解』道体篇）

¹³⁶ 張栻（1133～1180年）。南宋の儒者。字は敬夫または欽夫、号は南軒。『紫巖易伝』、『南軒文集』などの著がある。

¹³⁷ 「張南軒曰、五行生、質雖有不同、然太極之理未嘗不存也。五行各一其性、則爲仁義禮智信之理、而五行各專其一」（『近思録集解』道体篇第1条）

以類相從。文詞順妥。意亦相承。然近世之文章。恐不可有錯簡。姑
竢。(4頁)

このように、仁齋の『近思録』テキスト批判について検討してみた。

次に、『読近思録鈔』が最後に取り上げられている「無極之真。二
五之精。妙合而凝」に対する仁齋の考察について検討する。

七、「無極之真」と「二五之精」

仁齋は次に、「無極之真。二五之精。」の「真」と「精」に着目し、
次のように述べている。

無極之真。二五之精。妙合而凝

老子孔德之容章云、其中有精、其精甚真¹³⁸。林希逸¹³⁹注曰、發明無
物之中、眞實有物¹⁴⁰。圖說精真二字。蓋本於此。無極之眞。即所謂
無物之中眞實有理。所謂未有天地之先。畢竟是先有此理。二五之精。
統陰陽五行之氣而言之。即太極也。所謂五行一陰陽。陰陽一太極。

¹³⁸ 「孔德之容、唯道是從。道之為物、唯恍唯惚。忽兮恍兮、其中
有象、恍兮忽兮、其中有物。窈兮冥兮、其中有精、其精甚真、其中
有信。自古及今、其名不去、以閱衆甫。吾何以知衆甫之狀哉。以
此。」(『老子』上篇第21章)

¹³⁹ 林希逸(1193~1271年)南宋の儒者。字は肅翁、号は虜齋、
または竹溪。福清(今の福建省)の人。老莊思想、易学、玄学に通
じ、『莊子虜齋口義』、『老子虜齋口義』、『列子虜齋口義』等の著が
ある。

¹⁴⁰ 「孔、盛也。知道之士、唯道是從、而其見於外也、自有盛德之
容。德之為言得也、得之於己曰德、道不可見而德可見、故以德為道
之容。孟子曰、動容周旋中禮、盛德之至。與此句差異。但讀莊老
者、當以莊老字義觀之、若欲合之孔孟、則字多窒礙矣。唯恍唯惚、
言道之不可見也。雖不可見而又非無物、故曰其中有象、其中有物、
其中有精。此即真空而後實有也。其精甚真、其中有信、此兩句發明
無物之中、眞實有物、不可以為虛言也。信、實也。道之名在於古
今、一日不可去、而萬善皆由此出。衆甫、衆美也。閱、歷閱也。萬
善往來、皆出此道也。以此者、以道也。言衆甫之所自出、吾何以知
其然、蓋以此道而已。此等結語、亦其文字之精處」(『道德真經口
義』卷2、孔德之容章第二十一)

是也。觀周子不曰太極之眞。而曰無極之眞。則知太極則一元記。而無極者即其所以然之理也。以無極太極爲一而無別者。非周子之本旨。

(4～5 頁)

要するに、仁齋はここに『老子』上篇第 21 章の語「其の中に精有り。其の精甚だ真」¹⁴¹を挙げ、周敦頤の「無極の真、二五の精」の「真」と「精」と言っているのがこの『老子』の文に基づいているという。『老子』第 21 章にあるこの「真」に対する注解はさまざまであるが、仁齋は周敦頤の「無極の真」を解釈するのに南宋の林希逸(1193～1271 年)の注「無物の中、眞実として物有るを發明する」からヒントを得ている。要するに、仁齋によると「無極の真」とは「無物の中、眞実として理有る」という意である。天地がまだ存在する以前にその理が先にあったとのことである。「二五の精」とは陰陽五行の氣、つまり太極である。周敦頤が「太極の真」ではなく、「無極の真」と言っているのが、彼がすなわち太極を一元氣と見なし、無極は氣をせしめる理と考えたためである。無極と太極を分けずに、両方とも理として同一視する朱熹のような解釈は周敦頤の本旨ではないと、ここにも仁齋は続けて朱熹の解釈を難じている。

次に、仁齋は次の句「妙合して凝る」について論じ始めるが、途中から途切れてそのまま終わっている。

羅整庵¹⁴²、深譏妙合二字有害於理。甚是。見于困知記¹⁴³。(5 頁)

¹⁴¹ 『老子』上篇第 21 章は「道」を説く章で、「其の中に精有り」とは道の中に精があるということである。「精」は精氣のこと。

¹⁴² 羅欽順(1466～1547 年)、明の儒者。字は允升、号は整庵。理氣論の特色があり、氣の運動の条理としての理の主張が仁齋の理氣論に影響を与えている。主著の『困知記』や『整庵存稿』がある。

¹⁴³ 「周子太極圖説篇首無極二字、如朱子之所解釋、可無疑矣。至於無極之眞、二五之精、妙合而凝三語、愚則不能無疑。凡物必兩而後可以言合、太極與陰陽果二物乎。其為物也果二、則方其未合之先各安在邪。朱子終身認理氣為二物、其源蓋出於此。愚也積數十年潛玩之功、至今未敢以爲然也。嘗考朱子之言有云氣強理弱、理管攝他不得。若然、則所謂太極者、又安能為造化之樞紐、品物之根柢邪。」

仁齋はここに羅欽順（1466～1547年）の『困知記』にある、理気と妙合に関する見解を絶賛しているが、それ以上述べていない。この羅欽順の見解を軸に、自説を展開していく予定であったと考えられるが、なぜか突然このまま『読近思録鈔』が終わってしまっている。

おわりに

以上のように、伊藤仁齋の『読近思録鈔』について考察を行ってきた。仁齋の「無極而太極」解釈、仁齋の理気論と動静の解釈、仁齋の「太極本無極」の解釈、仁齋の葉采注批判、仁齋の「真」と「精」の解釈を中心に検討してきた。この考察により、仁齋の『読近思録鈔』の議論の特徴として以下の3点が挙げられる。

1. 朱熹の『太極図説』の各解釈は、周敦頤の本旨と異なる。無極を太極と区別せず、両方とも「理」と見なす説などは周敦頤の本旨ではない。
2. 周敦頤の太極を一元氣と見なす説は、漢唐の旧注と同様であるが、無極を太極の上に設定し、それを理とする学説は經典の本意と異なる。
3. 仁齋が葉采注を非難していることから、葉采の『近思録集解』を底本とした。また、貝原益軒の『近思録備考』など、他の『近思録』注釈書の影響が窺えない。

仁齋の周敦頤に対する批判は、その無極を理と見なしている説に止まるが、『読近思録鈔』が未完成なものであるため、仁齋が「後備つづきに濂溪の説、聖經の旨に非ざることを明らかにす」と語っているよう

惜乎、當時未有以此説叩之者。姑記於此、以俟後世之朱子云」（『困知記』卷下、第19条）。

に、周敦頤の学説と経典との相違点についてさらに論じる予定であったと考えられる。仁斎の批判の標的がほぼ朱熹の解釈が中心となっている。朱熹の「無極而太極」解釈に関わる論争が古くから行われており¹⁴⁴、『読近思録鈔』が仁斎の古義学という立場から論じたものである。1のような主張は恐らく当たっていると思われる。無極を太極と直結し、両方とも理と見なすことが、周敦頤の原旨からすれば恐らくは強弁というべきであろう。ただし、仁斎の朱熹説に対する反論は必ずしもすべて納得のいくものとは言えない。例えば、仁斎が朱熹の理に動静ある説を論じる際、仁斎が『性理大全』にある朱熹の語「理に動静有り。故に氣に動静有り。若し理に動静無ければ、則ち氣何ぞ自らして動静有るか」のみを挙げて論駁しようとしている。しかし、朱熹の動静と太極に関する考え方はそう単純なものではない。例えば、仁斎が朱熹の動静論に対して「其れ氣に動静有る所以とは、即ち理なり…」と語っているように、朱熹に同様な考え方があり、単純に太極（理）＝動静としなかった¹⁴⁵。

『読近思録鈔』が未完成な写本であるにもかかわらず、仁斎が太極など、道学の基本学説をどのように理解し、どのように超えようとしたかを窺えることから、極めて重要な資料といえよう。さらに、仁斎の息子伊藤東涯（1670～1736年）など、後世の古義学派の『近思録』研究において『読近思録鈔』の影響が見られるかは重要な課題である¹⁴⁶。これについては今後の課題にしたい。

¹⁴⁴ 朱熹と陸九淵（1139～1192年）の間に起きた『太極図説』をめぐる論争「鵝湖の会」が有名である。

¹⁴⁵ かえって、朱熹が太極の動静させる理としての側面を強調している。「盖天地之間、只有動静兩端、循環不已…其動其静則必有所以動静之理焉。是則所謂太極者也…盖謂太極含動静則可。〈以本體而言也〉謂太極有動静則可。〈以流行而言也〉若謂太極便是動静、則是形而上下者不可分。而易有太極之言亦贅矣」（『晦菴先生朱文公文集』卷45、答楊子直方1）。

¹⁴⁶ 伊藤東涯には『大極図説十論』、『大極図説管見』（いずれも写本、『日本儒林叢書』第5巻にも所収）、『通書管見』（宝暦10〈1690〉年の板本あり、『日本儒林叢書』第5巻にも所収）がある。東涯の門人、穂積以貫（1692～1769年）にも『近思録国字解』24巻24冊（無窮会、神習文庫）の写本があるが未見である。

結論

以上のように、5章にわたり、近世期日本における『近思録』の受容と注釈史について考察してきた。各章の考察した結果、以下のことを明らかにした。

第1章では、近世日本の現存する『近思録』関連資料が105点あることがわかった。書目や伝記資料、人物辞典などには、これ以外にも多くの『近思録』関連著述を載せているが、現存が確認できないものについては載せなかった。さらに、先行研究で未紹介の資料も24点あることが確認できた。

第二章では、近世日本の『近思録』注釈書における朝鮮儒者の影響について、次の2点がわかった。

1. 朝鮮儒者の『近思録』関係資料が恐らく近世期日本に伝来していない。少なくとも、その影響が現時点では見られない。
2. 日本の儒者の『近思録』注釈書において、朝鮮儒者の語が多く引用されているが、ほとんどが李退溪の著作からである。

第3章では、『近思録』を四書の後に読むという読書順が主流であったことがわかった。本章では日本の諸儒者の著作を調査し、その『近思録』の読む順序についての見解を考察してきた。この考察により、藩校の場合とどのように、『近思録』が四書を読む前の入門書としてあまり用いられなかったことがわかった。しかし、近思録が初学者の入門書として重視されなかったとあって、『近思録』を完全に無視したとは決していえない。その現存している大量の『近思録』注釈書や講義録からわかるように、近世全期に渡り、近思録が非常につぶさに研究され、尊ばれていたのである。本章で取り上げた三宅尚斎も、『近思録筆記』など、極めて詳細な『近思録』注釈書を残している。それにもかかわらず、日本儒が『近思録』を初学課程の

入門書としなかったのは、やはりその内容の難解さなど、それぞれの理由によるものであった。中国や朝鮮の経書読書順序における『近思録』の位置についても検討してきた。本章の考察により、日本や中国と同様に、四書五経の経書以外に、朱熹の称えた読書順序が自由に変えられ、工夫されたことがわかった。

第3章では、貝原益軒の『近思録』研究について考察し、この考察により、『近思録備考』と「近思録説」との間における構成の相違点としては以下の3点が挙げられる。

1. 『近思録集解』の全14篇に対し、『近思録備考』は全14篇を注解しているが、「近思録説」は10篇しか注解していない。
2. 「近思録説」はその各10篇の注解に葉采のつけた篇題を冠しているのに対して、『近思録備考』は1から9巻（6巻を除く）までは葉采の篇題を採用するものの、6巻は無題であり、10～12巻は朱熹の「逐篇綱目」の篇題を採用し、13～14巻は無題となっている。
3. 『近思録備考』が『近思録』のほぼ全622条を注釈の対象としているのに対し、「近思録説」は各篇の数条しか注釈していない。道体篇の51条のうち「近思録説」は10条のみを注釈している。また、第1条の後に第21条が2番目に来るという順番の置換が見られる。次に、『近思録備考』と「近思録説」の道体篇第1条に対する益軒の解説については、以下の3点の異同が明らかになった。

1. 「近思録説」は『近思録備考』の文をほぼそのまま踏襲している箇所がある。
2. 「近思録説」は『近思録備考』の文をほぼそのまま利用しながら、新しい解説をその文章の中に追加している箇所がある。
3. 『近思録備考』にない「近思録説」だけの新たな解説も見られる。また、「近思録説」は『近思録備考』の益軒の自説を利用しない場合もある。

この3点から考えると、「近思録説」はまったくの新作ではなく、益軒の早期の著作『近思録備考』における彼の自説を整理しながら、その新しい研究による新説も加えたものである。『近思録備考』は先

儒の言を引き、『近思録』の語句を詳細に解説しているが、「近思録説」は重要と思われる篇・条に対して、主に益軒の言による全体的な解説を中心としたものといえよう。

しかし、道体第1条においては『近思録備考』と「近思録説」との間にそれほどの思想的新展開は見られない。第一条の書き出しの「無極而太極」の解釈は両書ともほぼ同一である。さらに、「近思録説」とほぼ同時期に著された『大疑録』に見られるような道学の学説に対する批判的意見も「近思録説」の「無極而太極」解説には見られないことも一つの特徴である。

益軒の『近思録』研究に見られる思想的特徴について、以下の3点を明らかにした。

1. 益軒は必要に応じて『近思録集解』の構成や葉采注を批判しているところがある。弁異端篇第3条の「四大」の解釈などを通し、益軒独自の見解が窺える。
2. 益軒は敬や静坐と並びに、精力を愛養することを存養工夫として極めて重んじていたことがわかった。
3. 静坐は存養工夫の方法として重要であると認められているが、執行しすぎると二程の考えた静坐本来の有用性がなくなるため、益軒が静坐よりも敬の工夫を重んじていることがわかった。また、『大疑録』に見られる静坐など、道学の学説に対する批判的態度など、「近思録説」においては見られないことを判明することが出来た。このように、益軒の『近思録』研究を考察した結果、益軒の存養工夫論のいくつかの特徴を明らかにすることが出来た。

第4章では、伊藤仁斎の批判的『近思録』研究について考察してきた。この考察により、仁斎の『読近思録鈔』の議論の特徴として以下の3点が挙げられる。

1. 朱熹の『太極図説』の各解釈は、周敦頤の本旨と異なる。無極を太極と区別せず、両方とも「理」と見なす説などは周敦頤の本旨ではない。

2. 周敦頤の太極を一元气と見なす説は、漢唐の旧注と同様であるが、無極を太極の上に設定し、それを理とする学説は經典の本意と異なる。

3. 仁斎が葉采注を非難していることから、葉采の『近思録集解』を底本とした。また、貝原益軒の『近思録備考』など、他の『近思録』注釈書の影響が窺えない。

仁斎の周敦頤に対する批判は、その無極を理と見なしている説に止まるが、『読近思録鈔』が未完成なものであるため、仁斎が「後備(つぶさ)に濂溪の説、聖經の旨に非ざることを明らかにす」と語っているように、周敦頤の学説と經典との相違点についてさらに論じる予定であったと考えられる。仁斎の批判の標的がほぼ朱熹の解釈が中心となっている。朱熹の「無極而太極」解釈に関わる論争が古くから行われており、『読近思録鈔』が仁斎の古義学という立場から論じたものである。1のような主張は恐らく当たっていると思われる。無極を太極と直結し、両方とも理と見なすことが、周敦頤の原旨からすれば恐らくは強弁というべきであろう。ただし、仁斎の朱熹説に対する反論は必ずしもすべて納得のいくものとは言えない。例えば、仁斎が朱熹の理に動静ある説を論じる際、仁斎が『性理大全』にある朱熹の語「理に動静有り。故に氣に動静有り。若し理に動静無ければ、則ち氣何ぞ自らして動静有るか」のみを挙げて論駁しようとしている。しかし、朱熹の動静と太極に関する考え方はそう単純なものではない。例えば、仁斎が朱熹の動静論に対して「其れ氣に動静有る所以とは、即ち理なり…」と語っているように、朱熹に同様な考え方があり、単純に太極(理)＝動静としなかったのである。

以上のように、近世期日本の『近思録』研究について論じてきた。本論文の第1章で紹介した未見の『近思録』資料を中心に、今後の研究課題としたい。

参考文献

日本語

< 原点 >

- ・ 伊藤仁斎『読近思録鈔』天理大学古義堂文庫蔵
- ・ 貝原益軒「近思録説」『貝原益軒資料集 上』「近世儒家資料集成第5巻」（ぺりかん社、1989年）

< 書籍 >

- ・ 吾妻重二『朱子学の新研究』，創文社，2004年
- ・ 吾妻重二「藤樹書院と藤樹祭——『家礼』の実践」，『環流』第6号，関西大学アジア文化交流研究センター，2008年
- ・ 吾妻重二「儒教儀礼研究の現状と課題——『家礼』を中心に」，吾妻重二・二階堂善弘編『東アジアの儀礼と宗教』，雄松堂出版，2008年
- ・ 阿部吉雄「支那教育史上に於ける朱子の小学」，『東方学報』11・1，東京，1940年
- ・ 石川謙『日本学校史の研究』，小学館，1960年
- ・ 石川松太郎『藩校と寺子屋』，
- ・ 荒木見悟他校注『貝原益軒 室鳩巢』「日本思想大系 34」（岩波書店、1970年）
- ・ 山崎道夫『近思録』「中国古典新書」（明德出版社，1967年）

< 論文 >

- ・ 山崎道夫「近思録の成立過程」『東京学芸大学研究報告』(10)1959年
- ・ 山崎道夫「崎門学派における近思録の尊重と若林強斎の近思録十

四目講義」『国士館大学人文学会紀要』(4) 1972年

- ・ 柏木恒彦「上総道学と梅沢芳男(思齋)」『東洋文化』106号

中国語

<書籍>

- ・ 岡田武彦『貝原益軒』「世界哲學家叢書」(東大圖書公司引行、1987年)
- ・ 陳榮捷『朱学論集』(台湾學生書局, 1982年)
- ・ 陳元暉・尹徳新・王炳照『中国古代的書院制度』, 上海教育出版社, 1981年
- ・ 陳谷嘉・鄧洪波主編『中国書院史資料』上中下, 浙江教育出版社, 1998年
- ・ 程水龙『《近思录》版本与传播研究』「文史哲研究丛刊」(上海古籍出版社、2008年)
- ・ 朱漢民・鄧洪波・陳和主編『中国書院』, 上海教育出版社, 2002年
- ・ 盛朗西『中国書院制度』, 華世出版社, 1934年

韓国語

<原点>

- ・ 李滉『국역 退溪集』2卷 서울: 민족 문화 추진 회、1968
- ・ 李滉『退溪集』成樂熏編、한국 의 사상 대 전집 (10) 서울、1972
- ・ 李滉『退溪集』張基權訳、한국 명저 대 전집 (15)、서울、1973
- ・ 李滉『退溪全書』서울성규관 대학교 대동 문화 연구원、1958
- ・ 李滉, 『增補退溪全書』서울 : 성규관 대학교 대동 문화 연구원、1971

- 李滉 , 『陶山全書』 4 卷 성남、 한국 정신 문화 연구원、 1980
- 李滉 『日本刻版李退溪全集』 阿部吉雄編、 서울、 퇴계연구원、 1975

< 書籍 >

- 琴章泰 『退溪學派의 思想 I』 서울、 집문당、 1996
- 琴章泰 『退溪學派의 思想 II』 서울、 집문당、 2001
- 金장태 『퇴계서분류색인』 서울、 서울대출판부、 1999
- 金秉圭 『退溪思想과 正義』 서울、 博英社、 1986
- 權五鳳 『退溪家年表』 서울、 退溪學研究院、 1989
- 權五鳳 『退溪의 燕居와 思想形成』 포항、 포항공과대학、 1989
- 신귀현 『퇴계 이항、 예 잇고 뒤를 열어 고금을 꿰뚫으셨소』 서울、 예문서원、 2001
- 王甦 『退溪詩學』 서울、 退溪學研究院、 1981
- 劉明鍾 『退溪와 栗谷의 哲學』 부산、 東亞大學校、 1987
- 柳正東編 『퇴계의 生涯와 思想』 서울、 박영사、 1974
- 尹絲淳 『退溪 哲學의 研究』 서울、 高麗大學校、 1980
- 尹絲淳 『退溪 哲學의 研究』 서울、 高麗大學校、 1986
- 尹絲淳 『退溪 哲學의 研究』 서울、 高麗大學校、 1993
- 李相殷 『退溪의 生涯와 學問』 서울、 瑞文堂、 1973
- 李鍾述 『退溪 栗谷 哲學의 比較研究 I』 서울、 修德文化社、 1985
- 張立文 『退溪哲學入門』 서울、 退溪學研究院、 1990
- 張立文 『退溪哲學入門』 서울、 退溪學研究院、 1993
- 全斗河 『退溪思想研究』 서울、 一志社、 1974
- 丁淳睦 『退溪 教學 思想 研究』 서울、 正益社、 1978
- 丁淳睦 『退溪의 教育哲學』 서울、 지식산업사、 1986
- 鄭錫胎編著 『退溪先生年表月日條錄 1』 서울、 退溪學研究院、 2001
- 蔡茂松 『退溪 栗谷哲學의 比較研究』 서울、 成均館大學校、 1985

- 채무송 『퇴계·율곡철학의 비교연구』 서울, 성균관대출판부, 2002
- 韓德雄 『退溪 心理學』 서울, 成均館大學校, 1994
- 韓明洙 『退溪의 敎學思想』 서울, 발행자불명, 1979

< 論文 >

- 賈順先 1996.06 「李退溪의 儒家 經學에 대한 繼承과 發展」 『退溪學報』 第 90 輯、7 - 28 쪽.
- 姜周鎭 1974.06 「李朝史에 있어서의 退溪, 退溪學研究」 219 - 300 쪽, 『이퇴계선생 400 주기 기념사업회』.
- 葛榮晉 1989.12 「李退溪의 理氣觀」 『退溪學報』 第 63/64 輯、9 - 10 쪽
- 葛榮晉 1997.12 「李退溪 理學體系에서의 實學思想」 『退溪學報』 第 96 輯、45 - 99 쪽
- 高橋進 1982.06 「退溪의 政治思想에 대하여」 『退溪學報』 第 34 輯、37 - 56 쪽
- 高橋進 1983.09 「李退溪의 人間觀」 『退溪學報』 第 39 輯、96 - 124 쪽
- 高橋進 1983.12 「退溪哲學의 體系的 構成」 『退溪學報』 第 40 輯、8 - 22 쪽
- 高橋進 1984.12 「東亞細亞에 있어서의 敬哲學의 成立과 展開」 『退溪學報』 第 44 輯、53 - 64 쪽.
- 高橋進 1987.11 「『聖學十圖』의 思想體系」 『退溪學研究』 제 1 집, 93 - 122 쪽、
- 高橋進 1990.12 「東西哲學에 있어서의 自然과 自由에 대하여」 『退溪學報』 第 68 輯、407 - 418 쪽
- 高橋進 1992.12 李退溪哲學에 있어서의 自然과 人間の 에코로지, 退溪學報 第 75/76 輯, 217 - 223 쪽.

- 高橋進 1995.12 退溪學 未來에 무엇을 지향하고 있는가, 退溪學報 第 87/88 輯, 46 - 60 쪽.
- 高橋進 1998.12 退溪學 에 있어서 21世紀의 人間像, 退溪學報 第 100 輯, 122 - 140 쪽.
- 高令印 1991.12 李退溪와 東方文化 <1>, 退溪學報 第 72 輯, 60 - 134 쪽.
- 高令印 1992.03 李退溪와 東方文化 <2>, 退溪學報 第 73 輯, 51 - 66 쪽.
- 高令印 1992.06 李退溪와 東方文化 <3>, 退溪學報 第 74 輯, 20 - 50 쪽.
- 高令印 1993.03 李退溪와 東方文化 <4>, 退溪學報 第 77 輯, 32 - 60 쪽.
- 高令印 1993.06 李退溪와 東方文化 <5>, 退溪學報 第 78 輯, 91 - 122 쪽.
- 高令印 1993.09 李退溪와 東方文化 <6>, 退溪學報 第 79 輯, 88 - 110 쪽.
- 高令印 1993.12 李退溪와 東方文化 <7> [第六章 : 李退溪의 “文以載道”의 文藝思想], 退溪學報 第 80 輯, 109 - 136 쪽.
- 郭信煥 1995.05 易學과 退溪의 天命思想 - 自然과 人間에 대한 '敬', 退溪學論叢 創刊號, 185 - 203 쪽.
- 權五鳳 1983.12 退溪先生의 家書(1), 退溪學報 第 40 輯, 119 - 125 쪽
- 權五鳳 1984.03 退溪先生의 家書(2), 退溪學報 第 41 輯, 134 - 142 쪽
- 權五鳳 1984.09 退溪先生의 家書(3), 退溪學報 第 43 輯, 47 - 62 쪽
- 權五鳳 1986.06 退溪家年表의 編述 <1>, 退溪學報 第 50 輯, 37 - 45 쪽.

- 權五鳳 1986.09 退溪家年表의 編述 <2>, 退溪學報 第 51 輯, 33 - 52 쪽.
- 權五鳳 1986.12 退溪家年表의 編述 <3>, 退溪學報 第 52 輯, 41 - 63 쪽.
- 權五鳳 1987.03 退溪家年表의 編述 <4>, 退溪學報 第 53 輯, 88 - 102 쪽.
- 權五鳳 1987.07 退溪家年表의 編述 <5>, 退溪學報 第 54 輯, 97 - 109 쪽.
- 權五鳳 1987.10 退溪家年表의 編述 <6>, 退溪學報 第 55 輯, 114 - 125 쪽.
- 權五鳳 1987.11 退溪의 子弟觀; 陶門의 子弟와 退溪의 家人教育, 退溪學研究 제 1 집, 279 - 305 쪽, 서울 : 단국대학교 퇴계학연구소.
- 權五鳳 1987.12 退溪家年表의 編述 <7>, 退溪學報 第 56 輯, 93 - 109 쪽.
- 權五鳳 1988.03 退溪家年表의 編述 <8>, 退溪學報 第 57 輯, 34 - 40 쪽.
- 權五鳳 1988.09 退溪家年表의 編述 <9>, 退溪學報 第 58-59 輯, 119 - 128 쪽.
- 權五鳳 1988.12 退溪家年表의 編述 <10>, 退溪學報 第 60 輯, ? 쪽.
- 權五鳳 1989.03 變禮에 관한 退溪先生의 禮講, 退溪學報 第 61 輯, 57 - 64 쪽.
- 權五鳳 1989.03 退溪家年表의 編述 <11>, 退溪學報 第 61 輯, 87 - 96 쪽.
- 權五鳳 1989.06 退溪家年表의 編述 <12>, 退溪學報 第 62 輯, 79 - 99 쪽.
- 權五鳳 1990.12 退溪의 家學과 思想形成, 退溪學報 第 68 輯, ? 쪽.

- 權五鳳 1993.06 退溪先生の 日記 總錄 <1>, 退溪學報 第 78 輯, 7 - 39 쪽.
- 權五鳳 1993.09 退溪先生の 日記 總錄 <2>, 退溪學報 第 79 輯, 7 - 34 쪽.
- 權五鳳 1993.12 退溪先生の 日記 總錄 <3>, 退溪學報 第 80 輯, 7 - 42 쪽.
- 權五鳳 1994.03 退溪先生の 日記 總錄 <4>, 退溪學報 第 81 輯, 7 - 69 쪽.
- 權五鳳 1995.05 退溪先生에 관한 傳言說話考論, 退溪學論叢 創刊號, 163 - 184 쪽.
- 權五鳳 1996.01 退溪의 平等思想 實現과 裴純의 弟子職 篤行-裴純 旌閭碑閣 移建事業 報告를 兼하여-, 榮州鄉土文化研究 創刊號, 9-36 쪽, 榮州 : 榮州鄉土史研究會.
- 權五鳳 1997.06 溪上道學淵源坊 考證 復元 保存, 退溪學報 第 94 輯, 7 - 49 쪽.
- 權五榮 2001.04 退溪의 心性理氣論과 그 사상사적 위치, 退溪學報 第 109 輯, 153~190 쪽.
- 琴章泰 1980.06 宋·明 理學의 두 主流와 退溪의 陽明學 批判, 同大論叢 제 10 집-學長 趙容郁博士 教育奉職 50 周年紀念- 51 - 62 쪽, 서울 : 동덕여자대학.
- 琴章泰 1987.11 退溪의 家庭觀, 退溪學研究 제 1 집, 257 - 278 쪽, 서울: 단국대학교 퇴계학연구소.
- 琴章泰 1988.12 退溪와 南冥의 爲學體系, 제 5 회국제학술회의논문집 2, 173 - 193 쪽, 성남 : 한국정신문화연구원.
- 琴章泰 1992.03 退溪學派의 學問 <1>, 退溪學報 第 73 輯, 99 - 116 쪽.
- 琴章泰 1992.06 退溪學派의 學問 <2>, 退溪學報 第 74 輯, 97 - 116 쪽.

- 琴章泰 1992.12 退溪學派의 學問 <3>, 退溪學報 第 75/76 輯, 273 - 290 쪽.
- 琴章泰 1993.03 退溪學派의 學問 <4>, 退溪學報 第 77 輯, 127 - 144 쪽.
- 琴章泰 1993.06 退溪學派의 學問 <5>, 退溪學報 第 78 輯, 146 - 165 쪽.
- 琴章泰 1993.09 退溪學派의 學問 <6>, 退溪學報 第 79 輯, 144 - 161 쪽.
- 琴章泰 1993.12 退溪學派의 學問 <7>, 退溪學報 第 80 輯, 245 - 263 쪽.
- 琴章泰 1994.03 退溪學派의 學問 <8>, 退溪學報 第 81 輯, 155 - 179 쪽.
- 琴章泰 1994.06 退溪學派의 學問 <9>, 退溪學報 第 82 輯, 74 - 98 쪽.
- 琴章泰 1994.09 退溪學派의 學問 <10>, 退溪學報 第 83 輯, 87 - 108 쪽.
- 琴章泰 1994.12 退溪學派의 學問 <11>, 退溪學報 第 84 輯, 98 - 123 쪽.
- 琴章泰 1995.03 退溪學派의 學問 <12>, 退溪學報 第 85 輯, 92 - 113 쪽.
- 琴章泰 1995.06 退溪學派의 學問 <13>, 退溪學報 第 86 輯, 97 - 118 쪽.
- 琴章泰 1995.12 退溪에 있어서 <太極圖> 와 <天命新圖> 의 解析 과 相關性, 退溪學報 第 87/88 輯, 214 - 234 쪽.
- 琴章泰 1995.12 退溪學派의 學問 <14>, 退溪學報 第 87/88 輯, 427 - 453 쪽.
- 琴章泰 1997.06 退溪의 物我觀과 生命의 世界, 退溪學報 第 94 輯, 50 - 77 쪽.

- 琴章泰 1997.09 退溪學派의 學問 <15>, 退溪學報 第 95 輯, 222 - 261 쪽.
- 琴章泰 1997.12 退溪의 修養論과 <心學圖>의 해석, 退溪學報 第 96 輯, 7 - 44 쪽.
- 琴章泰 1997.12 退溪學派의 學問 <16>, 退溪學報 第 96 輯, 160 - 198 쪽.
- 琴章泰 1998.03 退溪學派의 學問 <17>, 退溪學報 第 97/98 輯, 141 - 187 쪽.
- 琴章泰 1998.09 退溪學派의 學問 <18>, 退溪學報 第 99 輯, 118 - 157 쪽.
- 琴章泰 1998.12 退溪學派의 學問 <19>, 退溪學報 第 100 輯, 361 - 398 쪽.
- 琴章泰 1999.03 退溪學派의 學問 <20>, 退溪學報 第 101 輯, 196 - 222 쪽.
- 琴章泰 1999.06 退溪學派의 學問 <21>, 退溪學報 第 102 輯, 175 - 211 쪽.
- 琴章泰 1999.09 退溪學派의 學問 <22>, 退溪學報 第 103 輯, 129 - 166 쪽.
- 琴章泰 1999.12 <小學圖>와 退溪의 도덕적 실천정신, 退溪學報 第 104 輯 7 - 27 쪽.
- 琴章泰 1999.12 退溪學派의 學問 <完>, 退溪學報 第 104 輯 131 - 173 쪽.
- 琴章泰 2000.02 조선후기 퇴계학파 철학사상의 전개, 南冥學研究 第 9 輯 63 - 94 쪽, 晋州 : 慶尙大學校 南冥學研究所.

- 琴章泰 2000.03 退溪·南冥·栗谷과 선비의식의 세 유형, 退溪學報 第 105 輯 7 - 35 쪽.
- 김장태 2000.12 退溪學派와 理氣論, 한국유학과 이기철학 125~160 쪽, 서울 : 예문서원.
- 김장태 2001.01 〈白鹿洞規圖〉와 退溪의 書院교육론, 退溪學 11, 85~104 쪽, 安東 : 安東大 退溪學研究所
- 김장태 2001.12 퇴계학파의 리기론, 철학사상 13, 33~53 쪽, 서울 : 서울대 철학사상연구소.
- 琴章泰 2002.06 退溪와 南冥의 學風과 學問體系, 南冥學研究 第 13 輯, 1~28 쪽, 晋州 : 慶尙大 南冥學研究所 .
- 琴鍾友 1987.12 退溪先生の 戊辰六條疏와 聖學十圖 및 同筭子の 政治思想에 관한 研究, 韓國의 哲學 제 15 호 73 - 123 쪽, 대구: 경북대학교 퇴계연구소.
- 金光淳 1996.12 退溪學의 研究現況과 現代的 意味, 東方漢文學 第 12 輯, 101-125 쪽, 大邱 : 東方漢文學會.
- 金基鉉 1996.12 退溪의 社會思想, 退溪學報 第 92 輯, 7 - 62 쪽.
- 김기현 1999.12 退溪의 人間學과 退溪哲學, 韓國의 哲學 第 27 號 23 - 42 쪽, 大邱 : 慶北大學校 退溪學研究所.
- 金基鉉 2001.03 퇴계의 인간학과 퇴계철학, 퇴계학과 남명학, 45~72 쪽, 서울: 지식산업사.
- 金大淵 1986.01 退溪·栗谷의 孝思想과 敬老教育, 弘大論叢 17-人文·社會科學篇, 367 - 389 쪽, 서울: 흥익대학교.
- 金斗憲 1975.06 退溪의 聖學十圖, 東洋學 第 5 輯 - 一石 李熙昇 博士 八旬慶祝 論文特集 -, 455 - 478 쪽, 서울 : 단국대학교 부설 동양학연구소.
- 金景禧 1997.02 退溪의 教育思想 研究, 教育研究 第 31 輯, 83 - 116 쪽, 서울 : 誠信女子大學校 教育問題研究所.
- 金勳植 1999.11 退溪 教學思想의 특징, 啓明史學 第 10 輯 特輯號 17 - 34 쪽, 大邱 : 啓明史學會.

- 金秉圭 1995.05 西洋의 正義論과 退溪의 正義論, 退溪學論叢 創刊號, 67 - 73 쪽.
- 金聲凡 1995.05 退溪理氣論의 存在論的 接近, 退溪學論叢 創刊號, 205 - 218 쪽.
- 金裕赫 1987.11 退溪의 鄉約과 社會觀, 退溪學研究 제 1 집, 211 - 235 쪽, 서울: 단국대학교 퇴계학연구소.
- 金裕赫 1988.11 退溪와 栗谷의 人間關係研究, 退溪學研究 제 2 집, 129 - 144 쪽, 서울: 단국대학교 퇴계학연구소.
- 金裕赫 1994.06 <言行錄> 과 退門三十人, 退溪學報 第 82 輯, 7 - 42 쪽.
- 金裕赫 1995.05 退溪의 人間象이 오늘에 주는 敎訓, 退溪學論叢 創刊號, 93 - 108 쪽.
- 金彦鍾 1995.12 <陶山私淑錄> 小考, 退溪學報 第 87/88 輯, 235 - 261 쪽.
- 金樂熙 1997.11 退溪의 政治生涯, 退溪學研究 第 11 輯, 29 - 54 쪽, 서울: 檀國大學校 退溪學研究所.
- 金暎鎬 2001.09 李退溪 經學思想 研究 1 : 四書釋義 를 中心으로, 東洋哲學研究 26, 5~31 쪽.
- 金暎鎬 2001.12 李退溪 經學思想 研究 2 : 四書釋義 를 中心으로, 東洋哲學研究 27, 221~252 쪽.
- 金永植 1994.03 李滉의 理氣觀과 新儒家 傳統上에서의 그 位置, 退溪學報 第 81 輯, 70 - 101 쪽.
- 金璟鎬 2001.04 理氣先後 문제에 관한 花潭·退溪·栗谷의 見解와 爭點, 退溪學報 第 109 輯, 191~223 쪽
- 金仁權 1999.06 宋代 理學과 退溪哲學, 退溪學報 第 102 輯, 73 - 108 쪽.
- 金鍾文 1976.12 退溪의 理氣哲學體系와 倫理思想, 退溪學研究 第 4 輯 153 - 186 쪽, 대구: 경상북도 문화공보실.
- 金鍾錫 1994.12 마음의 철학: 退溪心學의 構造分析, 民族文化

論叢 第 15 輯, 151 - 178 쪽.

- 金鍾錫 1996.09 退溪心學의 程朱學的 根據에 관한 再檢討, 退溪學報 第 91 輯, 7 - 42 쪽.
- 金鍾錫 2001.06 近畿 退溪學派 研究를 위한 예비적 고찰, 退溪學報 第 111 輯, 195~240 쪽.
- 金周漢 1987.02 朱子와 退溪의 文學觀, 人文研究 제 8 집 제 2 호 29 - 57 쪽, 경산: 영남대학교 인문과학연구소.
- 金周漢 1989.03 李退溪의 文學觀, 退溪學報 第 61 輯, 12 - 20 쪽.
- 金俊杓 1995.05 李退溪와 奇高峰의 理氣論, 退溪學論叢 創刊號, 219 - 227 쪽.
- 金春鉉 1980.05 退溪 教育思想의 一研究, 公州教育大學 論文集 제 16 집 165 - 182 쪽, 공주 : 공주교육대학.
- 金泰泳 1983.06 韓國儒學에서의 誠敬思想(2); 李退溪의 敬과 誠敬思想, 湖西文化研究 제 3 집, 29 - 53 쪽, 청주: 충북대학교 호서문화연구소.
- 金泰永 1989.12 退溪學의 義理學的 特徵의 背景, 湖西文化研究 제 8 집, 89 - 100 쪽, 청주 : 충북대 호서문화연구소.
- 金泰永 2001.04 退溪의 個別 人間 自我論, 退溪學報 第 109 輯, 7~67 쪽.
- 金昊鍾 2001.02 退溪 李滉의 對日本外交觀, 歷史教育論集, 第 26 輯 - 毅岩宋春永教授停年紀念史學論叢-, 503~526 쪽, 서울 : 歷史教育學會.
- 金浩吉 1995.05 退溪學과 現代社會, 退溪學論叢 創刊號, 87 - 92 쪽.
- 駱承烈 1995.05 孔子와 李退溪 民族觀, 退溪學論叢 創刊號, 47 - 66 쪽.
- 노희선 1998.09 退溪의 心の 境地說과 教育, 教育研究 第 22 輯, 1 - 15 쪽, 光州 : 全南大學校 教育問題研究所.

- 戴璉璋 1982.03 當然之理와 實然之理-退溪理學의 省察-, 退溪學報 第 33 輯, 62 - 88 쪽.
- 睦暎海 1990.06 退溪와 Kant 道德觀의 教育論的 探索, 退溪學報 第 66 輯, 7 - 48 쪽.
- 蒙培元 1989.06 李退溪의 心性論 概述, 退溪學報 第 62 輯, 7 - 18 쪽.
- 蒙培元 1989.12 心에 대한 李退溪의 解釋學, 退溪學報 第 63/64 輯, 40 - 42 쪽.
- 蒙培元 1990.03 李退溪와 陳白沙의 心學思想 比較, 退溪學報 第 65 輯, 11 - 53 쪽.
- 蒙培元 1995.12 退溪 教育思想과 未來의 教育, 退溪學報 第 87/88 輯, 93 - 128 쪽.
- 朴庠柱 1997.09 <戊辰六條疏>에 나타난 退溪 政治哲學, 退溪學報 第 95 輯, 85 - 114 쪽.
- 朴庠柱 2001.10 退溪先生의 理 概念形成 및 展開, 退溪學論叢 第 7 輯, 163~226 쪽, 釜山 : 韓國退溪學研究院.
- 朴文玉 1987.11 退溪의 官僚觀, 退溪學研究, 제 1 집 237 - 256 쪽, 서울 : 단국대학교 퇴계학연구소.
- 朴文鉉 1996.07 退溪學과 環境問題, 退溪學論叢 第 2 輯, 137 - 147 쪽, 釜山 : 退溪學釜山研究院.
- 朴洋子 1994.09 李退溪의 書院觀, 退溪學報 第 83 輯, 7 - 42 쪽.
- 朴洋子 1998.06 退溪의 經筵講義 小考, 退溪學報 第 97/98 輯, 7 - 44 쪽.
- 朴洋子 1999.12 退溪의 書院教育의 特性, 韓國의 哲學 第 27 號 145 - 163 쪽, 大邱 : 慶北大學校 退溪學研究所.
- 朴洋子 2001.03 退溪의 書院教育의 特性, 퇴계학과 남명학, 185~208 쪽, 서울 : 지식산업사.
- 朴翼煥 1984.05 退溪의 禮安鄉約考, 素軒南都泳博士華甲紀念 史學 論 叢 , 419 - 434 쪽, 서울 :

소헌남도영박사화갑기념사학논총간행위원회.

- 朴鍾鴻 1972.06 退溪의 時代的 背景, 退溪學研究 1 - 28 쪽.
서울 : 이퇴계선생 400 주기 기념사업회.
- 朴忠錫 1988.11 退溪政治思想의 特質, 退溪學研究 제 2 집 , 63 - 78 쪽, 서울 : 단국대학교 퇴계학연구소.
- 朴洪植 1999.09 退溪 性理學의 獨自性 問題, 退溪學報 第 103 輯, 7 - 34 쪽.
- 裴相賢 1995.03 退溪 李滉先生의 禮學思想, 退溪學報 第 85 輯, 7 - 33 쪽.
- 裴宗鎬 1983.09 李退溪 哲學의 方法論 , 退溪學報 第 39 輯, 6 - 23 쪽.
- 裴宗鎬 1983.12 李退溪 哲學의 方法論, 東洋文化研究 제 10 집, 1-14 쪽, 대구: 경북대학교 동양문화연구소.
- 裴宗鎬 1987.11 退溪의 宇宙觀; 理氣論을 中心으로, 退溪學研究 제 1 집 17 - 37 쪽, 서울: 단국대학교 퇴계학연구소.
- 裴宗鎬 1990.04 退溪의 哲學과 그 展開, 전통과 사상 제 4 집 255 - 302 쪽, 성남: 한국정신문화연구원.
- 裴宗鎬 1995.05 退溪學問의 方法論, 退溪學論叢 創刊號, 5 - 29 쪽.
- 潘暢和 1997.03 退溪의 理氣論的 特性, 退溪學報 第 93 輯, 82 - 101 쪽.
- 薛錫圭 2001.01 17 세기 退溪學派의 朋黨認識과 公論形成, 退溪學 第 11 輯 1 - 84 쪽, 安東 : 安東大學校 退溪學研究所.
- 步近智 1988.12 退溪學과 明代朱學, 退溪學報 第 60 輯, 37 - 44 쪽.
- 步近智 1989.12 李退溪의 格物論에 대한 略論, 退溪學報 第 63/64 輯, 30 - 33 쪽.
- 步近智 1995.12 退溪學과 孔孟儒學, 退溪學報 第 87/88 輯, 334 - 371 쪽.

- 步近智 1998.06 李退溪의 朱子學에 대한 發展 略論, 退溪學報 第 97/98 輯 45 - 64 쪽.
- 徐首生 1987.12 退栗의 佛教觀, 韓國의 哲學 제 15 호, 35 - 60 쪽, 대구 : 경북대학교 퇴계연구소 .
- 徐用和 2000.12 退溪의 人間觀, 退溪學報 第 107·108 合輯, 27~52 쪽.
- 徐元燮 1974.12 退溪의 陶山十二曲研究, 退溪學研究, 第 2 輯, 79 - 105 쪽, 대구 : 경상북도 문화공보실.
- 徐元燮 1975.12 退溪의 琴譜歌 研究, 退溪學研究 第 3 輯, 67 - 80 쪽, 대구 : 경상북도 문화공보실.
- 徐元燮 1976.12 退溪의 勸義指路辭 研究, 退溪學研究 第 4 輯, 53 - 86 쪽, 대구 : 경상북도 문화공보실.
- 徐元燮 1978.12 退溪의 樂貧歌 研究, 退溪學研究 제 5 집, 55 - 82 쪽, 대구 : 경상북도 문화공보실.
- 徐元燮 1979.12 退溪의 相杵歌 研究, 退溪學研究 제 6 집, 25 - 50 쪽, 대구 : 경상북도 문화공보실.
- 徐遠和 1989.06 李退溪의 直覺觀에 대한 略論, 退溪學報 第 62 輯 45 - 62 쪽.
- 徐遠和 2000.12 李退溪의 禮樂思想, 退溪學報 第 107·108 合輯, 198~214 쪽.
- 薛錫圭 2000.10 16 세기 退溪學派의 分化와 柳雲龍의 역할, 朝鮮 史研究 第 9 輯, 63~102 쪽, 慶山 : 朝鮮史研究會.
- 疋田啓佑 1997.12 日本에 있어서의 退溪學 계승의 양상, 退溪學 第 9 輯, 69 - 85 쪽, 안동 : 安東大學校 退溪學研究所.
- 小川晴久 1995.12 李退溪와 山居, 退溪學報 第 87/88 輯, 149 - 162 쪽.
- 小川晴久 1998.12 李退溪와 柳成龍 -退溪年譜와 懲悛錄-, 退溪 學報 第 100 輯, 212 - 222 쪽.
- 孫聚友 1997.12 李退溪의 人性觀, 退溪學 第 9 輯, 7 - 23 쪽,

안동 : 安東大學校 退溪學研究所.

- 孫五圭 1996.07 退溪의 詩와 敬, 退溪學論叢 第2輯, 219 - 229 쪽, 釜山 : 退溪學釜山研究院.
- 宋兢燮 1972.11 李退溪의 教學思想-白雲洞書院 賜號請求의 意義-, 東洋文化 第13輯 1 - 28 쪽, 서울 : 영남대학교 동양문화연구소.
- 宋兢燮 1974.10 四七論爭에서의 「四端」解釋, 文理學叢, 第2卷, 57 - 74 쪽.
- 宋兢燮 1974.12 李退溪의 理氣互發說研究, 退溪學研究, 第2輯, 39 - 77 쪽, 대구 : 경상북도 문화공보실.
- 宋兢燮 1974.12 李退溪의 書院教育論 考察-書院의 性格이 變化하는 過程을 中心으로-, 退溪學研究 第2輯, 107 - 136 쪽, 대구 : 경상북도 문화공보실.
- 宋兢燮 1975.12 退溪哲學에 있어서의 理氣共在의 原則, 退溪學研究 第3輯, 31 - 66 쪽, 대구 : 경상북도 문화공보실.
- 宋兢燮 1976.12 退溪哲學에서의 理氣關係와 理先問題, 退溪學研究 第4輯, 27 - 53 쪽, 대구 : 경상북도 문화공보실.
- 宋兢燮 1978.12 退溪哲學에서의 理의 概念-朱子說과의 比較-, 退溪學研究 제5집, 23 - 53 쪽, 대구 : 경상북도 문화공보실.
- 宋兢燮 1979.12 退溪思想에서의 學의 概念 退溪學研究 제6집, 51 - 66 쪽, 대구 : 경상북도 문화공보실.
- 宋瑋圭 1996.11 退溪의 外交思想, 退溪學研究 第10輯, 69 - 88 쪽, 서울 : 檀國大學校 退溪學研究所.
- 宋昌漢 1983.10 李退溪의 斥佛論에 對하여; 答李叔獻(戊午年)을 中心으로, 大丘史學 제24집, 53 - 77 쪽, 대구: 대구사학회.
- 宋晞 1980.06 李退溪의 史學修養, 第1回 韓國學 國際學術會議 論文集, 498 - 505 쪽, 성남 : 한국정신문화연구원.
- 申龜鉉 1987.08 退溪 李滉의 「心經附註」研究와 그의 心學의 特徵, 民族文化論叢 제8집, 81 - 101 쪽, 경산: 영남대학교

민족문화연구소.

- 沈慶昊 1997.12 退溪의 序跋文, 韓國의 哲學 第 25 號, 55 - 72 쪽, 大邱 : 慶北大學校 退溪研究所.
- 阿部吉雄 1974.07 佐藤直方の 李退溪尊信, 退溪學報 第 3 輯, 24 - 45 쪽.
- 安炳周 1987.11 退溪의 學問觀; 心經後論을 중심으로, 退溪學研究 第 1 집, 39 - 59 쪽, 서울: 단국대학교 퇴계학연구소.
- 安炳周 1995.12 退溪 心學과 未來社會, 退溪學報 第 87/88 輯, 13 - 22 쪽.
- 安炳周 2000.06 改革主體의 資格을 論한 李退溪의 政治思想, 退溪學報 第 106 輯, 5~12 쪽.
- 安永翔 1997.03 退溪學派의 相須說과 互發說의 흐름, 退溪學報 第 93 輯, 57 - 81 쪽.
- 梁承武 1995.12 朱子學과 退溪學의 同異 - 朱子와 退溪의 理學思想을 中心으로 -, 退溪學報 第 87/88 輯, 304 - 317 쪽.
- 梁承武 1997.03 退溪學研究의 現代化, 退溪學報 第 93 輯, 7 - 19 쪽.
- 楊祖漢 1995.12 退溪와 朱子の 特敬工夫論의 涵義, 退溪學報 第 87/88 輯, 381 - 401 쪽.
- 梁宗華 1997.12 朱熹와 李退溪의 理氣觀 比較, 退溪學 第 9 輯 37~56 쪽, 안동 : 安東大學校 退溪學研究所.
- 엄연석 2002.06 퇴계의 자연인식과 도덕적 지향, 退溪學報 第 111 輯, 45~110 쪽.
- 呂文郁 2001.10 李退溪의 治學之道, 退溪學論叢 第 7 輯, 77~108 쪽, 釜山 : 韓國退溪學研究院.
- 呂紹綱 2000.12 退溪 易學을 또 논함, 退溪學報 第 107·108 合輯, 215~227 쪽.
- 呂增東 1989.03 退溪先生自省錄 初刊羅州本 解題, 退溪學報 第 61 輯, 65 - 72 쪽.

- 呂增東 1990.03 退溪先生撰 〈婚禮笏記〉 研究 〈1〉, 退溪學報 第 65 輯, 54 - 67 쪽.
- 呂增東 1990.06 退溪先生撰 〈婚禮笏記〉 研究 〈2〉, 退溪學報 第 66 輯, 70 - 78 쪽.
- 呂增東 1990.09 退溪先生撰 〈婚禮笏記〉 研究 〈3〉, 退溪學報 第 67 輯, 76 - 82 쪽.
- 呂增東 1991.03 退溪先生撰 〈婚禮笏記〉 研究 〈4〉, 退溪學報 第 69 輯, 113 - 124 쪽.
- 葉朗 1995.12 新世紀의 要望과 儒家 - 退溪學, 退溪學報 第 87/88 輯, 23 - 31 쪽.
- 王其俊 1996.03 孟子와 李退溪의 心性之學, 退溪學報 第 89 輯, 93 - 107 쪽.
- 王甦 1982.12 退溪의 憂患哲學, 退溪學報 第 36 輯, 175 - 217 쪽.
- 劉權鍾 1999.06 朝鮮時代 退溪學派의 禮學思想에 관한 哲學的 考察, 退溪學報 第 102 輯, 27 - 72 쪽.
- 劉明鍾 1975.12 退高四七論弁과 高峯의 論據-高峯의 羅整庵說 折衷與否-, 退溪學報 第 8 輯 70 - 112 쪽.
- 劉明鍾 1984.06 嶺南退溪學派의 主理說形成, 石堂論叢 제 9 집 57 - 105 쪽, 부산: 동아대학교 석당전통문화연구원.
- 劉明鍾 1989.11 退溪學의 基本體系, 退溪學研究 第 3 輯, 27 - 54 쪽, 서울:檀國大學校 退溪學研究所.
- 劉明鍾 1995.05 退溪의 自然觀, 退溪學論叢 創刊號, 31 - 40 쪽.
- 劉明鍾 1995.12 退溪의 分開說과 剔拔說 - 定齋 柳致明의 理解를 中心으로 -, 退溪學報 第 87/88 輯, 205 - 213 쪽.
- 劉明鍾 1996.07 退溪學의 日本的 展開, 退溪學論叢 第 2 輯, 115 - 125 쪽, 釜山: 退溪學釜山研究院.
- 劉明鍾 1997.07 退溪學의 根本邏輯, 退溪學論叢 第 3 輯, 81 - 86 쪽, 釜山: 退溪學釜山研究院.

- 劉明鍾 2001.10 退溪의 삶, 退溪學論叢 第7輯, 272~290 쪽, 釜山 : 韓國退溪學研究院.
- 柳星烈 1996.11 退溪의 政治道義 實現과 聖君의 役割 -聖學十圖를 중심으로 -, 退溪學研究 第10輯 35 - 67 쪽, 서울 : 檀國大學校 退溪學研究所.
- 柳奭佑 1975.12 韓國의 儒敎哲學과 退溪先生의 地位 및 그 時代의 社會情勢, 退溪學研究 第3輯 81 - 130 쪽, 대구 : 경상북도 문화공보실.
- 柳正東 1972.06 退溪先生의 敬에 關한 倫理的 考察-黃仲舉의 利義質疑를 中心으로-, 退溪學研究 337 - 370 쪽, 서울 : 이퇴계선생 400 주기 기념사업회
- 柳正東 1976.03 退溪의 哲學思想研究-窮理와 居敬을 中心으로-, 退溪學報 第9輯 15 - 81 쪽.
- 柳正東 1990.10 韓國儒學의 實理性에 關한 考察-退溪·栗谷·礪溪·茶山을 中心으로-, 人文科學 제9집 63 - 80 쪽, 서울: 성균관대학교 인문과학연구소.
- 劉偉航 2002.06 李退溪의 平和·仁愛 사상에 대하여, 退溪學報 第111輯, 111~144 쪽.
- 柳仁熙 1984.06 退·栗 이전 朝鮮性理學의 問題發展, 東方學志 제42집 185 - 203 쪽.
- 柳仁熙 1994 退溪 哲學의 近代的 意味와 東亞細亞의 未來 社會, 東方學志 第84輯, 115 - 147 쪽.
- 柳鐸一 1988.11 退溪의 文獻觀과 文獻學的 學風의 展開; 鶴峯系派를 中心으로, 退溪學研究 제2집, 43 - 62 쪽, 서울: 단국대학교 퇴계학연구소.
- 劉權鍾 2001.04 退溪 禮學 研究의 과제와 전망, 退溪學報 第109輯, 110~152 쪽 .
- 劉長林 1995.03 退溪의 理氣觀과 易學, 退溪學報 第85輯, 34 -

66 쪽.

- 劉宗賢 1996.03 退溪의 '西銘'觀과 仁의 體用說, 退溪學報 第 89 輯, 108 - 120 쪽.
- 尹老彬 1975.07 퇴계와 율곡의 황극관(皇極觀)과 심성론(心性論), 한국철학연구 제 5 집-최민홍박사 회갑기념특집- 67 - 94 쪽, 서울 : 해동철학회
- 尹老彬 1975.12 퇴계와 율곡의 황극관(皇極觀)과 심성론(心性論), 釜山文理科大學 論文集 第 20 輯-人文·社會科學篇- 393 - 409 쪽, 부산 : 부산대학교 문리과대학.
- 尹炳泰 1979.12 退溪와 心經附註-退溪書誌의 研究 其三-, 退溪學研究 第 6 集 67 - 81 쪽, 대구 : 경상북도 문화공보실
- 尹絲淳 1972.06 退溪의 價値觀-當爲와 必然의 一致問題를 中心으로-, 退溪學研究 511 - 557 쪽, 서울: 이퇴계선생 400 주기 기념사업회.
- 尹絲淳 1975.05 退溪의 人間과 思想, 退溪學保 第 5 輯 78 - 117 쪽, 서울 : 퇴계학연구원.
- 尹絲淳 1975.07 退溪의 價値觀에 관한 研究, 亞細亞研究 第 18 卷 第 2 號 49 - 106 쪽, 서울 : 고려대학교 아세아문제연구소.
- 尹絲淳 1976.09 退溪의 價値觀에 관한 研究, 退溪學報 第 11 輯 37 - 99 쪽.
- 尹絲淳 1985.12 退溪에서의 宗教的 傾向, 千寬宇先生 還曆紀念 韓國史學論叢, 531 - 539 쪽, 서울: 정음문화사.
- 尹絲淳 1987.11 退溪의 生涯와 人間像, 退溪學研究 第 1 集 1 - 17 쪽, 서울 : 단국대학교 퇴계학연구소.
- 尹絲淳 1989.12 退溪의 人生觀, 철학·종교사상의 제문제 5, 151 - 170 쪽, 성남: 한국정신문화연구원.
- 尹絲淳 1995.05 退溪의 自然觀, 退溪學論叢 創刊號, 41 - 45 쪽.
- 尹絲淳 1995.12 退溪의 自然觀이 지닌 生態學的 含意, 退溪學報 第 87/88 輯, 33 - 45 쪽.

- 尹絲淳 2000.12 退溪 天概念의 多樣性에 대한 檢討, 退溪學報 第 107·108 合輯, 7~26 쪽.
- 尹聖範 1980.06 退溪와 栗谷의 天思想理解, 第 1 回 韓國學 國際學術會議 論文集 554 - 564 쪽, 성남 : 한국정신문화연구원.
- 尹用男 1990.09 退溪·栗谷과 經世致用學派의 思惟體系, 정신문화연구 13-3, 67 - 88 쪽, 성남: 한국정신문화연구원.
- 尹用男 1997.09 退溪 李滉의 師道觀, 退溪學報 第 95 輯 51 - 84 쪽.
- 尹雄林 1985.05 退溪史學의 現代的 理解, 論文集 제 23 집-社會科學篇, 37 - 48 쪽, 공주: 공주사범대학.
- 尹載煥 1998.11 退溪의 自然認識과 四時歌 -退溪의 「山居四時 16 首」를 중심으로-, 退溪學研究 第 12 輯, 39 - 69 쪽, 서울 : 檀國大學校 退溪學研究所.
- 尹天根 1996.03 世界 理性和 李滉 哲學, 退溪學報 第 89 輯, 63 - 92 쪽.
- 李家源 1972.06 退溪의 詩歌文學 研究-短歌와 歌辭에 대하여-, 退溪學研究 141 - 218 쪽, 서울: 이퇴계선생 400 주기 기념사업회.
- 李家源 1983.03 退溪學의 系譜的 研究, 退溪學報 第 37 輯, 7 - 31 쪽.
- 李光虎 1988.02 李退溪의 「聖學十圖」 研究, 泰東古典研究 제 4 집 49 - 90 쪽, 남양주 한림대학 부설 태동고전연구소.
- 李光虎 1996.06 李退溪 哲學思想이 丁茶山의 經學思想 形成에 미친 영향에 관한 高찰, 退溪學報 第 90 輯, 29 - 70 쪽.
- 李奎浩 1977.04 理性的 概念에 대한 研究-退溪의 主理說을 되새기며-, 世林韓國學論叢 第 1 輯 249 - 287 쪽, 서울 : 세림장학회.
- 李楠永 1982.12 星湖 李瀼의 退溪觀과 그의 實學論, 退溪學報 第 36 輯, 39~50 쪽.
- 李楠永 1995.12 退溪의 孔子觀과 그 實踐性, 退溪學報 第 87/88

輯, 318 - 333 쪽.

- 李楠永 2000.12 李退溪의 선비상, 退溪學報 第 107·108 合輯, 53~65 쪽.
- 李東歡 2000.02 南冥·退溪 양 學派의 思想特性에 관한 몇 가지 問題提起, 南冥學研究 第 9 輯 1 - 10 쪽, 晋州 : 慶尙大學校 南冥學研究所.
- 李東歡 2001.03 南冥 退溪 兩 學派의 思想 特性에 관한 몇 가지 問題提起, 퇴계학과 남명학, 245~254 쪽, 서울 : 지식산업사.
- 李東英 1988.01 退溪學研究의 韓日間 業績, 日本研究 제 6 집, 1 - 25 쪽, 부산: 부산대학교 일본문제연구소.
- 李東英 1995.05 李退溪의 詩歌와 道學, 退溪學論叢 創刊號, 115 - 161 쪽.
- 李東俊 1972.06 退溪 敬思想의 哲學的 考察-現代的 意義와 關聯 하여-, 退溪學研究 473 - 510 쪽, 서울 : 이퇴계선생 400 주기 기념사업회.
- 李東俊 1983.11 退溪思想에 있어서 本然之性의 現存的 意味, 東方思想論攷, 375 - 382 쪽, 서울: 도원 유승국박사 화갑기념 논문집 간행위원회.
- 李東俊 1995.12 退溪學的 人間像의 探索과 展望 - <李子粹語>를 中心으로 -, 退溪學報 第 87/88 輯, 61 - 92 쪽.
- 李敏弘 1990.09 士林派의 鄉樂에 대한 見解; 退溪·栗谷의 俗樂 認識을 中心으로, 碧史李佑成教授定年退職紀念論叢 民族史의 展開 와 그 文化 상, 674 - 698 쪽, 서울: 백사이우성교수정년퇴직기념총간행위원회.
- 李敏弘 2001.03 退溪學派의 文學, 퇴계학과 남명학, 369~400 쪽, 서울 : 지식산업사.
- 李无未 2000.12 退溪 家禮의 循俗 問題, 退溪學報 第 107·108 合輯, 244~259 쪽.

- 李允熙·金鍾錫 2002.06 退溪先生 關係資料 2, 退溪學報 第 111 輯, 290~330 쪽.
- 李秉杰 1973.10 退溪 李滉의 家系와 生涯, 韓國의 哲學 創刊號 71 - 88 쪽, 대구 : 경북대학교 퇴계연구소.
- 李相魯 1987.12 退溪 李滉先生의 教育學說 研究, 韓國의 哲學 제 15 호, 61 - 71 쪽, 대구 : 경북대학교 퇴계연구소.
- 李相殷 1972.06 退溪의 學問과 思想, 退溪學研究 29 - 140 쪽, 서울 : 이퇴계선생 400 주기 기념사업회.
- 李相殷 1973.03 四七論辯과 對說·因說의 意義-退高論爭의 焦點을 찾아서-, 亞細亞研究 第 16 卷 第 1 號 1 - 34 쪽, 서울 : 고려대학교 부설 아세아문제연구소.
- 李相益 1996.09 理氣一元論과 理氣二元論의 哲學特性 - 退溪 栗谷의 경우를 中心으로 -, 退溪學報 第 91 輯, 43 - 102 쪽.
- 李相昊 1997.06 朱子學과 退·栗性理學, 國學論叢 第 2 輯, 273-300 쪽, 慶山 : 慶山大學校 國學研究所.
- 李樹健 1990.02 退溪李滉家門의 財産유래와 그 所有形態, 역사교육논집 13·14 서연김영하교수정년퇴임 기념사학논총, 641 - 680 쪽 , 대구: 역사교육학회.
- 李樹健 1999.12 退溪와 南冥의 歷史的 位相, 韓國의 哲學 第 27 號 1 - 22 쪽, 大邱 : 慶北大學校 退溪學研究所.
- 李樹健 2001.03 退溪와 南冥의 歷史적 위상, 퇴계학과 남명학, 13~44 쪽, 서울: 지식산업사.
- 李甦平 1995.12 李退溪의 '敬' 哲學과 未來의 人格發展, 退溪學報 第 87/88 輯, 163 - 180 쪽.
- 李完栽 1972.06 退溪先生의 學問的 方法, 退溪學研究 371 - 402 쪽, 서울 : 이퇴계선생 400 주기 기념사업회.
- 李完栽 1995.05 退溪哲學의 現代的 意味, 退溪學論叢 創刊號, 81 - 86 쪽.

- 李源周 1989.06 退溪先生文集과 退溪先生全書에 대하여, 退溪學報 第 62 輯, 63 - 72 쪽.
- 李佑成 1980.06 韓國儒學史上退溪學派之形成及其展開, 退溪學報 제 26 집 8 - 12 쪽.
- 李佑成 1995.05 退溪先生の 現實認識과 “末世”克服의 理念, 退溪學論叢 創刊號, 75 - 80 쪽.
- 李雲九 1981.03 退溪의 斥異論 小考, 退溪學報 第 33 輯, 36 - 47 쪽.
- 李乙浩 1972.06 退溪先生과 奇高峯, 退溪學研究 301 - 336 쪽, 서울 : 이퇴계선생 400 주기 기념사업회.
- 李鍾述 1974.12 退溪先生の 理到說小考-大學章句를 中心으로-, 退溪學報 第 4 輯, 40 - 62 쪽 .
- 李鍾虎 1989.12 退溪美術의 基本性格(上)·(下); 人格·自然·文藝美의 儒家的 統一, 퇴계학 1, 125 - 148 쪽, 안동: 안동대 퇴계학연구소.
- 李鍾虎 1993.12 退溪學團의 讀書論, 退溪學報 第 80 輯, 156 - 179 쪽.
- 李鍾虎 1999.09 조선 후기 영남 남인의 문학과 연구, 退溪學報 第 103 輯, 60 - 98 쪽
- 李春植 1997.11 退溪 政治思想에 관한 考察, 退溪學研究 第 11 輯, 55 - 70 쪽, 서울 :檀國大學校 退溪學研究所.
- 李海英 1993.12 李滉 理發說의 意味論的 考察, 退溪學報 第 80 輯, 137 - 155 쪽.
- 李洪淳 1995.05 李退溪와 東方傳統文化, 退溪學論叢 創刊號, 323 - 331 쪽.
- 張基權 1973.12 退溪詩의 序說의 研究-登科를 前後한 學問精神 및 退溪思想-, 아카데미論叢 第 1 輯 9 - 33 쪽, 서울 : 세계평화교수 아카데미.
- 張立文 1988.12 朱子와 退 栗의 道心人心說 比較, 退溪學報 第

60 輯, 12 -36 쪽.

- 張立文 1990.09 退溪와 栗谷의 倫理學說의 비교, 碧史李佑成教授定年退職紀念論叢 民族史의 展開와 그 文化 상, 589 - 627 쪽, 서울 : 벽사이우성교수정년퇴직기념논총간행위원회.
- 張立文 1995.12 退溪의 教育 思想과 未來 教育, 退溪學報 第 87/88 輯, 93 - 128 쪽.
- 張立文 2000.06 退溪 心性觀의 現代의 價値, 退溪學報 第 106 輯, 13~35 쪽.
- 張世厚 1994.12 退溪와 <退溪雜詠>, 退溪學報, 第 84 輯, 7 - 48 쪽.
- 張世厚 1997.03 退溪의 朱子詩 受容, 退溪學報 第 93 輯, 20 - 56 쪽.
- 張小飛 1994.06 李退溪의 愛國思想 및 그 價値, 退溪學報 第 82 輯, 99 - 112 쪽.
- 張小飛 1996.06 李退溪의 愛國思想, 退溪學報 第 90 輯, 115 - 129 쪽.
- 張勝求 1995.06 現實認識 論理, 退溪學報 第 86 輯, 7 - 41 쪽.
- 張承姬 1996.11 退溪와 茶山의 教育思想 比較 研究, 退溪學研究 第 10 輯, 89 - 134 쪽, 서울 : 檀國大學校 退溪學研究所.
- 全斗河 1972.06 退溪의 存在論-헤에겔 哲學的 立場에서 본 一解釋-, 退溪學研究 403 - 472 쪽, 서울 : 이퇴계선생 400 주기 기념사업회.
- 全斗河 1973.03 退溪와 關聯시켜서 본 高峰의 人性論-西洋哲學的 照明이 可能한 部分의 索出을 兼해서-, 亞細亞研究 第 16 卷 第 1 號 135 - 172 쪽, 서울 : 고려대학교 부설 아세아문제연구소.
- 全斗河 1977.12 李退溪哲學에 있어서의 性과 情의 意義, 人文科學 제 38 집 205 - 227 쪽, 서울 : 연세대학교 인문과학연구소.
- 全斗河 1979.02 李退溪哲學에 있어서의 實在觀, 韓國學論叢 第 1 집-雪竹 金成基博士 華甲紀念- 55 - 85 쪽, 서울 : 연세대학교

인문과학연구소.

- 全斗河 1980.02 李退溪先生之存養省察論, 韓國學論叢 제 2 집 53 - 66 쪽, 서울 : 국민대학 한국학연구소.
- 全斗河 1982.02 李退溪哲學의 現代的 意義, 韓國學論叢 제 4 집, 57 - 103 쪽, 서울 : 국민대학교 한국학연구소.
- 全斗河 1982.12 李退溪哲學의 現代的 意義, 退溪學報 제 36 집 59 - 98 쪽.
- 全斗河 1986.02 李退溪哲學의 獨自性과 世界性, 韓國學論叢 제 8 집, 183 - 208 쪽, 서울 : 국민대학교 한국학연구소.
- 全斗河 1987.11 世界 속의 退溪思想; 西洋哲學과의 連結點을 찾아서, 退溪學研究 제 1 집, 307 - 328 쪽, 서울: 단국대학교 퇴계학연구소.
- 全斗河 1988.02 李退溪 및 헤에겔 哲學에 있어서의 辨證法的 思考方式의 同異點, 한국학논총 10, 65 - 87 쪽, 서울 : 국민대 한국학연구소.
- 全斗河 1990.02 退溪哲學과 獨逸哲學, 한국학논총 12, 59 - 78 쪽, 서울 : 국민대 한국학연구소.
- 全炳梓 1979.03 退溪·高峯의 四·七論辯攷, 東方學志 제 21 집 19 - 54 쪽, 서울 연세대학교 국학연구원.
- 鄭景嬉 2000.09 16 세기 중반 士林의 禮學 -李滉의 禮學을 중심으로-, 韓國史研究 110, 119~148 쪽, 서울 : 韓國史研究會.
- 정경희 2000.12 16 세기 후반 ~ 17 세기 초반 退溪學派의 禮學 - 鄭述의 禮學을 중심으로-, 韓國學報 제 101 집, 92~120 쪽, 서울 : 一志社.
- 정규복 1995.12 退溪文學과 陶淵明, 退溪學研究 第 9 輯, 95 - 130 쪽, 서울 : 檀國大學校 退溪學研究所.
- 鄭炳連 1995.06 茶山의 退溪私淑과 '演義' 作成, 退溪學報 第 86 輯, 42 - 71 쪽.
- 鄭萬祚 2000.02 退溪學派의 書院論, 南冥學研究 第 9 輯 183 -

206 쪽, 晋州 慶尙大學校 南冥學研究所.

- 鄭萬祚 2001.03 退溪學派의 書院(教育)論, 퇴계학과 남명학, 431~454 쪽, 서울 : 지식산업사.
- 丁淳睦 1973.12 退溪心學論, 弘大論叢 5 279 - 305 쪽, 서울 : 흥익대학교.
- 丁淳睦 1975.02 退溪理學의 存在論的 究明 - 退溪教學思想研究 -, 弘大論叢 4 -小阜 李恒寧博士 回甲紀念 -, 261 - 297 쪽, 서울 : 흥익대학교.
- 丁淳睦 1975.07 退溪의 藝術教育觀, 한국철학연구 제 5 집 - 최민홍박사 화갑기념특집 -, 117 - 136 쪽, 서울 : 해동철학회.
- 丁淳睦 1976.02 退溪의 教學價値實現에 대한 考察-退溪教學思想研究(7)-, 弘大論叢 7 41 - 73 쪽, 서울: 흥익대학교.
- 丁淳睦 1976.03 退·栗 儒敎思想의 定向, 韓國儒學思想과 敎育, 95~100 쪽, 서울 韓國敎育學會 韓國敎育史研究會.
- 丁淳睦 1984.12 退溪의 陶冶理想에 있어서 收斂性和 擴散性, 民族文化論叢 제 6 집, 61 - 78 쪽, 경산: 영남대학교 민족문화연구소.
- 丁淳睦 1985.05 退·栗 心性論에 있어서 關心의 志向性, 제 3 회 국제학술회의 논문집, 954 - 971 쪽, 성남: 한국정신문화연구원.
- 丁淳睦 1985.12 退溪敎學方法論의 哲學, 人文研究 제 7 집 제 4 호, 901 - 912 쪽, 경산 영남대학교 인문과학연구소.
- 丁淳睦 1987.02 朱晦菴과 李退溪의 書院敎育論比較, 人文研究 제 8 집 제 2 호 287 - 306 쪽, 경산 : 영남대학교 인문과학연구소.
- 丁淳睦 1987.11 退溪의 育英活動, 退溪學研究 제 1 집, 189 - 209 쪽, 서울: 단국대학교 퇴계학연구소.
- 丁淳睦 1989.11 退溪哲學의 唯物論的 解析에 대한 批判的 檢討, 退溪學研究 第 3 輯, 85 - 102 쪽, 서울 :檀國大學校 退溪學研究所
- 丁淳睦 1989.12 「廣瀨本 退溪先生年譜補遺譯註 1」『退溪學報』第 63·64 輯, 152 - 173 쪽.
- 丁淳睦 1990.03 「廣瀨本 退溪先生年譜補遺譯註 2」『退溪學報』

第 65 輯、 84 - 109 쪽.

- 丁淳睦 1990.06 廣瀨本 退溪先生年譜補遺譯註 3, 退溪學報 第 66 輯, 95 - 134 쪽.
- 丁淳睦 1990.09 廣瀨本 退溪先生年譜補遺譯註 4, 退溪學報 第 67 輯, 99 - 112 쪽.
- 丁淳睦 1990.12 廣瀨本 退溪先生年譜補遺譯註 5, 退溪學報 第 68 輯, .
- 丁淳睦 1991.03 廣瀨本 退溪先生年譜補遺譯註 6, 退溪學報 第 69 輯, 91 - 112 쪽.
- 丁淳睦 1991.06 廣瀨本 退溪先生年譜補遺譯註 7, 退溪學報 第 70 輯, 103 - 126 쪽.
- 丁淳睦 1991.09 廣瀨本 退溪先生年譜補遺譯註 8, 退溪學報 第 71 輯, 95 - 121 쪽.
- 丁淳睦 1991.12 廣瀨本 退溪先生年譜補遺譯註 9, 退溪學報 第 72 輯, 168 - 198 쪽.
- 丁淳佑 2002.06 退溪 道統論의 歷史的 意味, 退溪學報 第 111 輯, 1~44 쪽.
- 趙南國 1998.09 退溪의 安貧意識과 그 삶 - 「過淸平山有感 并序」와 관련하여-, 退溪學報 第 99 輯, 7 - 33 쪽.
- 趙南旭 1983.12 李退溪의 治道觀 研究, 教育論集 제 10 집, 279 - 297 쪽, 부산: 부산대학교 사범대학.
- 趙南旭 1997.07 李退溪의 政治哲學, 退溪學論叢 第 3 輯, 17 - 26 쪽, 釜山 : 退溪學釜山研究院.
- 조남호 1999.03 退溪學派와 栗谷學派의 人心道心論辯, 退溪學報 第 101 輯, 7-53 쪽.
- 趙宗正 1993.12 退溪 李滉의 心論, 退溪學報 第 80 輯, 180 - 202 쪽.
- 趙宗正 1996.07 退溪先生의 修養論, 退溪學論叢 第 2 輯, 73 - 86 쪽.
- 周桂鈿 1994.09 <聖學十圖> 評述 (1), 退溪學報 第 83 輯, 43 - 128

60 쪽.

- 周桂鈿 1994.12 <聖學十圖> 評述 (2), 退溪學報 第 84 輯, 49 - 70 쪽.
- 周月琴 1990.06 朱熹의 人性論으로부터 李退溪의 心性論에 이르기까지, 退溪學報 第 66 輯, 50 - 69 쪽.
- 周月琴 1995.12 未來 社會管理에서 李退溪 人生 價値觀의 意味, 退溪學報 第 87/88 輯, 181 - 204 쪽.
- 周月琴 1997.09 退溪哲學과 그 現代的 意義, 退溪學報 第 95 輯, 115 - 132 쪽.
- 周月琴 1998.12 性理文化에 대한 退溪心學의 思想的 寄與, 退溪學報 第 100 輯, 181 - 211 쪽.
- 朱七星 1995.05 退溪哲學의 性格과 그의 社會的 役割에 관하여, 退溪學論叢 創刊號, 283 - 298 쪽.
- 朱七星 1997.07 朱子와 退溪哲學의 同異點에 관하여, 退溪學論叢 第 3 輯, 121-144 쪽, 釜山 : 退溪學釜山研究院.
- 朱昇澤 2001.01 退溪 李滉의 人間尊重的 思考, 退溪學 第 12 輯, 33-48 쪽, 安東 : 安東大 退溪學研究所.
- 佐藤仁 1989.06 李退溪와 李延平에 관하여, 退溪學報 第 62 輯, 19 - 43 쪽.
- 佐藤仁 1994.03 退溪와 宋儒의 自然尊重 精神, 退溪學報 第 81 輯, 102 - 126 쪽.
- 陳啓智 1993.12 朱子, 退溪와 佛道思想, 退溪學報 第 80 輯, 203 - 219 쪽.
- 蔡茂松 1974.12 韓儒李退溪의 性理學, 退溪學報 第 4 輯, 6 - 19 쪽.
- 蔡茂松 1975.12 朱子性情論及韓儒李退溪四端七情論研究, 退溪學報 第 8 輯 113 - 152 쪽, 서울 : 퇴계학연구원.
- 千炳其 1987.02 退溪의 視角教授方法論, 人文研究 제 8 집 제 2 호 311 - 333 쪽, 경산 : 영남대학교 인문과학연구소.
- 崔根德 1979 退溪思想의 詩的 照明, 韓國學報 第 16 輯, 71 - 86

쪽.

- 崔東熙 1974.03 四端七情에 관한 論點, 韓國思想 第 11 輯, 31 - 45 쪽, 서울: 한국사상연구회.
- 崔省默 1975.12 退溪의 道德論에 관한 考察, 退溪學研究 第 3 輯 131 - 164 쪽, 대구: 경상북도 문화공보실
- 崔省默 1976.12 退溪學의 道德論的 解釋, 退溪學研究 第 4 輯 187 - 221 쪽, 대구: 경상북도 문화공보실.
- 崔丞灝 1977.03 退溪哲學의 研究-太極論을 中心으로-, 東亞論叢 第 13 輯 259 - 324 쪽, 부산: 동아대학교.
- 崔丞灝 1987.12 退溪의 本體論에 對한 再照明, 韓國의 哲學 第 15 號 5 - 34 쪽, 대구: 경북대학교 퇴계연구소.
- 崔錫起 1996.12 朝鮮 前期의 經書 解釋과 退溪의 <詩釋義>, 退溪學報 第 92 輯, 63 - 89 쪽.
- 崔錫起 1997.09 退溪의 <詩釋義>에 대하여, 退溪學報 第 95 輯, 7 - 50 쪽.
- 崔英成 1995 退溪 栗谷學의 成立, in: idem 1995, 韓國儒學思想 史 II (朝鮮前期篇), 265 - 322 쪽, 서울: 亞細亞文化社.
- 河永哲 1980.12 程朱學 正統에서 본 退溪·高峯 論爭檢討, 韓國의 哲學 第 9 號 87 - 127 쪽, 대구: 경북대학교 퇴계연구소.
- 河永哲 1986.12 退溪의 性理學과 칸트哲學의 比較研究, 韓國의 哲學 第 14 號, 7 - 23 쪽, 대구: 경북대학교 퇴계연구소.
- 韓德雄 1993.06 退溪의 性理學에 관한 性格 및 社會心理學的 接近 <1>, 退溪學報 第 78 輯, 40 - 90 쪽.
- 韓德雄 1993.09 退溪의 性理學에 관한 性格 및 社會心理學的 接近 <2>, 退溪學報 第 79 輯, 35 - 87 쪽.
- 韓德雄 1993.12 退溪의 性理學에 관한 性格 및 社會心理學的 接近 <3>, 退溪學報 第 80 輯, 43 - 108 쪽.
- 韓德雄 1996.03 退溪 心學의 實證的 研究 方向 摸索, 退溪學報 第 89 輯, 44 - 62 쪽.

- 韓明洙 1973.10 退溪의 〈敬〉에 관한 研究, 韓國의 哲學 創刊號 7 - 25 쪽, 대구 : 경북대학교 퇴계연구소.
- 韓明洙 1974.12 退溪哲學의 根本問題, 退溪學研究 第2輯 11 - 38 쪽, 대구 : 경상북도 문화공보실.
- 韓明洙 1975.12 續 退溪哲學의 根本問題, 退溪學研究 第3輯 9 - 29 쪽, 대구 : 경상북도 문화공보실.
- 韓明洙 1976.12 退溪의 世界觀, 退溪學研究 第4輯 5 - 25 쪽, 대구 : 경상북도 문화공보실.
- 韓明洙 1978.02 退溪의 忠孝思想, 退溪學研究 제5집 5 - 22 쪽, 대구 : 경상북도 문화공보실.
- 韓榮國 1973.10 退溪 李滉의 時政論考, 韓國의 哲學 創刊號 53 - 69 쪽, 대구 : 경상북도 문화공보실.
- 허권수 2001.12 南冥·退溪 兩學派의 融和를 위해 노력한 澗松 趙任道, 南冥學研究 11, 353~388 쪽, 晉州 : 慶尙大 南冥學研究所.
- 허남진 1984.06 聖學十圖와 聖學輯要의 研究, 論文集 제18집, 49 - 63 쪽, 서울 : 공군사관학교.
- 黃慶萱 1980.06 退溪·栗谷의 理氣說 比較論, 退溪學報 제26집 67 - 87 쪽.
- 黃德昌 1998.07 退溪先生의 관직에 임하는 태도를 논함, 退溪學論叢 第3輯, 173-188 쪽, 釜山 : 退溪學釜山研究院.
- 黃義東 1987.12 退溪哲學의 理에 관한 考察, 人文科學論集 제6집, 255 - 275 쪽, 청주 : 청주대학교 인문과학연구소.
- 黃俊淵 1990.08 退溪의 「聖學十圖」와 栗谷의 「聖學輯要」에 관한 比較研究, 성곡논총 21, 1 - 42 쪽, 서울: 성곡학술문화재단.
- 洪淳昶 1978.05 退溪先生과 陶山書院, 新羅伽倻文化 제9·10집 특집 安東댐 水沒地區調查報告 33 - 46 쪽, 대구: 영남대학교 신라가야문화연구소.
- 洪淳昶 1982.03 退溪學의 歷史的 位置와 그 意義, 人文研究 창간호, 155 - 172 쪽, 경산 : 영남대학교 인문과학연구소.

欧文

< 翻訳 >

- Adler, Joseph, 2002, *“Introduction to the Classic of Change” by Chu Hsi: Translation with introduction and notes*, Provo: Global Scholarly Publications.
- Ames, Roger and Henry Rosemont, 1998, *The Analects of Confucius: A Philosophical Translation*, New York: Ballantine Books.
- Bruce, J. Percy (trans.), 1922, *The Philosophy of Human Nature*, London: Probsthain, rpt. 1973, New York: AMS Press.
- Chan, Wing-tsit (trans. and ed.), 1963, “The Great Synthesis in Chu Hsi”, in *A Source Book In Chinese Philosophy*, Princeton: Princeton University Press: 605–63.
- — (trans.), 1967, *Reflections on Things at Hand: The Neo-Confucian Anthology Compiled by Chu Hsi and Lu Tsu-ch’ien*, New York: Columbia University Press.
- — (ed.), 1986, *Chu Hsi and Neo-Confucianism*, Honolulu: University of Hawai’i Press.
- Ch’en Ch’un (1159–1223), 1986, *Neo-Confucian Terms Explained (The Pei-hsi tzu-i)*, Wing-tsit Chan (trans.), New York: Columbia University Press.
- Gardner, Daniel (trans.), 1990, *Learning to Be a Sage: Selections from the Conversations of Master Chu, Arranged Topically*, Berkeley: University of California Press.
- — (trans.), 2007, *The Four Books: The Basic Teachings of the Later Confucian Tradition*, Indianapolis: Hackett Press.
- Kalton, Michael (trans.), 1988, *To Become a Sage. The Ten*

Diagrams on Sage Learning, New York: Columbia University Press.

- Kohn, Livia (ed.), 2001, *Chen Tuan: Discussions and Translations*, Cambridge: Three Pines Press.
- Legge, James (trans.), 1893, *The Chinese Classics*, 1960, 2nd ed, 4 vols., Hong Kong: Hong Kong University Press.
- Lau, D.C. (trans.), *Mencius*, 2003, revised edition, Harmondsworth: Penguin Books.
- Wittenborn, Allen (trans.), 1991, *Further Reflections at Hand: A Reader*, New York: University Press of America.
- Yi T'oegye, 1988, *To Become a Sage. The Ten Diagrams on Sage Learning*, Michael Kalton (trans.), New York: Columbia University Press.

< 論文 >

- Adler, Joseph, 1999, "Chu Hsi's Use of the *I Ching*", in J. Adler, K. Smith, P. Bol, and D. Wyatt, *Sung Dynasty Uses of the I ching*, Princeton: Princeton University Press.
- —, 2008, "Zhu Xi's Spiritual Practice as the Basis of His Central Philosophical Concepts", *Dao: A Journal of Comparative Philosophy*, 7(1): 57–79.
- —, 2014, *Reconstructing the Confucian Dao: Zhu Xi's Appropriation of Zhou Dunyi*, Albany: SUNY Press.
- —, 2015, "On Translating *Taiji*", in *Emerging Patterns Within the Supreme Polarity: Rethinking Zhu Xi*, David Jones and He Jinli (eds.), Albany: SUNY.
- Berthrong, John H., 1993, "Master Chu's Self-Realization", *Philosophy East and West*, 43(1): 39–64.
- —, 1994, *Concerning Creativity: A Comparison of Chu Hsi*,

- Whitehead, and Neville*, Albany: SUNY Press.
- —, 1998, *Transformations of the Confucian Way*, Oxford: Westview Press.
 - Birdwhistle, Anna, 1986, *Transition to Neo-Confucianism: Shao Yung on Knowledge and Symbols of Reality*, Stanford: Stanford University Press.
 - Bruce, J. Percy, *Chu Hsi and His Masters: An Introduction to the Sung School of Chinese Philosophy*, London: Probsthain.
 - Chan, Wing-tsit, 1987, *Chu Hsi: Life and Thought*, Hong Kong: Hong Kong University Press.
 - —, 1989, *Chu Hsi: New Studies*, Honolulu: University of Hawai'i Press.
 - Chang, Carsun, 1957, "Chu Hsi, The Great Synthesizer", in *The Development of Neo-Confucian Thought*, vol. 1, New York: Bookman, 243–332.
 - Chang, Garma C.C., 1970, *The Buddhist Teaching of Totality*, University Park: University of Pennsylvania Press.
 - Cheng, Chung-ying, 1979, "Categories of Creativity in Whitehead and Neo-Confucianism", *Journal of Chinese Philosophy*, 6(3): 251–274.
 - —, 2002, "Ultimate Origin, Ultimate Reality, and the Human Condition: Leibniz, Whitehead, and Zhu Xi", *Journal of Chinese Philosophy* 29(1): 93–118.
 - Ching, Julia, 1974, "The Goose Lake Monastery Debate (1173)", *Journal of Chinese Philosophy*, 1(2): 161–178.
 - —, 2000, *The Religious Thought of Chu Hsi*, Oxford: Oxford University Press.
 - Choi, Hai-Suk, 1999, *Spinoza und Chi Hsi: die absolut Natur als der Grund des menschlichen Seins in der Ethik des Spinozas und der neoconfucianischen Lehre Chu Hsis*,

Frankfurt am Main: Peter Lang.

- Cook, Frances, 1976, *Huayen Buddhism: The Jewel Net of Indra*, University Park: University of Pennsylvania Press.
- De Bary, Wm. Theodore, 1981, *Neo-Confucian Orthodoxy and the Learning of the Heart-and-Mind*, New York: Columbia University Press.
- Ebrey, Patricia, 1991, *Chu Hsi's Family Rituals*, Princeton: Princeton University Press.
- Feng Youlan, 1953, "Chu Hsi", in *A History of Chinese Philosophy*, 2 vols., Derk Bodde (trans.), Princeton: Princeton University Press, vol. 2, 533–71.
- Gardner, Daniel, 1986, *Chu Hsi and Ta-hsueh: Neo-Confucian Reflection on the Confucian Canon*, Cambridge: Harvard University Press.
- —, 1995, "Ghosts and Spirits in the Sung Neo-Confucian World: Chu Hsi on *Kuei-shen*", *Journal of the American Oriental Society*, 115, 598–611.
- —, 2003, *Zhu Xi's Reading of the Analects: Canon, Commentary and the Classical Tradition*, New York: Columbia University Press.
- Graham, A.C., 1986a, "What was New in the Ch'eng-Chu Theory of Human Nature?", in *Chu Hsi and Neo-Confucianism*, Wing-tsit Chan (ed.), Honolulu: University of Hawai'i Press, 138–157.
- —, 1986b, *Yin-Yang and the Nature of Correlative Thinking*, Singapore: Institute of East Asian Philosophies.
- —, 1992, *Two Chinese Philosophers: The Metaphysics of the Brothers Cheng*, La Salle: Open Court.
- Gedalecia, David, 1974, "Excursion into Substance and Function: The Development of the *T'i-yung* Paradigm in Chu

Hsi”, *Philosophy East and West*, 24(3): 443–451.

- Hall, David and Roger Ames, 1987, *Thinking Through Confucius*, Albany: SUNY Press.
- Hatton, Russell, 1982, “Ch’i’s Role Within the Psychology of Chu Hsi”, *Journal of Chinese Philosophy*, 9(4): 441–469.
- Hocking, W.E., 1936, “Chu Hsi’s Theory of Knowledge”, *Journal of Asiatic Studies* I:109–127.
- Huang, Siu-chi, 1974, “The Concept of *T’ai-chi* (Supreme Ultimate) in Sung Neo-Confucian Philosophy”, *Journal of Chinese Philosophy*, 1(3): 275–294.
- —, 1978, “Chu Hsi’s Ethical Rationalism”, *Journal of Chinese Philosophy*, 5(2): 175–193.
- —, 1999, *Essentials of Neo-Confucianism: Eight Major Philosophers of the Song and Ming Periods*. Westport and London: Greenwood Press.
- Huang, Yong, 2010, “The Self-Centeredness Objection to Virtue Ethics: Zhu Xi’s Neo-Confucian Response”, *American Catholic Philosophical Quarterly* 84(4): 651–92.
- Ivanhoe, Philip J, 2000, *Confucian Moral Cultivation*, 2nd edition, Indianapolis: Hackett Publishing.
- Jones, David and Jinli He (eds), 2015, *Returning to Zhu Xi: Emerging Patterns within the Supreme Polarity*, Albany: SUNY Press.
- Kasoff, Ira, 2002, *The Thought of Chang Tsai (Zhang Zai) (1020–1077)*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Kim, Bounghown, 1996, *A Study of Chou Tun-i’s Thought*, PhD dissertation, University of Arizona.
- Kim, Youngmin, 2001, “Rethinking the Self’s Relation to the World in Mid-Ming: Four Responses to Cheng-Zhu Learning”, *Ming Studies*, 44: 13–47.

- —, 2008, “Cosmogony as Political Philosophy”, *Philosophy East & West*, 58(1): 108–25.
- Kim, Yung Sik, 2000, *The Natural Philosophy of Chu Hsi 1130–1200*, Philadelphia: American Philosophical Society.
- Lee, Junghwan, 2008, “A Groundwork for Normative Unity: Zhu Xi’s Reformulation of the ‘Learning of the Way’ Tradition”, PhD dissertation, Harvard University.
- —, 1899, *The Book of Changes*, 1963, 2nd ed., New York: Dover.
- Levey, Matthew, 1991, “Chu Hsi as a ‘Neo-Confucian’: Chu Hsi’s Critique of Heterodoxy, Heresy, and the ‘Confucian’ Tradition”, PhD dissertation, University of Chicago.
- —, 1994, “The Clan and the Tree: Inconsistent Images of Human Nature in Chu Hsi’s *Settled Discourse*”, *Journal of Sung-Yuan Studies*, 24: 101–43.
- —, 1995, “Reassessing the Four-Seven Debate: Monistic Dualism Versus Correlated Dualism”, *Southeast Review of Asian Studies*, 17:69–86.
- Liu, Shu-hsien, 1972, “The Confucian Approach to the Problem of Transcendence and Immanence”, *Philosophy East and West*, 22(1): 45–52.
- —, 1972, “A Philosophical Analysis of the Confucian Approach to Ethics”, *Philosophy East and West*, 22(4): 417–425.
- —, 1988, “On Chu Hsi’s Search for Equilibrium and Harmony”, in *Harmony and Strife: Contemporary Perspectives, East and West*, Shu-hsien Liu and Henry Allinson (eds.), Hong Kong: Chinese University of Hong Kong Press: 249–70.
- Louis, Francois, 2003, “The Genesis of an Icon:

The *Taiji* Diagram's Early History", *Harvard Journal of East Asian Studies*, 63(1): 145–96.

- Lovejoy, Arthur O., 1936 & 1964, *The Great Chain of Being: A Study of the History of an Idea*, Cambridge: Harvard University Press.
- Ng, On-cho, 2001, *Cheng-Zhu Confucianism in the Early Qing: Li Guangdi (1642–1718) and Qing Learning*, Albany: SUNY Press.
- Nylan, Michael, 2001, *The Five "Confucian" Classics*, New Haven: Yale University Press.
- Obenchain, Diane (ed.), 1994, "Feng Youlan: Something Happens", *Journal of Chinese Philosophy* (special issue), 21(3–4): 1–574.
- Pincoffs, Edmund, 1986, *Quandaries and Virtues: Against Reductionism in Ethics*, Lawrence: University Press of Kansas.
- Priest, Graham, 2006, *In Contradiction: A Study of the Transcendent*, Oxford: Clarendon Press.
- Rosenlee, Li-Hsiang Lisa, 2006, *Confucianism and Women: A Philosophical Interpretation*, Albany: SUNY Press.
- Schirokauer, Conrad, 1962, "Chu Hsi's Political Career: A Study in Ambivalence", in *Confucian Personalities*, A. Wright and D. Twitchert (eds.), Stanford: Stanford University Press, 162–88.
- Smith, Richard J., 2008, *Fathoming the Cosmos and Ordering the World: The Yijing (or Classic of Changes) and Its Evolution in China*, Charlottesville: University of Virginia Press.
- Sun, Stanislaw, 1966, "The Doctrine of Li in the Philosophy of Chu Hsi", *International Philosophical Quarterly*, 6: 153–

- Taylor, Rodney, 1997, "Chu Hsi and Meditation", in *Meeting of Mind: Intellectual and Religious Interaction in East Asian Traditions of Thought*, Irene Bloom and Joshua Fogel (eds.), New York: Columbia University Press.
- Thompson, Kirill O., 1988, "Li and Yi as Immanent: Chu Hsi's Thought in Practical Perspective", *Philosophy East and West*, 38(1): 30–46.
- —, 1991, "How to Rejuvenate Ethics: Suggestions from Chu Hsi", *Philosophy East and West*, 41(4): 493–514.
- —, 2007, "The Archery of Wisdom in the Stream of Life: Zhu Xi's Reflections on the *Four Books*", *Philosophy East and West*, 57(3): 330–344 .
- Tillman, Hoyt, 1992, *Confucian Discourse and Chu Hsi's Ascendancy*, Honolulu: Hawai'i University Press.
- Tiwald, Justin and B.W. van Norden, 2014, *Readings in Chinese Philosophy: Han Dynasty to the Twentieth Century*, Indianapolis: Hackett Press.
- Tu, Wei-ming (1978), "Yi Hwang's Perception of the Mind", in : *Korea Journal*, vol.18, no.9, pp.30-34.
- Tu, Wei-ming 1982, "T'oegye's Creative Interpretation of Chu Hsi's Philosophy of Principle", in *Korea Journal*, vol.22, no.2, pp.4-15.
- Tu, Wei-ming 1985, "T'oegye's Anthropocosmic Vision an Interpretation", in *Korea Journal*, vol.25, no.7, pp.25-31.
- Tu, Wei-ming (1985), "Yi T'oegye's Perception of Human Nature: A Preliminary Inquiry into the Four-Seven Debate in Korean Neo-Confucianism", in de Bary, Wm. Theodore and Haboush, JaHyun Kim eds. (1985), *The Rise of Neoconfucianism in Korea*, New York, pp.261-282.

- Tu, Wei-ming, 1979, *Humanity and Self-Cultivation: Essays in Confucian Thought*, Berkeley: Asian Humanities Press.
- —, 1985, *Confucian Thought: Selfhood as Creative Transformation*, Albany: SUNY Press.
- Van Ess, Hans, 2004, “The Compilation of the Works of the Ch’eng Brothers and its Significance for the Learning of the Right Way of the Southern Sung Period”, *T’oung Pao*, 90: 264–298.
- Wade, David, 2003, *Li: Dynamic Form in Nature*, New York: Walker and Co. and Wales: Wooden Books.
- Wang, Robin, 2012, *Yinyang: The Way of Heaven and Earth in Chinese Thought and Culture*, New York: Cambridge University Press.
- Wei Chung-t’ing, 1986, “Chu Hsi on the Standard and the Expedient”, in *Chu Hsi and Neo-Confucianism*, Wing-tsit Chan (ed.), 255–272.
- Wilson, Thomas A., 1995, *Genealogy of the Way: the construction and uses of the Confucian tradition in late imperial China*, Stanford: Stanford University Publications.
- Wood, Alan, 1995, *Limits to Autocracy: From Sung Neo-Confucianism to a Doctrine of Political Rights*, Honolulu: University of Hawai’i Press.
- Yeo, Jong-heung, 2013, “A Phenomenological Reading of Zhu Xi”, *Philosophy East and West*, 63/2: 251–274.

< 書籍 >

- Boot, W. J., 1983. *The Adoption and Adaptation of Neo-Confucianism in Japan: The Role of Fujiwara Seika and*

Hayashi Razan, Leiden.

- —, 2012. *Critical Readings in the Intellectual History of Early Modern Japan*, Leiden: E. J. Brill.
- Collcutt, Martin, 1991. “The Confucian Legacy in Japan,” in Gilbert Rozman, ed. *The East Asian Region: Confucian Heritage and Its Modern Adaptation*, Princeton: Princeton University Press, pp. 111–154.
- De Bary, William Theodore, Carol Gluck, and Arthur E. Tiedemann (eds.), 2002. *Sources of Japanese Tradition, 1600–2000*, New York: Columbia University Press.
- De Bary, William Theodore, Carol Gluck, Arthur E. Tiedemann, and Irene Bloom (eds.), 1979. *Principle and Practicality: Essays in Neo-Confucianism and Practical Learning*, New York: Columbia University Press.
- Dilworth, David, Valdo H. Viglielmo, and Agustin Jacinto Zavala (eds.), 1998. *Sourcebook for Modern Japanese Philosophy*, Westport, CT: Greenwood Press.
- Dore, Ronald, 1984. *Education in Tokugawa Japan*, Ann Arbor: University of Michigan Center for Japanese Studies.
- Dufourmont, Eddy, 2010. “Is Confucianism Philosophy? The Answers of Inoue Tetsujirō and Nakae Chōmin.” *Whither Japanese Philosophy? Reflections Through Other Eyes*, Tōkyō: University of Tōkyō Center for Philosophy (UTCP Booklet 14).
- Harootunian, H. D., 1970. *Toward Restoration: The Growth of Political Consciousness in Tokugawa Japan*, Berkeley: University of California Press.
- —, 1988. *Things Seen and Unseen: Discourse and Ideology in Tokugawa Nativism*, Chicago: University of Chicago Press.
- Heisig, James W., 2004. *Japanese Philosophy Abroad*,

Nagoya: Nanzan Institute for Religion and Culture.

- —, 2006. *Frontiers of Japanese Philosophy*, Nagoya: Nanzan Institute for Religion and Culture.
- Heisig, James W., Thomas P. Kasulis, and John C. Maraldo (eds.), 2011. *Japanese Philosophy: A Sourcebook*, Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Koschmann, J. Victor , 1987. *The Mito Ideology: Discourse, Reform, and Insurrection in Late Tokugawa Japan, 1790–1864*, Berkeley: University of California Press.
- Kurozumi, Makoto and Herman Ooms, 1994. “The Nature of Early Tokugawa Confucianism,” *Journal of Japanese Studies*, 20(2): 331–375.
- Lidin, Olof G., 1973. *The Life of Ogyū Sorai: A Tokugawa Confucian Philosopher*, Lund: Studentlitteratur.
- Maruyama, Masao, 1974. *Studies in the Intellectual History of Tokugawa Japan*, Mikiso Hane, trans. Princeton: Princeton University Press.
- McEwan, J. R., 1962. *The Political Writings of Ogyū Sorai*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Moore, Charles A., 1967. *The Japanese Mind: Essentials of Japanese Philosophy and Culture*, Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Najita, Tetsuo, 1978. *Japanese Thought in the Tokugawa Period, 1600–1868: Methods and Metaphors*, Chicago: University of Chicago Press.
- —, 1987. *Visions of Virtue in Tokugawa Japan: The Kaitokudō Merchant Academy of Osaka*, Chicago: University of Chicago Press.
- —, 1998. *Tokugawa Political Writings*, Cambridge: University of Cambridge Press.

- —, 2008. *Doing* 思想史, Tōkyō: Misuzu shobō.
- Nakajima, Takahiro. 2017. “Confucianism in Modern Japan.” Michiko Yusa, ed. *The Bloomsbury Research Handbook of Contemporary Japanese Philosophy*. New York: Bloomsbury Academic.
- Nosco, Peter, 1984. *Confucianism and Tokugawa Culture*, Princeton: Princeton University Press.
- —, 1990. *Remembering Paradise: Nativism and Nostalgia in Eighteenth-Century Japan*, Cambridge: Harvard University Press.
- Ooms, Herman, 1985. *Tokugawa Ideology: Early Constructs, 1570–1680*, Princeton: Princeton University Press.
- Paramore, Kiri, 2009. *Ideology and Christianity in Japan*, London: Routledge Press.
- —, 2016. *Japanese Confucianism: A Cultural History*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Piovesana, Gino K., 1997. *Recent Japanese Philosophical Thought, 1862–1996: A Survey*, Richmond, Surrey: Curzon Press.
- Reitan, Richard M., 2010. *Making a Moral Society: Ethics and the State in Meiji Japan*, Honolulu: University of Hawai‘i Press.
- Sawada, Janine, 1993. *Confucian Values and Popular Zen: Sekimon Shingaku in Eighteenth-Century Japan*, Honolulu: University of Hawai‘i Press.
- —, 2004. *Practical Pursuits: Religion, Politics, and Personal Cultivation in Nineteenth-Century Japan*, Honolulu: University of Hawai‘i Press.
- Spae, Joseph John, 1948. *Itō Jinsai: A Philosopher, Educator, and Sinologist of the Tokugawa Period*, Beijing: Catholic

University Press; reprinted, New York: Paragon Book Company, 1967.

- Steben, Barry, 2014. "Orthodoxy and Legitimacy in the Yamazaki Ansai School," in Chun-chieh Huang and John A. Tucker, eds., *Dao Companion to Japanese Confucian Philosophy*, Dordrecht: Springer. 331–410.
- Tomoeda Rytaro 1984, "Li T'oegyes Theorie von wu-ko im koreanischen Neokonfuzianismus", in *Korea Kulturmagazin*, no.7, pp.22-37.
- Tomoeda Ryutaro 1985, "Yi T'oegye and Chu Hsi : Differences in Their Theories of Principle and Material Force", in de Bary, Wm. Theodore and Haboush, JaHyun Kim eds. 1985, *The Rise of Neoconfucianism in Korea*, New York, pp.243-260.
- Tucker, John A., 1998. *Itō Jinsai's Gomō jigi and the Philosophical Definition of Early-Modern Japan*, Leiden: E. J. Brill.
- —, 2006. *Ogyū Sorai's Philosophical Masterworks: The Bendō and Benmei*, Honolulu: University of Hawai'i Press.
- —, ed., 2013. *Critical Readings on Japanese Confucianism, Volume One: History; Volume Two: Philosophy; Volume Three: Religion; Volume Four: Translations*, Leiden: Brill.
- — and Chun-chieh Huang, eds., 2014. *Dao Companion to Japanese Confucian Philosophy*, Dordrecht: Springer.
- Tucker, Mary Evelyn, 1989. *Moral and Spiritual Cultivation in Japanese Neo-Confucianism: The Life and Thought of Kaibara Ekken (1630–1714)*, Albany: State University of New York Press.
- —, ed., 1998. *Confucianism and Ecology: The Interrelation of Heaven, Earth, and Humans*, Cambridge: Harvard University Center for the Study of World Religions.

- ——— and Tu Weiming, eds., 2003. *Confucian Spirituality*, New York: Crossroad Publishing Company.
- ———, 2007. *The Philosophy of Qi: The Record of Great Doubts*, New York: Columbia University Press.
- Youn, Sa-soon 1985, "T'oegye's Identification of "To Be" and "Ought": T'oegye's Theory of Value", in de Bary, Wm. Theodore and Haboush, JaHyun Kim eds. (1985), *The Rise of Neoconfucianism in Korea*, New York, pp.223-242.
- Youn, Sa-soon 1985, "T'oegye's View of Human Nature as Fundamentally Good", in *Korea Journal*, vol.25, no.7, pp.4-15.
- Youn Sa-soon 1990, *Critical issues in Neo-Confucian thought: the philosophy of Yi T'oegye*, trans. by Michael C. Kalton, Seoul: Korea University Press.

資料編

凡例

- 本資料篇では、本論文で考察した貝原益軒の「近思録説」や伊藤仁斎の『読近思録鈔』を翻字し、ここに掲載することにした。また、近世日本のもう一つの重要性の高い『近思録』資料、懷徳堂派の五井蘭洲の『蘭洲先生近思録紀聞 全』をも翻字し、掲載することにした。
- 『読近思録鈔』は全文を翻字したが、「近思録説」と『蘭洲先生近思録紀聞 全』は部分的に翻字したのみである。「近思録説」は「道體類」より「存養類」までである。『蘭洲先生近思録紀聞 全』は『近思録』巻之一「道體類」より、巻之十「政事」までである。
- 『読近思録鈔』の底本は天理大学古義堂文庫蔵とした。「近思録説」の底本は『貝原益軒資料集 上』「近世儒家資料集成第5巻」（ぺりかん社、1989年）の所収本とした。『蘭洲先生近思録紀聞 全』の底本は大阪府立図書館蔵本とした。
- 「近思録説」と『読近思録鈔』には句読点を付し、「近思録説」・『読近思録鈔』・『蘭洲先生近思録紀聞 全』3書とも適宜に改行した。

1. 「近思錄說」 貝原益軒

【道體類】

無極而太極章、陽變動而交於陰、陰凝合而交於陽、陰陽交和、而生五行之質。又案、無極而太極者、易所謂、易有太極也。動生陽、靜生陰者、是太極生兩儀也。生水火木金土者、兩儀生四象也。

○形既生矣。神發知。篤信謂、耳目口鼻體之形魄既生、則自其神發知覺、而目視、耳聽、口言、鼻嗅、體動、皆因外物來感而生、則五性隨此而感動、五性感動而中節、則和而為善。不中節、則戾而為惡。因所感無窮、而萬事自是而出矣。

○聖人定之云云主靜立人極、定字與主靜相應、定之以中正仁義者、須主靜。是所以人極之立也。

○君子修之、小人悖之、之字、俱指中正仁義而言。

○主靜此靜字非尋常動靜之靜乃中正仁義之安定而無欲之謂蓋人心不能不動然有欲則雖靜亦動無欲則雖動亦靜故有欲則為動無欲則為靜故聖人定之之道以無欲為主明道定性書云定者道亦定靜亦定此靜字亦是定性書所謂定字之意周子亦恐後人誤認靜字故本註曰無欲故靜通書亦曰無欲則靜(處)動直是可見無欲可為靜存動應之本故曰此靜字乃定之謂而已。

○或問周子主靜之說主未發而言乎主已發而言乎愚謂本註曰無欲故靜然則主靜是無欲而不妄動之謂通于未發而言蓋君子雖動亦靜如語其先後則須以未發為先。

○原始反終。當做兩平看。不可專主知死一邊說。故下曰、知死生之說、與論語子路問死章、其旨不同。蓋原始則知生之說、反終則知死之說、然始終一理、知始則知終、知終則知始。故知所以死者、亦不出知所以生而已。朱子註、天地間、綱紀、指三才之道。是言本文上之半節。造化流行、指原始反終。故知死生之說。是言本文下之半節。葉采註分說太極之體用亦可玩味。

○大哉易也斯其至矣。斯字指圖說。其字指易道。蓋言易道之大也。此圖盡之。故曰斯其至矣。此說本于性理紀聞。今人斯字指易道者、非也。

○生之謂性此章明道論性甚精明曰氣即性性即氣生之謂也又曰善固性也然惡亦不可不謂

之性也是渾融說然其意自見是可見性之全體諸子說性不能及乎此愚謂性字□心□生是心之生理故□子以為性者生之質也是以氣質而言故程子言性如前所說蓋心之生理有本然有雜糅二者屬於氣質性之本然信可以為善猶水之源頭清潔然而既有生質則善惡皆屬乎性其善者性之本然也。不善者性之雜糅也譬諸水雖有清濁皆為水也故曰氣即性性即氣生之謂也又曰善固性也然惡亦不可不謂之性也自苟揚以下諸子不知性有本然與雜糅故皆與孔孟程子之說戾

.....

【為學類】

定性書、定者德性之立也動靜者所乘之時也德性既立則動靜常定何動之有無將迎者不為外物所累也無內外者靜而存于中動而應乎外動靜一理無內外之間也蓋靜時定者寂然不動性之本體也動時定者感遂通天下之故性之妙用也內外一貫動靜無二理時有動靜性無內外

○天地之常者陰陽晝夜之代序日月星辰之運轉四時寒暑之往來生長□藏之推移亘萬世而不易者皆天地之常也

○惡外物而自私是本心蔽昧猶反鑑也求照無物之地而用智是□□忘意而索照也故註云雖若二病而實相因也蓋惡事物而自私故用智而反累於事物

○愚謂動靜俱定內外一貫謂之內外兩忘無動靜無內外也

...

西銘 化者乾道變化各正性命是也神者維天之命於□不已是也

○愚謂西銘本乎孟子所謂存其心養其性所以事天也

○西銘大意以天地為大父母故終身順事而不懈以人倫為同胞故親親仁民而不薄以萬物為吾與故愛育之而不傷其要在事天地以仁猶事父母以孝然

○西銘存吾順事順事二字是一篇主意何則西銘全篇只是說事天之道君子一生之心事不外乎此

.....

【存養類】

.....

○存養之工夫亦是可愛養精力。愛養精力亦是存養之事。善養心者、豈止存養義理而已耶。在并養其精力耳。愛養之方其要在不做無用之閑言語閑思慮閑勞□而不損耗於有用之精力耳。

聖人修己以敬章 朱子曰、聰明睿智由是出者、言能恭敬自然心便開明。又曰、敬則自然聰明。人所以不聰不明止緣身心惰慢便昏塞了。敬則虛靜自然通達。篤信謂、程朱此說可謂至論也。蓋人心敬則自然光明。其所以不聰明者、緣不敬而昏塞也。

...

毋不敬章 毋不敬、則人欲淨盡、天理流行。可以對越上帝。苟不敬、則人欲閉塞、為與天地之心不相似。豈可以對越上帝乎哉。

敬勝百邪。敬則天理内存而外邪自除。猶元氣復則百病自癒。

謝顯道從明道先生於扶溝章 愚謂、靜坐之說自二程始。孔孟以上却無此說。蓋初學之人思慮煩擾心志不定。故二程姑教人靜坐。乃對病之藥而已。非以是為平日專一之工夫。苟要專靜坐則與坐禪入定何以異哉。然則不如持敬之為優也。

2. 『詭近思錄鈔』伊藤仁齋

晦庵跋近思錄云、懼夫初学者不知所入也。因掇取其關於大体、而切於日用者、蓋以太極陰陽、鬼神性命之說、為所入之說、而求端之方矣。謹按、聖門之教、以德行為學。雖有言語政事文學等科、本德行中一事焉耳。未聞以太極陰陽、鬼神性命之說、為所入之說、而求端之方也。議論之高、莫宋人若。而後之學者、亦惟知悅議論之高。而未知其離道德。實昉於此。蓋道德盛、則議論平。道德衰、則議論高。議論愈、離道德愈益甚焉。而人倫日用之功蔑如矣。若仙老之說、及理學者流之學是已。大抵宋之一代、禪學大行、上自文武百官、下至於賈人賤匠老尼幼女、凡少識字者、皆莫不習禪。浸淫染漬。靡然成風。雖老師宿儒、不覺自陷于其窠臼、而不能逃焉。於是以悟為的。廢百事趨之。苟於太極陰陽、鬼神性命之說有得焉。則為學已至、而不知其與聖門德行之學。實相背馳。何也。蓋失道德、則必以理性為主、以理性為主、則以悟入為要。其論雖高、實空疎矣。惜哉。著詭近思錄鈔。其詳于語孟字義者、不復贅於此。時元祿辛未之歲。春三月 維楨謹識

濂溪先生曰、無極而太極。晦庵先生解之曰、上天之載、無聲無臭。而造化之樞紐、品彙之根柢。非太極之外復有無極也。維楨按、晦庵之解、既非濂溪之本旨。而濂溪之本旨。又非聖經之意。故今亦論晦庵之解戾於濂溪。而後備明濂溪之說非聖經之旨。蓋周子之意以為、有斯理而後有斯氣。故曰、無極而太極。無極者、謂無物之前自有理。太極即指一元氣而言。其意甚分明。而朱子遷就周子之本意。一以己之意釋之。故不免於本文所所窒礙。而後人亦不覺其非。噫、其讀周子之書者、當從周子之意以解之、不可以己之說雜焉。若以己之說雜之、則既不是周子之本意。況以己之說改變之、則大不可也。周子之學、蓋本漢唐舊註。未嘗有所變易。其改漢唐舊說、以性為理、仁義禮智為性者、皆自伊川始。

故周子太極之旨、從漢唐旧註解之為是。班固藝文志曰、太極元氣、函三為一。易疏曰、太極謂天地未分之前。元氣混而為一。故周子以元氣為太極、而以無物之前自有理為無極。故曰、太極本無極也。又曰、無極之真。其理甚分明。下文節節相應。朱子以太極為萬理之尊號、而解無極二字、為無窮極、而謂非太極之外復有無極。皆非周子之本意。

圖解雖若有所發越、奈其非周子之本意何。或問、朱子何故不從漢唐旧註。又不深窮周子之原旨。妄以己之意釋之邪。曰、大傳以一陰一陽往來不已為道、而未嘗就斯上面論理。蓋陰陽二氣充滿天地、相推相盪、萬古不已。不知誰使、然即所謂道也。倘於一陰一陽往來不已之前求理焉、則老莊虛無之說。非聖人之旨也。朱子之學、本自禪莊來。故以理為本、而以氣為粗、為善惡雜。而不知天地間。唯此一元氣。

所謂理者、反是就氣中、指其有條理者而言。故以為太極。為氣則以為大傳為謂氣而遺理。知有形而下之器。而不知形而上之理。故強以太極為理之尊號、而為無極太極、共一意

而無別、可謂誣矣。陳北溪曰、周子謂無極而太極。而字只輕接過。不可就此句中間、截作兩截看。可謂皆牽合之甚也。

或又問、漢唐諸儒以太極為一元氣。是知形而下之器、而不知形而上之理。至宋儒發明殆盡。而以理為本、而氣云、理之使然者、固漢唐諸儒之所不及。於所謂太極生兩儀合。曰、不然。象曰、大哉乾元、萬物資始。乃統天。至哉坤元、萬物資生。乃順承天。蓋乾元陽氣之始、坤元陰氣之始、所謂一元氣是也。其於乾則稱萬物資始。又稱統天。於坤則稱萬物資生。又稱順承天。則豈容於一元氣上面添一物乎。又說卦云、立天之道。曰陰與陽。又可見外陰陽無所謂天道者也。由是觀之、則漢唐諸儒以太極為一元氣者、乃易之本旨。而以太極為理者、乃其臆見。非易之本義。又非周子之意也。

太極動而生陽。動極而靜。靜而生陰。靜極而動。一動一靜互為其根、分陰分陽、兩儀立焉。朱解曰、太極之有動靜、是天命之流行也。所謂一陰一陽之謂道。誠者聖人之本、物之終始、而命之道也。

氣有動靜、而理無動靜。其所以氣有動靜者、即理也。然不可以動靜即為理。其曰動而生陽、動極而靜、靜而生陰、靜極復動。又曰、一動一靜互為其根、分陰分陽、兩儀立焉。則可見太極者即指一元氣而言。其生字是分生之生。非生出之生。故曰分陰分陽。朱子謬為生出之意。故以太極為理、而口生於太極、而不知理無動靜也。或曰、朱子曰、理有動靜。故氣有動靜。若理無動靜、則氣何自而有動靜乎。曰、此言甚非也。謂有動靜者理也、則可。謂理有動靜則不可。若曰理有動靜、則理與氣何分。其不可也必矣。可謂強辨也。

太極本無極也。

周子以太極為一元氣。以無極為理、至此益明矣。詳其語勢、自五行而陰陽、而太極而至無極而止。太極之於無極。猶五行之於陰陽、陰陽之於太極、皆推本言之。而發明有理。而後有氣之義。故不曰太極即無極、而曰太極本無極。多少分曉、觀本字可見。

五行之生也。各一其性。

此二句與上下分不相蒙。義亦不相接。故葉平巖斷之。別為一段。

按、朱子舊本以此二句、連續上文。摠註之曰、五行具則造化發育之具無不備矣。故亦即此而推本之、以明其渾然一體、莫非無極之妙、而無極之妙、亦未嘗不各具於一物之中。平巖不察。特引張南軒之註而補之。可笑之甚。

或曰、此錯簡。當在上文生水火木金土之下。如此則五行無極。皆各以類相從。文詞順妥。意亦相承。然近世之文章。恐不可有錯簡。姑竢。

羅整庵、深譏妙合二字有害於理。甚是。見于困知記。

3. 『蘭洲先生近思錄紀聞 全』五井蘭洲

濂溪先生曰無極而太極〔無極而太極ハ古人無形而有理ト云ヨクキコユル也〕

無極ヲ無形トシテ太極ヲ有理トスル意也。

太極動而生陽…太極動ヨリ陰陽トナル一動一静互爲其根ハ陰カ陽ノ根本トナリ陽カ陰ノ根本トナルヲ云動極テ静ナルトトキハ陽陰ノ根本トナル静極テマタ動トキハ陰陽ノ根本トナル故ニ一動一静互爲其根ト云互ノ字ニ心ヲツクベキ也

推之於前而不見其始之合…推之於前而不見其始之合ハ上古ニ陰陽始メテ合トキアルベシソレヲ推シテ見ルニ其合始ハシラレヌト也引之於後而不見其終之離也ハ陰陽始テ合事アレハ世ノ末ニ至リ陰陽ワカレ離ル、事アランカト思ヘバワカレ離ルト云事ハ不見ト也

陽變陰合而…

以質而語其生之序則曰水火木金土〔天一生水ノ意ヲ云水ハ水火ハ火ト形ヲサスユエ以質而語其生之序ト云也〕以氣而語其行之序則曰木火土金水〔氣ハ手ニトラレヌ物也春ハ木夏ハ火秋ハ金冬ハ水土ハ土用ニ配スト云類也〕木火土金水者五行自相生之序也〔木生火土生金、生水是也〕二氣變合而生者原於對待之體〔陰陽變合シテ物ヲ生ズレバ生ズル物ト生ジタルモノト二ツニナル二ツニナルトコロ對待ノ體也〕一氣循環而生者本於流行之用也〔太極ノ動静ヨリ陰陽トナリテ陰陽モト一氣也其太極ノ一氣循環シテ陰陽トナル流行ノ用ニモトヅク也〕

五行之生也各一其性〔水ノ冷火ノ熱皆太極ノ理也〕無極之眞〔太極ノ事也無極ニ眞アルユエ太極アルノ意也〕惟人也…〔五性感動而善惡分萬事出矣ハ五性感動セヌトキハ未發ノ中ニテ善惡ノ名ノツカヌ處感動スルヨリ善惡ワカレ萬事トナル已發シテ中節ハ善トナリ不中不節トキハ惡トナル〕

幾善惡〔幾ノトキニ善惡トナル故ニ誠意ノ工夫ヲスレバ其幾皆善トナル〕

此陰陽之象也〔善ヲ陽トシ惡ヲ陰象ル也〕

剥之爲卦…

亦積三十分而成一爻〔以卦配月スルカラーケ月ヲ三十日トスルユエ一爻ヲ三十分トシテ一歳三百六十日ニ配スル也〕陰陽二氣語其流行則一氣耳〔陰陽二氣其流行ヲレバ動テ陽トナリ静ニシテ陰トナリテ一氣循環ト也〕

蓋生之謂性…

朱子曰人生而静以上…〔人ニ賦與セヌ前天ニアルトコロノ理ヲ命ト云命ハ手ノツカヌトコロ也人ニ賦與シテ性ト名附ル上ニテハ天ニアルトコロノ理ヲ命ト云ホドニ手ノツカヌト云ホドニナキ也故ニ不全是性ノ本體ト云故ニ人ニ賦與スル上ニテ性ト云テイマダ人ニ賦與セズシテ天ニアル處ノ理ヲ性トハイハヌ也〕

中者天下之大本…〔亭當ハヨキホド、云意直上直下ハ徹上徹下ト云ト同意ニテ上下ヘトホリ通スル意也〕如百尺之木…〔如百尺之木自根本至枝葉皆は一貫ハ根本ヨリ枝葉マデ其氣一貫シテヒトツニ貫キアルト云意不可道上面一段之事以下ハ百尺ノ木ノ項上ニ氣アリテソレヲ人意ヲ以安排シテ百尺ノ木ノ惣身ヘ通ジサセルト云ヤウナル事ニテハナキト云意無形無兆ハ太極也〕

近取諸身百理皆具…〔不必將既屈之氣復爲方伸之氣生々之理自然不息ハ死シ去ル人ノ氣ヲ以テ生スル人ノ氣トスルニ非ス死シ去ル人ノ氣ハ散ジテ生ズル人ノ氣ハ来ル也コノユエニ生々自然ト不息死シ去ル人ノ氣ヲ以テ生スル人ノ氣トナルナラバ生々ノ理ツキニ息トキアルベキ也〕

往而屈者其氣已散…〔死シ去ル人ノ氣ハ已ニ散シテ生レ出ル人ノ氣ハマサニ生スルユエ萬物一體トナル也佛者輪廻ノ説ノ如ク善ヲスレバ死シテ又人ニ生ズ惡ヲスレバ死シテ又禽獸ニ生ルト云トキハ死スル人ノ氣ヲ以テ生ズル人ノ氣トスルユエ萬物萬體トナル也〕

横渠先生曰氣块然太虚…〔学問ノ外教ニテナキトハイハレズ風雨雪霜千萬ノ形ヲシキ山川ノ融結糟粕煨燼マデ皆道體ノ流行ナレバ心ヲ用レバ悉教トナルトノ意也〕

近思錄卷之二

爲學類

濂溪先生曰聖希天…

周子患人以發第決科榮身肥家希世取寵爲事也〔上ヨリ政ナラバ政ヲ書列子テ出スヲ發策

ト云ソレヲ一ニヲ定ルヲ決科ト云科ハ次第也決科スル人ハ上ヨリ官位ヲアタフルユ
エ榮身ト云又奉祿ヲ賜ルユエ肥家ト云一世ニ名ヲ得ルユエ希世ト云君ニ寵ヲ得ルユエ
取寵ト云也]

伊川先生答朱長文書曰…〔来書所謂欲使後人見其不忘乎善此乃世人之私心也ハコノ来書
ニ善ヲ不忘ト云事アリテ善ヲ不忘ト云事ヲ後人ニ殘シ見セントスル意アリ是私心也名
者可以属中仁君子所存非所汲々ハ名ノ稱セラル、ヲ云ハ中人ヲハゲマス辞也君子ハ德
義ヲ存スルトコロニハ汲々トシテ不及カト恐レテ及ブヤウニシテ名ノ方ニハ汲々トシ
テ不及カト恐レ及ブヤウノ仕方ハセヌトナリ汲々不及カトシテトリツカフトスル意〕

若循其言辞…

體當俗語所謂體驗勘當也〔心ニ工夫スル事〕

今之爲學者如登山麓方其迤邐莫不闊歩及到峻處便止〔迤邐道筋也道筋ハナ、メニツクモ
ノユエ迤邐ト云道筋ノ平ナル處ニテハ闊歩セヌト云意闊歩ハ大マタニアリク事〕

呂與叔有詩云學如元凱…〔心齋ハ心ノトリシマル事〕

莫說道將第一等讓與別人且做第二等才如此說便是自棄〔第一等ハ人ニ讓リ第二等ヨリセ
ント云コト第一等ヨリスルガヨキ也第一等ヲ人ニ讓ルハナラヌニテハナシ自棄也〕

且如欲爲孝、不成只守著一箇孝字…〔温清ハ父母ニツカフ事夏ハス、シク冬ハアタ、
カニスル事〕

謝顯道見伊川…

合下〔其場ト云意〕

知崇地形而上也…

或問知禮成性之說朱子曰如習与性成之意 書經ノ語ヲ假リ来リテ比ス習ガ性トナル如
ク知禮ヲ習ヘバ性知禮トナルトノ意知禮成性ノ說性ノ本然ニハモトヨリ知禮ヲ有ス氣
質ニワタリ知禮ヲ失ヒタル上ニテ云說也

將脩己必先厚重以自持厚重知學德乃進而不固矣…

学則不固之説與本文異〔論語学而ニ学則不固ト云固ハ堅固ノ固也後ニ云德進而不固ト云固ハ固陋ノ固ト見ルユエ本文ト異リト云德斯、メバイヤシキ事ナキヲ云也〕

須放心寛快公平以求之…〔コノ放心ノ放ハ大ノ字ノ意〕

人多以老成則…〔爲人以道義先覚處ノ不可復謂有所不知故亦不肯下問ハ人道義ヲ先覚スル者ト自身ニ云テ道義ヲ先覚スル人ノ場ニ居ルユエコレハ不知トハイハレヌヤウニナル故ニ又下問スル事モエセヌト云意〕

近思録卷之三

致知類

問如何是近思…

若是眞箇劈初頭〔箇ハ助字劈初頭ハ寂初ト云事〕

子子貢謂夫子之言性與天道…〔居常語之ハ平生語ル意不以苟知ハカリソメニ知ルト云意カリソメニ知ルヲ以テ得ルトハセヌ□悟ヲ以得ルトスルユエ不可得而聞ト聞ノ字ヲ用ル聞トイヘバ自得スルユエ也〕

義理有疑則…〔筭記ハ心ニ記シ覚ル事筭子ト云ハ書シルス事筭音サツ〕

讀論語者…

甚生謂非常也〔一トヲリナラヌ事本文涵養成甚生氣質ハ一トヲリナラヌ氣質ヲ涵養成ト云意也〕

凡看語孟…〔終身儘多ハ儘ハマ、トヨムツキザル事〕

興詩者…〔歆動歆モ動也〕

諸卦二五雖不當位…

正者有時而失其中々則隨時而得其正者也〔眞直ニアルモノハ正ナレドモ眞中ニナケレバ

中トイハレズコレ正者有時而失其中ト云意眞中ニアルモノハ眞直ナラヌモノハナキ也
コレ中則隨時而得其正者也ト云意]

二帝而上…〔不先天以開人ハ天ヨリアタヘタル後ニテナケレバ人道ハ開キ不行天ヨリア
タヘザル前ニハ開キ不行ヲ云也〕

權之爲言秤錘之義也…〔義以上更難説ハ此一事ガ義ニアタルト云モノヲツカマヘテハ義
ガイハルレドモ一事ヲツカマヘヌ中ニハコレガ義ジャトハイハレヌト也〕

釋氏錙銖天地可謂至大然不嘗爲大則爲事不得若畀之一錢則必亂矣〔錙銖ハ量ノ至リテ輕
キモノ錙銖天地ハ天地ヲ小トスル意此見甚廣大高尚ノ見也故ニ可謂至大ト云天地ヲ小
ト見ルカラハ其餘悉小ト見ルヤハリ大ト見ルガヨキハヅ也大ト不見ハ事ヲ成就シ不得
ナリ一錢ノワヅカナル事ト思ヒ心ヲツケズニアタフルトキ其アタフル處不義ナレバソ
レカラ乱ル、也コレヲ物ヲ小ト見ルヨリ起ル大ト見レバ出處ニ悉氣ヲツケルユエ誤ル
事ナキ也故ニ不嘗爲大則爲事不得ト云也混々天下之事當如捕龍蛇搏虎豹ハ龍蛇虎豹ヲ
捕搏スル事ハ勇ヲ以セネバナラズ天下ノ事モ大事ナレバ剛勇ヲ以テセネバナラヌト云
意〕

近思錄卷之四

存養類

人心作主…〔自約數年自上著牀便不得思量事不思量事後須強把他這心來制縛ハ約ハ心ノ
トリシマルヲ云數年心ヲトリシメテ平生牀ノ上ニ居ルトキモ思慮ニワタラヌヤウニス
ル思慮ニワタラヌヤウニシテ置テ後他人ノ外ヨリ己ヲ見テ居ルユエ惡念不起ト云ヤウ
イニ制縛ノ工夫ヲ用ルト云意把他這心ハ他人ノ心ガ外ヨリ見テ居ルヤウニスル意這ハ
音シヤコノトヨムベシ亦須寄寓在一箇形象ハ又別ニ我心ヲ一方ヘヨセ置テソレニテ人
欲ノ動ニワタラヌヤウニスル工夫也〕

伊川先生曰聖人不記事…〔聖人ハ事ヲ心ニ記シ覺ヤウトセヌユエ常ニ記シ覺ヘル也中人
以下ハ心ニ事ヲ記シ覺ヤウトスルユエ却テ記シ不覺也〕

伊川先生曰學者患心慮紛亂…〔此上頭、字ハ助字也〕

或曰先生於喜怒哀樂未發之前下動字下靜字…

或問伊川云纔有知覺便是動曰若云知寒覺暖便是知覺已動今未曾著於事物但有知覺在何

妨其為靜不成靜坐便只是瞌睡〔知寒覺暖ト云ガ知覺ノ動也ソノ寒ヲ知り暖ヲ覺ユル物ナケレバ寒来リテ寒ヲ知り暖来リテ暖ヲ覺ユル事ナラヌ也寒不来暖不来前ニ寒来リテ寒ヲ知り暖来リテ暖ヲ覺ユルモノヲサシテ動トハイハレズコレ今来曾著於事物但有知覺在ト云トコロ也コレ動ニアラズシテ靜ヲスルヲ妨ル事ナキ也靜坐トイヘドモ寐テ居ルヤウナル事ニハ非ズト也〕

人於夢寐間…〔如夢寐顛倒ハ東ニ枕シタルガ西ニ枕スルヤウノ事イネノアシキ事也〕

魂與魄交而成寐心在其間〔魂ハ人ノ形ヲイカシテ置物ノヤウナル模様魄ハ四體ヲハタラカスヤウノ模様其人ノ形ヲイカシ置ヤウノ模様四體ヲハタラカスヤウノ模様ヲサスル物ハ心也〕

問人心所繫著之…〔凡事有兆朕入夢者ハ明日ノ事ヲ今日思ヒテ其夜夢見ル類ヲ云人心須要定使他思時方思ハ思フヘキトキハ思フヲ云コレハ是也思フマジキトキニ思フガ非也人心自由便放去ハ心ヲ自由ニスル上ニテハ心ヲ放ヤリテモクルシカラズト也〕

横渠先生曰始學之要…〔非在我者ハ三月不違仁ト日月至トハ仁ニ不違日月至トノ中ハ仁我ニアルヲ知ル聖人ノ上ニテハ己ト仁ト一體ニナリ居ルユエ我ニ仁アルコトヲ不知ニ居ル全體仁ヲ不離シテ一體ユエ不知也故ニ非在我者ト云也〕

近思錄卷之五

克己類

飢食渴飲……〔飢食渴飲ハ定リタル事万事定リノトホリニスレバ天職ニカナフワヅカト云意〕

獵自謂今無此好……〔明道往昔獵ヲ好ム今獵ヲ好ム心ヤムト云周茂叔ノ答ハソレハ好コ、ロ暫潛隱シタルノニテ一日萌動スレバモトノトホリニナルモノナレバ今好コ、ロナキト辞ヲヤスクスルナトナリ十二年ノ後人田獵スルヲ見テ喜心アリ果シテ周茂叔ノ辞ノトホリト也〕

聖人責己感也處多責人應也處少〔聖人ハ自分ノ人ニ感ズル事ヲ責テ人ヨリ己ヲ知リテ歸服スルヲ人ニセメヌト也己ガ感ヲ責ル處多シト云意也〕

謝子與伊川別一年……〔檢點ハ吟味スル事點頭ハウナヅッキ合点スル事也〕

人之有朋友……〔拍肩執袂以為氣合ハ中ノヨキ事肩ヲウチ袂ヲ執テ氣ノ合ヲ云〕

世學不講……幼少ノ時便驕ニシテ長ジテ凶狼ナルユエ親ハ親我ハ我ト二ツニ見ルユエ親ニ不須也故ニ於其親已有物我ト云

近思錄卷之六

家道類

買乳婢多不得已……〔用二子乳食三子足備他虞ハ二子ニ一人ヅ、乳母ヲ置テ其中ヘ中ヘ今一人子ヲ入レテ二人ノ乳母ノ乳ヲ食ストモ二子ノ害ニハナラヌト云事也〕

先公太中……〔任子ハ父ノ功ニヨリ及第モセズシテ進メ奉ラル、ヲ云諸子或加呵責必戒之曰貴賤雖殊人則一也汝如是大時能為此事否ハ呵責スル諸子ハ十八九歳ニテ呵責セラル、僕ハ十歳ハカリノ人ナルトキコノ諸子ノ十歳バカリノトキ彼ヲ呵責スル事ヲ人ニ呵責シラレズニナシタルカ汝モ彼カ歳ゴロニハ得セズ然レバ彼ヲ呵責スルハヅニテハナキト云テ戒ル也如是大時ハ彼ガ大キサノ位ノトキト云意也〕

婢僕始至……〔若到所提掇ハ主人ノ方ヨリ氣ヲツケテヒキマハス事更謹則加謹ハ主人ヨリ婢僕ヲツ、シメルトキハ婢僕其本心ヲ棄ルヤウニナルト也〕

近思錄卷之七

出處類

聖賢之於天下……〔區々ハツトムル□〕

人之於患難……〔有人遇一事則心々念々不肯捨畢竟何益若不會處置了放下便是無義無命也ハ一事ニ遇テ其事ヲトルニコウスルガヨキカアシキカト思ヒテ不定ユエ思慮シテ其事ヲ不終コウデアラフト定テ其事ヲ成テモコウガヨカリシカアシクハナカリシカト事ヲ成タル跡ニテモ放下セズシテイロイロニ思フ也是義ト命トヲ不知ユエ也義命ヲ知レバ一事ニ遇テ義命ニ順フユエ思慮スルニ不及事ヲ成タル跡ニテハ其事ヲ放下シテ不思也是其初ニ義命ヲ知りテ義命ニ從フユエ也〕

門人有居大学……〔居大学而欲歸應鄉舉ハ大学ニ居テ進メ挙ラレント思ヒシニ郷ニ於テ人ヲ進メ挙ル事アリコレ郷ナリ此人ノ故郷ニテ其事アリトキ、大学ヲ退キテ故郷ニカヘリテ郷舉セラレントスル也問其故曰蔡人黜習戴記決科之利也ハ大学ニテ挙ラルモ郷

挙モ同事ナルニ大学ヲ退キテ郷挙ニ應スルユエ其ワケヲ問ヘハ蔡人戴記ヲ習フ人寡シ
コノ人戴記ヲヨク習フユエ蔡ノ郷挙ニ應スレバ必ズ挙ラルト知ルユエ大学ヲ退キ蔡ノ
郷挙ニ應スルト也決科之利ハ此仕方科ヲ決シテ進メ挙ラル、ニ利アル處ト云意豊約之
間ハ豊ハ富約ハ貧々富ノ間ト云意也]

孟子辨舜跖之分……〔出義便以利言也ハ孟子義ヲイヘバリヲ並ベ云ヲ云〕

謝湜自蜀之京師……〔將試教官ハ大学人ヲ教ル官ニ試ラレ挙ラレントスルト云意〕

先生在講筵……〔在講筵至曾請俸ハカヤウノ時ニハ別ニ月俸アリソレヲコノ方ヨリ請ト
見ヘタリ伊川ハ不請也諸公遂牒戸部問不支俸錢ハ伊川俸錢ヲ不請ユエ諸公戸部ニ請也
戸部ハ人戸ヲ司ル官ニテ俸禄ノ事ヲ司ル牒ハ書ツケ也問不支俸錢ハ伊川此俸錢ヲ受テ
モ伊川ノ家事ノ費ホドハ不足ユエ其外ニ俸錢アラン事ヲ戸部ニ告ル意也戸部索前任曆
子前任ハ今ヨリ前ノ官ヲ云曆子ハ書ツケ也戸部伊川ノ今ヨリ前ノ官ヲ書附テ出セト云
也前官ニヨリテ俸錢ノワカチアルユエ前官ヲ問也起自草萊無前任曆子ハ伊川匹夫ヨリ
起リテ後ニ至ルユエ前官ハナキト也〕

初入京官時用下狀出給料錢曆〔京官ハ王ノ幾内ノ官ニツクヲ云初テ幾内ノ官ニツクト前
官ハ昔ヨリノヲ書ツケテ出スヲ云下狀ハ前官ヲ初ヨリノヲ書出ス事給料錢曆ハ何ノ官
ニハ俸錢ヲイカホドヤル又何ニハイカホド、云事ヲ書シルス帳也〕

遂令戸部……〔遂令戸部自為出券曆ハ伊川匹夫ヨリ起リテ今後ニ至レバ前官ナキト云ユ
エ戸部仕方ナキユエ俸錢ヲカスヲ云券曆ハ手形也俸錢ヲ借スユエ手形ヲトル自爲ハ戸
部自分ノ口簡ニテ伊川ノ爲ニスルト云意又不意妻求封ハ夫ノ官ニツキテ妻モ夫ノ官ヲ
呼夫何某ノ官ニナレバ其妻ヲ何某ノ夫人ト呼ヲ云是モ此方ヨリ乞求ル事ト見ヘタリ又
伊川不乞求也陳乞恩例ハ恩ハ時ニ望キハマリナクシテ上ヨリ賜ルヲ云例ハ如此トキハ
上ヨリコレヲ賜ルト云例ニヨリテ賜ルヲ云只爲而今士大夫以下ハ今ノ士大夫ハ乞ト云
事ヲナレコニナリテ何ニテモ此方ヨリ乞ヤウニナリタルト云意〕

漢策賢良……〔任對ハ朝廷君ノ前ニテ論ズル事〕

伊川先生曰人多說……〔挙業ハ及第セントテ学文ヲスルヲ云〕

問家貧親老〔曰在日在己固可為親奈何ハ己ガ爲ニ禄仕ヲ求ムニ不得トキハ命ト云テヤム
爲親ニ求ルニ不得トキ命ト云テハマレヌガ是ハイカガト也曰爲己爲親也只是一事若
不得其如命何己カ爲ニ禄仕ヲ求ルモ親ノ爲ニ求ルモ同事親ノ爲ニ禄仕ヲ求ルトテ不得

トキハ外ニ仕方ナシ命トシテ止ヨリ外ノ事ハナシ然レハ己ガ爲ニ禄仕ヲ求ルト同事也ト云意]

横渠先生曰世禄之榮……〔長廉遠利以似述世風ハ世ノ風俗長廉遠利ニ似セントノ意〕

聲病詩律有四聲八病〔四聲ハ平上去入ル病ハ詩ニハ病アルヲ云本文工聲病ト云此四病ハ病ヲワカツ事ノクワシキヲ云〕

近思錄卷之八

治體類

明道先生言於神宗曰……

太子中允〔官ノ名〕監察御史裏行〔監察御史裏行ハ目附役也裏行ハイツレノ官ニモアリ本役ニ非ズシテ其官ノ中ニ入り居テ其官ノ事ヲ行フヲ云也〕

為政須要有紀綱文章……

文章謂文法章程也〔本文ニ云文章ハ君ノ前ニテ文ヲ書スル事ヲ云文章ナレバ此文法ト云ハ君ノ前ニテ文ヲ書スルニ法アルヲ云章程ト云モ幾字ヅ、書スト云ヤウナル法ヲ云〕讀法如州長於正月之吉及歲時祭祀各屬其州之民而讀法以考其德行道藝而勸之以糾其過惡而戒之是也〔讀法ト云ハ一州ノ長正月ノ吉日ト歲時ノ祭祀トニー州ノ民ヲ集テ法ヲ讀キカス也讀法トハ上ヨリノ法令ヲヨミキカスヲ云也其上ニテ德行道藝アル者ハヲサメテイヨイヨ州民德行道藝ニ勤ムヤウニシテ州民ノ過惡アル者ハ糾シテ過惡ヲセヌヤウニ戒ルヲ云也〕

平價如賈師各掌其次之貨賄之治辨其物而均平之展其成而奠其價之類是也〔各掌其次之貨賄之治トハ次ハ位也弓師ハ弓師鎧ヲスル物ハ鎧ヲスル者ト云ガ次ト云意己ガ□ノモノヲ治メコシラユル事ヲ掌ト云意辨其物而均平之ハ其銘々□ニ從ヒテコシラヘタテル物ヲ辨ジテ善惡ヲ定ル事展其成而奠其價ハ其出来アガル物ヲ見てヨキ物ニハ價貴ク惡ク出来アガル物ニ價賤ク定ルヲ云也〕

漢之治過於唐……〔漢大綱正ハ漢ハ大キナル事正シキ也唐萬目挙ハ唐ハ小ナル事ヲヨク治メ正ス也〕

唐之治目……〔世業ハ代々ノ業ヲ云府兵ハ軍ノトキ農人ノ中ヨリ士卒ヲトラズニ常ニ軍アルトキ用ルト云人ヲ別ニコシラヘ置ヲ云日本ノ侍ノ類租庸調ハ租ハ田地ヨリアグル

年貢庸ハ人ノ歩役ニトラル事調ハ絹綿ナドヲ運上ニスル類也省府ハ都ノ中ニテナキ一國一國ノ法制ヲ云]

近思錄卷之九

治法類

擇士入学……

此仿周禮鄉大夫賓興司馬論士之制〔鄉大夫ハ一郷ヲ治ル大夫也賓興其郷ノ中ヨリ人ヲ進挙ル事一郷ノ中ヨリ一郷ヲ治ル大夫人ヲス、メ挙ルトキ其士ヲ論シ撰ムハ司馬ガスルト也〕

八曰四民

農者十居八九〔農人十ノ中ニ八九アリ其ハ一分ニアルヲ云也〕

伊川先生看詳三学條制……〔三学ハ書生ノ居所也條制ハ此三舎ノケ條也舊制公私試補蓋無虚日ハ舊制ニ歳ニ一度上ヨリ内舎ノ諸生ヲ試ル月ニ一度私外舎生ヲ試ル也補ハ試テ官ニツケルヲ云補任スル意月使之事ハ毎月試ラル、ニ我先ニ争テ進メ挙ラレントスル意改試為課ハ争アルハ学校禮義相先ノ地ニテスベキ事ニ非ズ故ニ公私ノ試ヲヤメテ課ニシカヘル課ハイツマデトキリヲキル事一□ヲイツマデニ治メトキリヲキリテ治サスルヤウノ事有所未至則學官召而教之ハ其キリマデニ得不治トキハ学校教授ノ官ノモノ召出シテ教ヘ導ク也更不考定高下ハ學問ノ成功ノ高下ヲ定メヌ也カヤウニスルト争ヤム也制尊賢堂以延天下道德之士ハ尊賢堂ト云堂ヲ建テ天下ノ道德アル士ヲソノトコロニ置也置待賓吏師齋ハ待賓道德ノ上ニテ云吏師ハ事ヲトラシテヨク事ヲツトムベキ人ヲ云コレヲ置トコロヲ齋ト云待賓齋吏師齋トニツニ見ルベシ待賓齋ニハ待賓ノモノヲ置キ吏師齋ニハ吏師ノ者ヲ置也解額ハ人教ヲ書シルス事也諸生ノ人教ヲ記スルヲ云朝廷授法必達乎ハ朝廷ノ法ハ下ニ達シトドクヲ好ムヲ云先王制法待人而行未聞立不得人ノ法也ハ先王ノ人ヲ得テ任ズル法ハアリ人ヲ不得トキノ法ハナキ也人ヲ得ルヲ主トシテ人ヲ不得ヲ意トセヌ處也〕

明道先生行狀云……〔度郷村遠近為伍保ハ伍ハ五家ヲ云二十五家ヲ保ト云都ニ近キ處ノ郷村ハ人教多キユエ伍ヲ以組トス人教多ケレバ組寡クテモ事足ル都ニ遠キ郷村ハ人教寡キユエ組ヲ多クセネバ事不足ユエ保ヲ以テ組トスル也郷民為社會為立科條ハ社會ハ一郷ノ民不殘會スルヲ云一村アツマリテ汁ヲスルト云類科條ハ教ノケ條也社會シテ教ノケ條ヲ立テ善惡ヲ旌別スル也〕

韓信多、益辨只是分數明〔一万人ヲヒトツニツカヒテハツカハレズ一萬ノ人ヲ百人ニ一人頭ヲタテ千人ニ一人頭ヲタテ、ツカフユエヨクツカハルコレ分數ニ明ナルユエト也〕

伊川先生曰管轄人……〔管轄人ハ一軍ヲ管領スル人ヲ云今帥千人能使千人依時及節得飯喫ハ千人ノ人ニ一度ニ食サスル事ハナラヌ也百人ホドヅ、ワケテ食サスレバ千人ノ人悉ク食スル也如此者亦能幾人ハカヤウノ人モタヤスクハナキト也〕

管攝天下人心……〔明譜系ハ系圖ヲ正ス事收世族ハ一門ヲヨク治ルヲ云立宗子法ハ□流ノ家ヲ責ムヲ云也〕

古者諸侯之適子適孫……〔諸侯之適子適孫繼世為君其餘庶子不得禰其先君ハ適子適孫ハ皆父ノ後ヲ繼ユエ君トナル庶子ノ分ハ臣ノ位ニ居ユエ其父ヲ父トスル事ヲ不得位ヲ不繼ユエ也因各自立為本派之始祖ハ其庶子別ニ封ゼラルユエ本派ノ始祖トナル周ノ天子ノ上ニテイヘバ周公是也魯ノ始祖トナルコレ本派ノ始祖也其子孫百世皆宗之所謂大宗也其本派ノ始祖ノ子孫百世ニ至ルマデ本派ノ始祖ヲ宗トスル也故ニ本派ノ始祖ヲ大宗ト云族人雖五世外皆為之齊衰三月ハ本派ノ始祖ノ族人五世ノ後服盡ルトイヘドモ大宗ノ事ユエ齋衰三月ホドノ事ヲツトムル也大宗之庶子又別為小宗ハ大宗ノ適子適孫モ又世ヲツギテ君トナル庶子ハ位ヲ不繼臣ノ位ニ居ル又別ニ封ヲ得テ始祖トナル大宗ノワカレユエ小宗ト云也小宗有四ヨリ以下ハ圖ヲ以テ合セ見ルベキ也〕

宗子法壞則……〔如唐時立廟院ハ唐ノトキハ廟ヲ建テ祭事カマイナク建ル仍不得分割分ハ然レドモ適子ノ家ニカギリタル事ニテ庶子ノ家ニ分割シテ廟ヲ建テ不祭祖業使一人主之ハ祖業ハ適子ノ家一人シテ主トシテ庶子ニワタラヌト也〕

凡人家法……〔有花樹韋家宗會法ハ韋氏花ノサクトキ一族ヲ悉ク聚會スル故事〕

冠婚喪祭禮之大者……〔六禮ハ冠婚喪祭郷飲酒士相見禮ヲ云士相見禮ハ士ト士相見ノ禮ヲ云家必有廟ハ元士ノ家ヨリ鬼神ヲ祭ル廟アルヲ云也〕

庶人立影堂〔影堂ハ廟ヲ別ニ不建ニ座鋪ノ内ニシコムヲ云日本ノ持佛堂ノ類也〕

月朔必薦新……

旁親無後者祭之別位〔旁親ハ親ノ兄弟ノ類其人ニ後ナキトキハ宗廟ノ中ニテ位ヲ別ニ設テ祭ルト也〕

立春祭先祖

亦無主設兩位分享考妣〔立春ニハ高祖ヨリ以下ヲ祭ル高祖ヨリ以上ニハ神主ナキユエ宗廟ノ中ニ高祖ヨリ以上ノ主ヲ設テ高祖ヨリ以上ノ父母位ヲ兩方ニ分テ祭ル〕

正叔云某家治喪……

波吒〔クルシム事〕

然而又有旁枝達而為幹者……〔天子建國ハ諸侯ヲ封スル事諸侯奪宗ハ小宗ノ人ニ功アレハ天子ヨリ諸侯ニ封スレバ大宗ニアラネドモ宗廟ヲ建テ小宗ノ方ニテ祭祀ノ礼ヲトル故ニ奪宗ト云〕

邢和叔叙明道先生事……〔其吏事操決文法簿書ハ上ヨリ云ワタス法ノ書ツケ也簿書ハ書ツケ也〕

介甫言律是八分書是他見得〔今ノ律古ノ律トハ違ヘドモ其意ハ古ニ近シ八分ノ書今通用スレドモ其模様イニシヘニ近キヤウナルモノトタトヘ云意〕

世之病難行……〔世之病難行ヨリ不刑一人而可復マデノ意井田ノ法ニスル事也井田ニスレバ富人ノ田ヲトリアゲテ平均ニセネバナラズ然ルトキハ富人ハ難義ガレドモ悦ブモノ多シコレヲ急ニスルユエ不行ソロソロト富人モ難義セヌヤウニシテ其田ヲトリアゲテ平均ニシテ井田ノ法ヲスレバ行ル急ニスルト富人ノ田ヲアタヘヌトキハ刑セネバナラヌソロソロ難義セヌヤウニシテトリアゲルト一人ヲモ不刑シテ井田ノ法行ルト也〕

横渠先生曰古者有東宮……

族大人衆則服食器用固有不能齊〔同族ノ人大ニ衆リ居レハ服食器用不足ユエ同ヤウニハナラヌト也〕同宮合處則怨爭之風或作〔同族同宮スレバ父ト叔父ノツカヘヲカヘルト怨爭風俗ニナルト也〕

父子異宮……〔爲命士以上ハ一命ノ士ヨリ以上ト云事猶今世有逐位逐位ハ宮ヲ別ニセズニ一屋ノ中ニテ一ト間ヅツワタシテソレソレノ居間ヲヘキリテ合處セヌ事〕

近思錄卷之十

政事類

明道為邑……〔多衆人所謂法所拘者上ノ法令民ニ便ナラヌ事アリ明道法令ニカ、ハラズ民ニ便アルヤウニシソウナルモノニ其法令ヲタテ、行フヲ云為之未嘗大戻ハ法令ヲ立ルトイヘドモ其法令民ニ不便ユエ其通りニテハ不行少シハ明道ノ分簡ヲ加ヘテ行ヘドモ一向ニ法ヲ捨ルヤウナル事ハセヌヲ云謂之得伸其志則不可也十分志ス處ニハ非ズト也人雖異之不至指為狂也ハ法令民ニ不便ユエニ少シ法令ニ戻リテ民便ナルヤウニシテ行フ其少シ法令ニ戻ルヲ人アヤシメドモ法令ヲ捨ルニテハナキユエ少シ法令ニ戻ル處ヲ狂トハイハヌト也〕

伊川先生曰君子觀天水……

天西運水東流〔コレ中華ハカリニテノ事ナリ天ハ西ニ運ルハ運ニ不及水東流ハ中華悉ク皆東ニ流ル、也〕

天祺在司竹……〔司竹ハ監官ノ異名愛用一卒長ハヒトリノ卒長ト云意一人ノ小ガシラヲ愛シ用ルヲ云也遂治之無少貸ハ筍皮ヲ盜トキソノ罪ヲ治メルニ愛用ノ人トテ少シモユルカセニハセヌト也己正待之復初ハ其罪ヲ正シテ後ハ初ノ如ク愛用スル也〕

困論口……〔口將言而囁嚅ハ言ベキトキニイハントシテ敢テ不發意也若合開口時要他頭也須開口ハ云ベキトキニハ云ガヨキト云意韓文ノ意ヲ難スル也若合開口時要須開口ト他頭也ノ三字ヲ除キヨメバ意スミヨキ也〕

今之監司……〔監司ハ見附也下ニ州縣ノ事ヲイヘバ此監司ハ一州ノ監司也〕

人或勸先生……〔近貴ハ君ノ側近キ高位ノ人也〕

或問簿佐令者也〔令ハ邑長簿ハ令ノ下役〕

天資有量須有限……〔如鄧艾位三公年七十處得甚好及因下蜀有功便動了ハ鄧艾三公二位シテ身七十ニシテヨク處得スル蜀漢ヲ討平スルトキ功アリ其功ニホコル色アリト也便動了ハ功ノ爲ニ心ヲ動カサル意謝安聞謝玄破苻堅對客圍棋報至不喜及歸折屐齒強終不得也ハ謝安其姪謝玄ガ苻堅ヲ破ルトキ、テ客ト碁ヲ圍ムイヨイヨ苻堅ヲ破ルト云事告来ルニ碁ヲ圍テ喜色ナシカヘルニ及テ喜發シテ屐齒ヲ折ル初ヨリ喜ヲコラヘタレトモ一時ニ喜發タルヲ云終ニ喜ヲコラヘオフセル事ノナラヌヲ云意更如人大醉後益恭謹者

只益恭謹便是動了雖與放肆者不同其為酒所動一也ハ酒ニ酔テ至テ慤勤ナルヲ云インギ
シ上戸也恭謹モートホリガヨキ也恭謹スグルハ酒ノ爲ニ動カサル、ユエ也酒ニ酔テ放
肆ナルモノトクラベテハ酒ニ酔テ恭謹スグル方ガマシナレドモヒトシク酒ノ爲ニ動カ
サル、處ハ恭謹ニ過ルモ放肆ナルモ同時也又如貴公子位益高益卑謙只卑謙便是動了雖
與驕傲者不同其為位所動一也ハ高位ノ人卑謙ナルハヨキ事ナレドモ卑謙モートホリガ
ヨキ也位益高位ニアリテ益卑謙ニスグルハ位ノ爲ニ動カサル、ユエ也高位ニシテ驕傲
ナルヨリマシトイヘドモ卑謙ニスグルモ驕傲ナルモ位ノ爲ニ動カサル、處ハ同事也]